

【卒業生アンケート調査報告特集】

愛知大学創設期における卒業生の在学状況とその後の軌跡 ——昭和34年卒業生まで——

愛知大学名誉教授（地理学）、愛知大学東亜同文書院大学記念センター・元センター長 **藤田 佳久**

「愛知大学」が、終戦直後の1946年11月15日に天皇裁可による「旧制大学」として誕生して以来、本年で75年あまりを迎える。途中の1949年には全国の学制改革によって「新制大学」になり、従来の法経学部の文学部を加え、法文系大学としての骨組を築き、数多くの学問が学べるようになった。その後も学部、大学院、短期大学の新增設が続き、今や卒業生総数は15万人を超えるほどの規模となった。

初期の卒業生はすでに90歳を超え、亡くなられた方々も増加し、このままでは愛知大学の学生たちの愛知大学との記憶の歴史が消えるおそれが出てきたし、このままでは今後の「愛知大学史」にも支障を来たしかねないと思われた。そこで愛知大学東亜同文書院大学記念センターとしてはそれらを考慮し、まずは、昭和34年の卒業生までを対象にして、急遽卒業生に当時の大学生活とその後の人生の軌跡を問うアンケート調査を行った。しかし、予想以上に亡くなったり、病気などで回答数が少なく、別表のような数に留った。実施が10年遅かったと残念に思っている。昭和35年（1960）以降は昭和年代まで継続できたと計画している。

今回は時間と紙幅の関係で、「旧制大学」分と「新制大学」分のみを紹介し、二部、短大二部、短期大学分などは次号へ回させていただく。ご回答いただいた方々には、しっかりとご回答いただき、深く感謝し、ご協力に感謝申し上げたい。なお、他に情報がありましたら、当センターへお寄せ下されば幸いです。参考までにアンケート表を次頁に示します。

〔別表〕2019年度アンケート調査 発送および回収数(昭和22～34年)

2021年1月現在									
経済 愛大			西暦	和暦	一般的な 学生の現在 の年齢	発送数 (発送可能数)	アンケート 回収数	全卒業 生数	
昭和	壊滅から復興へ	創設期における軌跡	1947	22年	96歳	6	0	86	アンケート調査終了
			1948	23年	95歳	20	3	116	
			1949	24年	94歳	69	11	445	
			1950	25年	93歳	99	3	361	
			1951	26年	92歳	61	5	130	
			1952	27年	91歳	236	14	559	
			1953	28年	90歳	555	25	1087	
			1954	29年	89歳	344	19	686	
			1955	30年	88歳	365	38	747	
	高度経済成長	1956	31年	87歳	417	36	884		
		1957	32年	86歳	352	32	722		
		1958	33年	85歳	383	53	687		
		1959	34年	84歳	429	56	827		
					3336	295	7337	計	

愛知大学同窓生（昭和22～34年度卒業生）へのアンケート

アンケートの回答をお願いいたします。[] の中で該当する番号に大きく○をつけてください。複数回答でも結構です。また、自由記載へのご協力をお願いいたします。記入欄が不足の場合は別用紙への記載も可能です。よろしくお願いいたします。

A. あなたの入学時のことなどを差し支えない範囲でお答え下さい。

1	お名前 () 性別 [①男 ②女]
	入学年次は(昭和 年) 卒業年次は(昭和 年3月) 生年月日は(昭和 年 月) 現在 (2020.4.1) (歳)
2	入学前のお住まい (県都府道 市郡 町村) 入学後のお住まい (県都府道 市郡 町村) それは [①寮 ②下宿 ③アパート ④自宅 ⑤ほか ()]
3	入学される前の学校 [①国内 ②国外] 学校名()
4	本学への入学は [①卒業後 ②編入 ③ほか()] 本学の在籍年数(年間)
5	どのように本学を知りましたか
6	本学を志望した理由は
7	本学へ合格した理由は [①入試 ②推薦 ③面接 ④ほか ()]
8	授業料はどのように工面しましたか [①親から ②親戚・縁者から ③奨学金から ④アルバイトから ⑤ほか ()]
9	生活費はどのように工面しましたか [①親から ②親戚・縁者から ③奨学金から ④アルバイトから ⑤ほか ()]

B. あなたの入学先をお尋ねします。

1	(学部 学科 専攻) [①1年次入学 ②編入学 () 年次] キャンパスは [①豊橋 ②名古屋 → (③東邦高校跡 ④車道)]
2	入学した理由は
3	途中で転学部、転学科、転専攻した場合 (学部 学科 専攻)へ
4	理由は

C. あなたの在学中の学業は

1	学業の位置は [①学業が主 ②どちらかといえば学業 ③学業はまずまず ④学業は従]
2	その理由は
3	興味をもったり、面白かった学業分野や授業は
4	印象に残った先生とその理由は
5	ゼミを選択していた方は、どんな内容で、担当の先生は

6 卒業研究を行った方は、その研究テーマは、その理由は

7 先生との交流はありましたか。その交流内容は

8 図書館を利用していましたか。図書館をどのように活用されましたか

9 在学中の全体としての満足度は〔①大いに満足 ②まずまず満足 ③まあまあ ④あまり満足していない〕

10 その理由は

11 学業の成果がその後の人生に与えた影響は 〔①大いに影響 ②まずまず ③まあまあ ④あまり〕

12 どのような影響でしたか

D. あなたのクラブ・サークル活動は

1 クラブ・サークル活動に参加していた方は、クラブ・サークル名は ()

2 よく参加しましたか 〔①よく参加した ②まずまず ③あまり参加しなかった〕

3 どのような活動内容でしたか

4 クラブ・サークル活動をやってよかった点は or クラブ・サークル活動をしなかった理由は

5 クラブ・サークル活動はその後の人生に影響がありましたか

〔①大いにあった ②まずまず ③まあまあ ④あまりなかった〕

6 その理由や、良かった点は

7 学外のクラブ・サークル活動をされた場合、どのような活動でしたか

8 その後の社会参加との関わり合いがありましたか

E. 就職、就業について

1 卒業時に就職活動をされましたか

〔①かなり積極的 ②やや積極的 ③普通に ④あまりしない ⑤全くしない〕

2 その理由は

- 3** あなたの卒業時の就職環境は
 [①かなり厳しい ②やや厳しい ③普通 ④あまり厳しくない ⑤全く厳しくない]

- 4** 卒業時に就職先、分野を決めていましたか。なぜその分野でしたか

- 5** 希望した分野の職種、企業、機関名、組織へ就職できましたか
 [①はい ②なんとか ③意識せず ④意に反して]

- 6** それが可能であった理由は

- 7** 差し支えなければ、就職先の企業名、機関名、組織名をお答えください
 (所在地)

- 8** 就職のさい、お世話になった方は
 [①大学就職課 ②愛大卒業生 ③知人、友人 ④自力 ⑤就職先 ⑥ほか ()]

- 9** 就職先では「愛知大学卒業」という経歴は、意識したことはありましたか [①はい ②少し ③特になし]

- 10** その理由は

- 11** 転職をされていれば、転職先をお答えください。

①(会社名: /業種: /所在地:)
 ②(会社名: /業種: /所在地:)

- 12** 定年後、再就職されていれば、就職先をお答えください。

①(会社名: /業種: /所在地:)

- 13** 就職先や社会人として、愛大卒業生は他大学出身者と比較してどのように評価できると思われますか

- 14** 愛知大学卒業生を他大学卒業生と比較すると、どのような点に特徴がありますか (ありましたか)

F. 愛知大学卒業生として

- 愛知大学の設立主旨は、「世界平和と日本文化への寄与を根幹とし、国際的教養をもつ人材育成、地域社会文化への貢献」であり、さらに「知を愛する真理の探求」、湧き上がった「自由、受難」などが掲げられています。これらの大学の理念が、あなたにどのように反映されたかについてお教え下さい。

- 愛知大学のルーツは上海にあった「東亜同文書院」にあり、そのため愛知大学は戦後すぐに設立認可されました。
2 当初、書院生や他の学校からの編入、入学生も多数にのびりました。東亜同文書院生や他の外地校からの編入、入学生との交流はありましたか [①交流があった ②少しあった ③なかった]

- 3** 交流があられた方は、具体的な内容をお答えください。

3-2 *愛知大学開学2年目に、愛大学生たちと豊橋市民は、空襲被害がなかった市公会堂で市民との文化交流会が開催されました。それによって、各地から集って来ていた愛大学生たちがまとまったと言われています。その文化交流会の様子を知っていますか [①知っている ②知らない]

3-3 ご存じの方は、知っている内容をお答えください。

4 皆さんの在学中、あるいはその前後にいわゆる「愛大事件」があり、本間学長は最後まで学生の弁護に徹しました。この事件に対して、あなたは知っていますか [①よく知っている ②多少 ③ほとんど知らない]

5 「愛大事件」を知っている方（上記①②の方）は、どのように感じられましたか

6 あなたは母校としての愛知大学に [①大変関心 ②多少関心 ③普通 ④あまり関心ない]

7 その理由は

8 あなたは愛知大学の情報を何から得ていますか
[①テレビ、新聞 ②大学のホームページ ③「愛大通信」 ④さまざまな会合 ⑤受験雑誌
⑥同窓生 ⑦同窓会報 ⑧愛大新聞（豊橋、名古屋） ⑧ほか（ ）]

7 愛知大学にどのような情報を期待しますか

8 あなたは同窓会（支部活動も）に参加していますか [①はい ②よく ③時々 ④いいえ]

9 その理由は

10 同窓会の魅力をどのようにアップしたらよいとお考えですか。要望や提案があればご自由に

10 今日の愛知大学をどのように見ておられますか。要望や提案があればご自由に

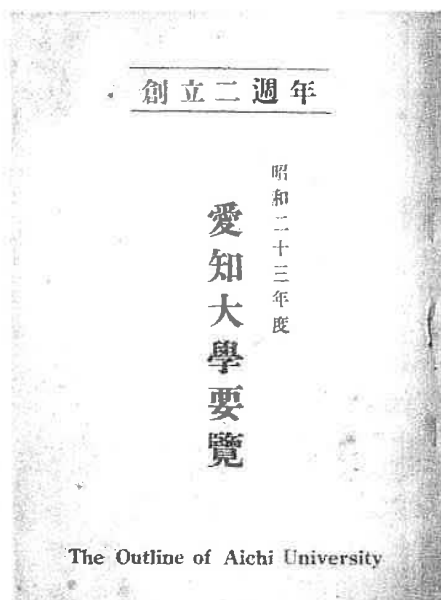
11 愛知大学の後輩の学生に伝えたいことをご自由に

12 人生をふりかえて、あなたは [①大いに満足 ②まずまず満足 ③普通 ④少し不満 ⑤大変不満]

13 満足度と、愛大卒業生との関係は [①大いに関係 ②多少関係 ③普通 ④あまり関係ない ⑤全くない]

14 最後にあらためて、あなたが愛知大学から得たものは何ですか。あれば座右の銘もお答えください

15 あなたが、あなたの人生経験や研究をまとめ、自費出版も含めて刊行したものがあればご紹介ください



昭和23年度愛知大学要覽 (1948.11)



愛知大学新聞第1号 題字および学長発刊の辞 (1948.9.15)



本間豊一第2代学長
(1950.6~1955.11)



新制大学第2回入学生を迎えての学長告辞(愛大新聞13号 1950.5.15・左共)

【卒業生アンケート調査報告特集】

1. 愛知大学創設期における入学生の動向について

愛知大学名誉教授（地理学）、愛知大学東亜同文書院大学記念センター元センター長

藤田 佳久

愛知大学東亜同文書院大学記念センター事務室

佐原 陽子

1. はじめに——その創設経過にも触れながら——

本調査報告は、創設期の「旧制愛知大学」への入学生たちの予科および学部への入学と編入学にみられる特性とその動向を明らかにしようとしたものである。

周知のごとく、愛知大学は終戦直後の昭和21年（1946）11月15日に上申に対し、天皇の裁可により、今日からみれば「旧制大学」として認可された。当時の大学の開設は天皇の裁可が必要であり、それが今日のように文科省の認可に変更されたのは、昭和24年（1949）からの、いわゆる「新制大学」からで、高等教育へも民主化が進み、旧制大学以下の専門学校などが昇格し、この「新制大学」が多数誕生した。その数があまりに多かったのもこれらの新制大学は「駄弁大学」として揶揄された。

戦後誕生したとはいえ、愛知大学の誕生は、そのような駄弁大学ではなく、「旧制大学」として誕生したところに特徴があった。その背景には、「旧制大学」として誕生した愛知大学は、その出自の根源に1901年から1945年まで中国上海にあった「東亜同文書院」（1939年より大学へ昇格）との関係があった。東亜同文書院大学は1945年の終戦により半世紀の歴史を閉じるが、最後の本間学長は敗戦を見越して、それより前に富山

県の呉羽紡績工場（戦時中は飛行機工場）の一角に書院大学の分校を開き、13人の教授を派遣して上海と両校舎体制をつくった。そして終戦の後、分校長の要請にこたえた当時の吉田茂外務大臣の認可により、呉羽で書院大学を再興継続して学生を集めた。しかし、その年末、東京裁判への出廷を要求された近衛文麿が自殺を遂げた。近衛は、書院大学の財政を支えた東亜同文会の会長であったため、同会はGHQによって閉鎖され、書院大学はその基盤を失った。当時まだ上海にいた本間学長は、すぐに動き、呉羽分校長にすぐかわりの校地をさがすように連絡し、最終的に呉羽校舎の神谷教授が豊橋の陸軍予備士官学校跡地（もとは陸軍第15師団跡地）をタッチの差で確保できたという経過があった。

そしてここへ翌年5月、上海から引き揚げてきた本間学長や書院教授たちが参集し、8月には文部省の認可を得ている。それが可能であったのは、呉羽分校の教授会が閉校後も継続され、新たな大学像を議論検討した骨格を利用し、本間学長が書院大のほか、旧京城帝大や台北帝大などの外地の優れた教授たちを集め、内地の旧制大学にふさわしい陣容を築いたことにあった。それが1946年（昭和21年）11月15日の開学承認となった。

誕生地となった豊橋では、当時の 6 大都市以外では初めての画期的な大学立地となり、市長や財界からは多くの支援があり、学生たち主催の市民との文化交歓会が開講後、なんと 2 か月後に開催されるほど学生たちにも熱が入った。

こうして、外地からの無一文での引揚げながら、頭脳は一流を用意し、校地校舎を確保し、同文会からの図書の提供もあって、超短期間で「旧制大学」の開学となった。これ以降の引揚げ学生は、文部省の誘導もあって愛知大学へ集中し、総合引揚げ大学の様相を示した。

戦争中の学徒出陣や軍関係学校の学生たちが空白となった勉学を取り戻そうとしたり、東京など大都市では、戦災で勉学ができない大学生たち、大学を GHQ によって閉鎖された神宮皇学館大学生たち、など 80 校あまりからの入学があった。

2. アンケート調査

こうして誕生した「旧制愛知大学」へは、書院生を軸にしながらも多様な学生たちが開講された予科と学部へ入学してきた。学業半ばで入学する学生も多く、編入生も多いため、新設校のように新 1 年生から開始するわけではなく、学部では最上級生の 3 年生としての編入学生もいて、開学と同時に、予科と学部が同時並行、つまり各学年がそろって開講となった。いきなり全学年がそろった一大学そのものが誕生したわけである。受け入れる教授側も準備はたいへんであったものと思われる。カリキュラムだけでなく、教室、教具の整備、テキスト、ノート、チョークや筆記具、紙、ガリ版印刷機、寮の整備、他など付帯設備、備品も物不足の

中、用意をしなくてはならなかったからである。

このような当時の学生生活は、あまり記録に残っていない。『愛知大学五十年史』では、とりわけ学生に関する記述が少ない。そこで、どんな出自か、編入学の経路、なぜ愛知大学を選び、何を学び、どんな影響を受けたか、大学の歴史を知ったか、クラブ活動、ゼミの様子、どんな卒論執筆、教授たちとの交流、就職活動や就職先、そこでの愛大生の評価。人生の満足度と愛知大学との関係など、また同窓会や後輩先輩たちとのこと、など、今まで不明であった大学生活や社会生活についてアンケートを試みた。

そこで初回の今年、昭和 34 年の卒業生までを対象とした。いわば、創設期の愛知大学についてである。当時の方は高齢化が進み、結果から言えば、10 年遅かったといえる。しかし、回答してくれた方々はかなり真剣に対応してくれたと思われる。それらについては、後半に触れることにする。

3. 「旧制愛知大学」への編・入学について

そこでここでは、まず「旧制愛知大学」への編・入学状況を明らかにするところから始めたい。ところで、新制愛知大学となると様々な学部、学科、二部、短大二部、女子短大、大学院、など一気に多様化する。今回は、昭和 34 年までだが、その整理に時間がかかり、また紙幅の制約もあり、旧制と新制の学部だけに絞り、そのほかは次年度に紹介することにした。旧制大学はそれらの原点として位置づけ、整理し、検討することにした。

参考までに、その後の愛知大学の学部、二部、短大二部、女子短大などを一覧した表

表1. 卒業学部学科年別統合コ一ト

[illegible]

(表1)を示しておく。これは今後のアンケート調査の対象を決めるさいの目安になる。ここで示す「旧制愛知大学」の学部部分は、この左側の部分で、昭和28年までの部分である。愛知大学の出発点であり、原点である。

そこで、最初の卒業生から全体像を見てみる。表2は、昭和23年の卒業生である。ということは昭和22年に学部3年生に編入し、翌同23年に卒業したということになる。いずれも書院生で、書院42期がもっとも多くて、40, 43期が1人ずつ、不明が3人である。表3はそれぞれの所属学科を示し、書院生は経済学科入学が多かったことがわかる。ただし、多くの該当者はなくなったり、高齢化でアンケートはできなかった。

次の表4は同じく昭和24年の卒業生である。書院出身で16人。やはり経済学科が多いが、若干法政学科生が見え、法学科も選べるようになったことがわかる。うちアンケート回答者も経済、法政各1人ずついる。

表5は昭和25年の卒業生で、書院の43から45期生で、学部予科、専門部とみられるが、不明が80人もいる。やはり経済学科が多い。予科への編・入学が多く、書院では学部教育が受けられなかった状況がわかる。表6はそれを細分化して示した。ここでも経済学科へ進んだ学生が多い。

表2. 昭和23年卒旧制法経学部経済【豊橋】

※同窓会名簿による集計

学部学科		アンケート	人数
書院40期	1	0	13
書院42期	8		
書院43期	1		
不明	3		
23年卒 旧制法経学部経済【豊橋】			

表3. 昭和24年卒旧制法経学部【豊橋】(大分類)

※同窓会名簿とアンケート結果による集計

学部学科		人数
書院42期	1	5
書院43期	8	
書院44期学部	7	13
不明	2	
18		18

表4. 昭和24年卒旧制法経学部【豊橋】(小分類)

※同窓会名簿とアンケート結果による集計

学部学科		アンケート	人数
書院42期	1	S24旧制法経学部経済科	1
書院43期	8	S24旧制法経学部法政科	1
		S24旧制法経学部経済科	7
書院44期学部	7	S24旧制法経学部法政科	1
		S24旧制法経学部経済科	5
不明	2	S24旧制法経学部法政科	2
			2
18			18

表5.

昭和25年卒旧制法経学部【豊橋】(大分類)

※同窓会名簿とアンケート結果による集計

学部学科		学部学科	人数
書院43期	1	旧制大学予科	31
書院44期学部	2		
44期専門	17		
45期専門	13	不明	91
45期予科	9		
不明	80		
122		122	122

表6.

昭和25年卒旧制法経学部【豊橋】(小分類)

※同窓会名簿とアンケート結果による集計

学部学科		学部学科	アンケート	人数
書院43期	1	S22旧制大学予科	1	1
書院44期学部	2	S22旧制大学予科	1	2
		不明	1	
書院44期学部	17	S22旧制大学予科	14	5
		不明	3	9
45期専門	13	S22旧制大学予科	13	3
		S22旧制大学予科	7	10
45期予科	9	不明	2	7
		S22旧制大学予科	25	1
不明	80	不明	55	1
		S22旧制大学予科	25	7
		S22旧制大学予科	25	18
		S22旧制大学予科	25	15
		S22旧制大学予科	25	40
122		122	122	122

表7は昭和26年の卒業生である。表の左下の名古屋工業専門学校以下4人は書院以外からの入学生で、半分は予科へ、残る半分は学科へ進入学したことなどがアンケートからわかる。そして、表8は予科からの進学先を示している。大学院の設置もあって、「不明」分の2人は、早速大学院へ進学している。

表7.

昭和26年卒旧制法経学部【豊橋】(太分類)

※同窓会名簿とアンケート結果による集計

学部学科		学部学科		人数	人数
書院43期	1	旧制大学予科	65	旧制法経学部法政科	34
書院44期学部	1				
44期専門	1				
45期専門	11				
45期予科	2				
46期専門	2	不明	65	旧制法経学部経済科	96
46期予科	9				
不明	99				
名古屋工業専門学校	1				
台北帝大予科1	1				
天理語学専門学校華語科	1				大学院法学研究科公法学 専攻修士課程(豊橋)
京都繊維専門学校	1				
	130		130	130	2

表8.

昭和26年卒旧制法経学部【豊橋】(小分類)

※同窓会名簿とアンケート結果による集計

学部学科		学部学科		アンケート	人数	学部学科	
書院43期	1		1	S26旧制法経学部経済科	1		
書院44期学部	1	S22旧制大学予科	1	S26旧制法経学部経済科	1		
44期専門	1	S23旧制大学予科	1	S26旧制法経学部経済科	1		
45期専門	11	S23旧制大学予科	11	S26旧制法経学部法政科	2		
45期予科	2	S23旧制大学予科	2	S26旧制法経学部経済科	9		
46期専門	2	S23旧制大学予科	2	S25旧制法経学部経済科	2		
46期予科	9	S23旧制大学予科	2	S26旧制法経学部経済科	2		
不明	99	S23旧制大学予科	9	S26旧制法経学部法政科	1	5	
		S23旧制大学予科	9	S26旧制法経学部経済科		4	
		S23旧制大学予科	37	S26旧制法経学部法政科		9	
				S26旧制法経学部経済科		28	
				S26旧制法経学部法政科		16	
			62	S26旧制法経学部経済科		46	s30大学院法学研究科公法学 専攻修士課程(豊橋) s37大学院法学研究科公法学 専攻修士課程(豊橋)
名古屋工業専門学校	1	S23旧制大学予科	1	S26旧制法経学部法政科	1	1	1
台北帝大予科1	1	S23旧制大学予科	1	S26旧制法経学部経済科	1	1	
天理語学専門学校華語科	1		1	S26旧制法経学部法政科	1	1	
京都繊維専門学校	1		1	S26旧制法経学部経済科	1	1	
	130		130	5	130		

表9は、昭和27年の卒業生である。アンケートも回答があり、6人が可能になった。いずれも旧制予科から経済学科へ進学したことがわかる。表10はその進学先を示した。ほかの表もそうであるが、これらはいずれも同窓会名簿で確認する作業を行ったものである。大学院法学研究科へさらに1人進学している。

表9

昭和27年卒旧制法経学部【豊橋】(大分類)

※同窓会名簿とアンケート結果による集計

人数	学部学科	学部学科	人数	人数			
40期予退学(天津中日学院)	1	旧制大学予科	98	旧制法経学部法政科	61		
書院43期	1						
書院44期学部	1						
書院44期専門	1						
書院45期予科	1						
書院46期専門	9						
書院46期予科	10						
名簿未確認書院生	1						
不明	159	不明	90	旧制法経学部経済科	127	大学院法学研究科公法学 専攻修士課程(豊橋)	1
在満師範学校	1						
京城経済専門学校	1						
浜松工業専門学校	1						
愛知第二師範学校	1						
188	188	188					

表10

昭和27年卒旧制法経学部【豊橋】(小分類)

※同窓会名簿とアンケート結果による集計

人数	学部学科	人数	学部学科	アンケート	人数	学部学科
40期予退学(天津中日学院)	1	1	S27旧制法経学部経済科	1	1	
書院43期	1	1	S27旧制法経学部経済科	1	1	
書院44期学部	1	1	S27旧制法経学部経済科	1	1	
書院44期専門	1	S22旧制大学予科	1	S27旧制法経学部法政科	1	
書院45期予科	1	1	S27旧制法経学部経済科	1	1	
書院46期専門	9	S24旧制大学予科	9	S27旧制法経学部経済科	8	
書院46期予科	10	S23旧制大学予科	1	S27旧制法経学部法政科	1	
		S24旧制大学予科	9	S27旧制法経学部経済科	2	
			1	S27旧制法経学部法政科	7	
名簿未確認書院生	1	S24旧制大学予科	1	S27旧制法経学部経済科	1	1
		S23旧制大学予科	1	S27旧制法経学部経済科	1	
		S24旧制大学予科	71	S27旧制法経学部法政科	26	
		S25旧制大学予科	2	S27旧制法経学部経済科	45	
不明	159		85	S27旧制法経学部法政科	1	
				S27旧制法経学部経済科	30	
				S27旧制法経学部法政科	1	s35大学院法学研究科公法学専攻修士課程(豊橋)s35
					54	
在満師範学校	1	S24旧制大学予科	1	S27旧制法経学部経済科	1	1
京城経済専門学校	1	S24旧制大学予科	1	S27旧制法経学部経済科	1	1
浜松工業専門学校	1	S24旧制大学予科	1	S27旧制法経学部経済科	1	1
愛知第二師範学校	1	1	1	S27旧制法経学部経済科	1	1
188		188		6	188	

表 11 と表 12 は昭和 28 年の卒業生で旧制大学の最後である。法政科から文学専攻科へ転学したり、経済学科から名古屋第二部へ移籍したり、経済学科から 4 人が大学院経済学研究科へ進学するなど、さらに研究しようとする意欲がこの時期に生まれていることがわかる。アンケートによる 6 人の多様化した去就もわかり、旧制大学の最後は、変化に富んでいたことがうかがわれる。

表 11.

昭和28年卒旧制法経学部【豊橋】(大分類)

※同窓会名簿とアンケート結果による集計

	人数	学部学科		学部学科	人数		人数
書院45期専門	1	旧制大学予科	166	旧制法経学部法政科	93	専攻科文学専攻科国文学専攻(豊橋)	1
書院46期予科	4						
不明	285						
愛知県立豊橋中学校	1						
広島陸軍幼年学校一陸軍予科士官学校	1	不明	130	旧制法経学部経済科	203	法経学部二部法学科(名古屋)	1
愛知県立刈谷中学校	1						
明倫中学校	1						
第八高等学校	1						
愛知第二師範学校	1						
	296		296		296		

表 12.

昭和28年卒旧制法経学部【豊橋】(小分類)

※同窓会名簿とアンケート結果による集計

人数	学部学科	人数	学部学科	アンケート	人数	学部学科	人数
書院45期専門	1	S23旧制大学予科	1	S28旧制法経学部経済科	1		
書院46期予科	4	S23旧制大学予科	2	S28旧制法経学部経済科	4		
		S24旧制大学予科	1				
		S25旧制大学予科	1				
		S24旧制大学予科	2	S28旧制法経学部法政科	1		
				S28旧制法経学部経済科	1	S37法経学部二部法学科(名古屋)	1
		S24,S25旧制大学予科	2	S28旧制法経学部法政科	2		
		※両方に在籍					
		S25旧制大学予科	153	S28旧制法経学部法政科	50		
				S28旧制法経学部経済科	103		
不明	285			S28旧制法経学部法政科	1	S38専攻科文学専攻科国文学専攻(豊橋)	1
					35		
					2	S30大学院経済学研究科経済学専攻修士課程(豊橋)	2
					1	S31大学院経済学研究科経済学専攻修士課程(豊橋)	1
					1	S39大学院経済学研究科経済学専攻修士課程(豊橋)	1
					88		
愛知県立豊橋中学校	1	S25旧制大学予科	1	S28旧制法経学部法政科	1		
広島陸軍幼年学校一陸軍予科士官学校	1	S25旧制大学予科	1	S28旧制法経学部法政科	1		
愛知県立刈谷中学校	1	S25旧制大学予科	1	S28旧制法経学部経済科	1		
明倫中学校	1	S25旧制大学予科	1	S28旧制法経学部経済科	1		
第八高等学校	1	S25旧制大学予科	1	S28旧制法経学部法政科	1		
愛知第二師範学校	1	S25旧制大学予科	1	S28旧制法経学部法政科	1		
296		296		6	296		

最後に参考表として表 13 を示す。これはすでに触れた「旧制愛知大学」最初の学部最上級の 3 年生への編入学生 13 人の就職先を示したものである。この 3 年生への編入生はほぼ東亜同文書院大学出身で学徒出陣などにより東亜同文書院大学卒業までできなかった学生たちで、「旧制愛知大学」の創設により編入学したものである。在学期間はほとんど 1 年間だけであったが、卒業生がどこへ就職したかを、関係資料から調査して示した。終戦直後で、民間企業はまだ本格的にスタートできていない時代ではあったが、当時としてはそれぞれ国家官庁やマスコミ、研究所、教員、著名な企業、などに就職しており、その時代を反映していることがわかる。書院出身の卒業生はこの後も続くが、この状況をベースにしながらも、次第

にまとまりを見せてくる大手民間企業などへも就職し、さらに学問的世界へ取り組む卒業生もあらわれていくことがわかる。また、次第に帰国してくる書院卒業生が増えてくると、戦前からの組織化も進み、中にはそのような卒業生からの就職先への引き合いも見られるようになった。しかしそれは、書院出身の卒業生だけでなく、例えば古河系企業への就職など、かつて書院生には当たり前の就職先であった企業などへ「旧制」、「新制」愛知大学の卒業生の就職にも及んでいく状況もあった。この表 13 は、終戦直後に誕生した「旧制愛知大学」、そしてその後の「新制愛知大学」へと続く、愛知大学の最初の卒業生の就職状況の原点を示すものであって、その点ではきわめて興味深いといえる。

表13. 昭和23年旧制大学卒業生

※同窓会名簿による

	書院	学部学科名	校舎	昭和34年度会員名簿より
1	書院生40期生	旧制法経学部経済科	豊橋校舎	中国研究所
2	書院生42期生	旧制法経学部経済科	豊橋校舎	通商産業省通商局輸入第一課(外務省)
3	書院生42期生	旧制法経学部経済科	豊橋校舎	中部日本新聞社名古屋本社
4	書院生42期生	旧制法経学部経済科	豊橋校舎	東邦高等学校
5	書院生42期生	旧制法経学部経済科	豊橋校舎	日本生産性本部中小企業企業部主事
6	書院生42期生	旧制法経学部経済科	豊橋校舎	東京国税局調査査察部
7	書院生42期生	旧制法経学部経済科	豊橋校舎	中部日本新聞社編集局
8	書院生42期生	旧制法経学部経済科	豊橋校舎	通商産業省通商局農水産課
9	書院生42期生	旧制法経学部経済科	豊橋校舎	大東測機(株)
10	書院生43期生	旧制法経学部経済科	豊橋校舎	出光興産(株)関西支店
11	不明	旧制法経学部経済科	豊橋校舎	
12	不明	旧制法経学部経済科	豊橋校舎	名古屋鉄道(株)本社
13	不明	旧制法経学部経済科	豊橋校舎	豊橋市立羽田中学校

【卒業生アンケート調査報告特集】

２．創設期の愛知大学卒業生に関する調査報告

——「旧制愛知大学法経学部」、「新制愛知大学法経学部、文学部」の卒業生たち——

愛知大学名誉教授（地理学）、愛知大学東亜同文書院大学記念センター・元センター長 藤田 佳久

第1章 旧制愛知大学卒業生たちの在学時代とその軌跡

1. はじめに

本研究は、昭和天皇の裁可により、終戦直後の1946年11月15日に旧制大学として認可された愛知大学の創設期に入学した学生たちの在学状況と、卒業後の軌跡をアンケート調査により把握しようとしたものである。ここでの創設期は、1959年（昭和34年）の卒業生までとした。それはその後が始まる日本経済の高度経済成長期の前段階までの期間とした。高度経済成長期以降は今後も継続的に検討する計画である。

前稿¹では、その全体的背景も視野に入れ、愛知大学の創立以降の推移を日本全体の動きも考慮して示した。それはまさに終戦直後から始まる戦後日本の動きとも重なる。その中で本稿の対象とする時期が、その前半は昭和26年（1951）までのGHQによる占領下の時期と、それ以降の自立を目指す萌芽期に当たることがわかる。それは敗戦後の衣食住の貧しい時代とそこからはい出そうとする時代であった。そのような中で旧制大学への進学は、その進学率が元来極めて低い中で、戦時中に学徒出陣などによって学問の道を閉ざされた学生たちが、戦後の厳しい空腹と居住条件、そして経済的困難な環境の中で、その空白を埋めるべ

く学問の道と戦後の新たな道を目指そうとした厳しい状況下で進められたといえる。

そのような厳しい状況の中で、なぜ愛知大学が認可され誕生し、かつ学生たちを受け入れたかについては、まさに特殊かつ極めてドラマチックな歴史的背景があった²。

その最大の背景は、上海にあった日本の学校「東亜同文書院大学」の引き上げの受け皿として愛知大学が開設されたことにあった。東亜同文書院（1939年から大学へ昇格）は、その前史として荒尾精が日清間の貿易実務者養成を目指すべく清国との共存共栄を図るビジネススクールとして1890年設立した日清貿易研究所を上海でさらに発展させる計画に、近衛篤磨が日清間の承認下で開設した南京同文書院を併合して、1901年に上海に創設された。それは清国との共存共栄の理念を持ったより高度なビジネススクールの誕生であった³。しかも、荒尾や近衛の工夫と努力により、書院生は原則各県から派遣される仕組みの県費生制度により、明治政府の資金援助が乏しい中、独立経営を目指す私立学校として優秀な人材を全国から集めた。清語や英語の語学徹底や実践的な中国を中心とした多様な貿易関係の学科目の習得や東アジア大調査旅行

などをベースに、多くの人材を養成し、戦後においては日本の高度経済成長にも多大な貢献を果たした⁴。

それが 1945 年の敗戦により、上海では閉学となり、前年、本間学長が敗戦を予想して富山県呉羽に開設した呉羽分校が、戦後の外務大臣吉田茂の承認により呉羽で復活したものの、経営母体である東亜同文会の閉鎖により分校も閉学とせざるを得なくなった。しかし、上海で書院大学の閉鎖業務にあたっていた最後の書院大学学長の本間喜一は、日本国内にそれに代わるあらたな受け皿の新キャンパス設置を呉羽分校のスタッフに要請し、その過程で分校の神谷教授が豊橋の陸軍予備士官学校跡地（旧陸軍第 15 師団跡）をタッチの差で確保し、このキャンパスを東亜同文書院大学の受け皿にし、GHQ 監督下で新名称「愛知大学」の礎とした。6 大都市以外での初の旧制大学の誕生で、本間喜一の指導の下、1946 年帰国した本間学長らは、旧制大学にふさわしい人材をそれまでの東亜同文書院大学のほか外地の帝国大学や専門学校にも求め、呉羽分校で戦後も継続されていた同分校教授会による戦後の新大学構想の支援も受け、同年 8 月には早くも文部省の認可を受け、同年 11 月 15 日に天皇の裁可を受けて発足した。この短期間での大学認可はその前史の書院の存在とその継承が認可にあたり評価されたことは間違いない。

こうして発足することになった「愛知大学」は、大陸からまさに無一文で引き揚げてきた厳しい環境の中で、新たな用地と旧東亜同文会からの図書を受け、あとは本間学長が集めた優れた教授たちのすぐれた人材こそが認可の決め手になったように思わ

れる。「愛知大学」は文字通り優れた教授人材ゆえに誕生したともいえた。実際、後述するように旧制大学として開学した「愛知大学」への志願者は、その多くが「優れた教授陣」をその最大の理由に挙げ、しかもそれが引揚げてきた東亜同文書院大学の賜物であることを認識している。

2. アンケート調査の実施

本研究の方法は、アンケート調査による。前稿で指摘したように、その実施理由は、愛知大学の歴史書、とりわけ『愛知大学五十年史』は開学 50 年を記念して編集、刊行された大作である⁵。しかし、大学の設置からの半世紀は、大学自体の諸制度が次々と変化したせい、内容的には愛知大学制度史といった風情で、その中には本来の中心であるべき学生への視点が欠けていて、学生がどのように学び、楽しみ、巣立ったのちどのような軌跡をたどり、どのような人物に発展したのかなどに関する情報が欠落していた。当時筆者も最後の方の段階で総合郷土研究所についての誕生から活動について原稿依頼され、執筆したが、全体の構想にはかかわっていなかった。同研究所の誕生をめぐる貢献者の史実と展示施設の開設および研究所の諸活動などで少し幅を作る努力はしたが、学生の閲覧、参加、利用、見学会などについては触れられず、制度や組織の記述が中心になった。

しかし、大学 50 年の中でどんな教育をし、どんな学生や卒業生を作ったかは文字通り大学の実績であり、宝物であるはずである。『愛知大学五十年史』にはそれが欠けていた。それについては卒業生が気付き、むしろ同窓会がその部分を別のかたち、写真集

や文集として仲間同士の絆としてまとめている。つまり、大学主導の五十年史に自分たちが登場しないことへの不満を感じていたということであろう。それは、当時の編集者の生真面目さの反面幅のなさを物語っているといえ、逆に同窓生の眼が優れていたといえる。

そこでそれをカバーするために、今回卒業生へのアンケートの必要性を感じ、実施することにした、かつて筆者は東亜同文書院生へも同じような趣旨でアンケートを実施したことがあった。約5千名の卒業生が、高齢化、戦死や病死もあって1400名の生存者の方々へ減少した時であった。しかし、アンケート実施時期にはとくに高齢化が進み、回答のできない方々が多く、回答を寄せてくれた方々は400名ほどに留まった。しかし、20期代以降の元気な方々が待っていましたとばかり熱心に協力していただいた。それにより、従来とりわけ、戦後のイデオロギー時代に生み出された観念的な書院への視点の虚像が明らかになった点は大きな収穫となった。しかし、アンケートの実施が10年遅かったと反省した。10年早ければ、回答率は過半に達したのではないかと思ったからである。

この同じ思いは、今回のアンケート実施にもあった。時期的に多くの古い卒業生は高齢化が進み、亡くなられた方々も多く、回答がもらえないのではないかと危惧したからである。本来なら、『愛知大学五十年史』の次の年史のプロジェクトが計画され、そこが今度は幅広く学生の視点も踏まえて実施すべきであろうが、現在、そのようなプロジェクト計画はなく、存在してもまた制度史で固める可能性もあろうということで、

多くの書院生が愛知大学へ編入入学した事実を踏まえ、それをさらに拡大して、今回アンケートを実施した。今のうちに卒業生に大学との関係を確認しなくては、愛知大学史が本来含むべき内容は半分消失してしまうだろうという恐れからである。

そこで急遽、アンケートを実施したが少し焦りもあり、設問も若干整備する必要があった。しかも危惧した通り、回答を返送してくれた方々は前稿でも示したように400名を切った。多くの方々がすでに鬼籍に入り、または高齢化の中で回答ができず、また回答いただいた方々も「忘却した」という返事が目立った。やはり、10年遅かった点は否めない。しかし、返送してくれた方々の中では詳細な記録を残してくれたケースも多く。このような調査を待っていてくれた方々も多かったのはうれしいことであった。

3. 「旧制愛知大学」の卒業生アンケートの結果

(1) 「旧制愛知大学」誕生の背景

ここでは戦後の愛知大学の出発となった「旧制愛知大学」の卒業生へのアンケートから見てみる。

戦後のGHQによる教育改革は六・三・三制への再編が進められ、戦前の複線化された学校教育制度は、再編、単線化へ改革された。詳細は省くが、特に小学校の上に新制中学校が義務教育化されて新設され、各市町村は戦後の財政難の中、新校舎の新設や確保に大変であった。旧制中学校の5年制は、この過程で3年制の義務教育の新制中学校とその上にのる非義務制である3年制の高等学校へ分離され、中等教育の柱と

なった。

一方、高等教育の旧制高校や旧制大学は、原則 4 年制の新制大学へ集約され、師範学校も新制大学へ再編された。それらの多くは昭和 24 年 (1949) に文部省により新制大学として全都道府県を含む全国各地にその配置が承認され、急増された多くの大学は一時、「駅弁大学」と揶揄されたこともあった。しかし、これもそれまでの高等教育の偏在をなくし、地域間の格差をなくそうとする大きな改革であった。旧制大学の予科や旧制高校自体の教養課程的部門はアメリカ流の教養教育課程 (教養部) として新制大学の専門課程と並び設けられた。そこには偏在的に配置されていた旧高等教育機関をより広い配置へ転換し、新たな人材育成を図ろうとする狙いがあった。

愛知大学は昭和 21 年に認可されており、「旧制大学」としてスタートした。その背景は前述したが、もう一つ、それを支えた条件があった。それは、終戦直後、海外の諸高等教育学校からの引揚げ学生は、帰国しても国内に入るべき学校がなかった。そこで文部省はとりあえずそのような次々と帰国する学生たちに既存の高等教育機関である「旧制大学」への入学を開放した。しかし、帰国は海外にいた日本人住民と同様に一斉ではなく不規則であり、しだいにその数も増えたため、受け入れ大学に混乱も生じ、問題となった。

そんな中で旧制「愛知大学」の設立は海外にあった書院大学の引き上げがベースにあり、帰国学生の受け入れ大学として注目され、書院以外の学生たちへも旧制「愛知大学」への入学が推奨された。その結果、「旧制愛知大学」は書院生をベースとしな

がらも、国内のいくつかの旧制大学と多くの海外からの旧制大学や高等教育機関の合計 80 校あまりからの学生を受け入れた。学業半ばでの学徒出陣学生の編入や入試による入学生らが「旧制愛知大学生」になった (表 A-1)。入試はそれなりにしっかり行なわれたという。

こうして「旧制愛知大学」の歴史は始まったのである。以下のアンケートはその一端を示している。

(2) アンケートの内容

そこで次に今回行ったアンケートの問の内容を示す (表は前掲)。

ここに示したのはアンケートの内容である。大きくは A 系列から F 系列まで 6 分野に集約した。A 系列は入学時における個人情報で、出自、出生年などの個人情報と愛知大学へのアクセス情報への問い、さらに入学時及び、学生生活の費用などを問うてある。終戦直後の苦しい時代の中での大学生活への資金の確保状況への問いもある。B 系列は専攻分野への問である。この時期の後半、本部豊橋校舎とは別に勤労青年たちのために名古屋進出もあって、旧東邦高校校舎の一角、さらには旧中京女子短大跡の車道校舎が利用された。空襲で焼失した市街地の中から利用できる校舎を求めるのは大変であった。C 系列は在学中の学業状況について問うた。その中で印象に残った授業やゼミ、卒論、教員たちとの交流、それらの満足度などを問うた。D 系列はクラブ活動で、戦時から解放された学生たちの自由度を問うた。E 系列は卒業時の就職状況を問うた。当時の不況下での学生たちの対応を追った。F 系列は愛知大学卒業生とし

合計	三年	二年	一年	
157	66	37	54	文書院 東亜同
11	3	2	6	経専 北京
10	3	6	1	帝大 台北
7	4	3	0	建大 満洲
6	1	2	3	大学 日本
6	1	0	5	館大 皇学
5	1	1	3	大学 明治
202	27	59	116	その他
404	106	110	188	合計

〔出典〕『十年史』三十九ページ

〔表A-1〕一九四六年度 予科転入学者の出身校

〔表A-2〕創立第2年度(1947年度)
予科新入学 入学試験

	志願者数	合格者数
第1学年新入学	1,093	234
第1学年転入学	28	23
第2学年転入学	66	32
第3学年転入学	20	15

〔出典〕『二十年史』71ページ

表A-3. 参考表1. 1948年度

合計	予科生	学部一年	学部二年	学部三年
七二三名	四六六名	一二七名	一〇八名	二一名

(愛知大学20年史)

昭和二十二年は愛知大学草創の年で、万事匆忙のうちに過ぎ、第二年の二十三年に至ってやや整備された。その年の四月には学部第一回卒業生十三名を世に送り、在学生は左のとおりであった。(表A-3)

参考表2. 旧制新制大学並びに短期大学部の学部学科別構成と学生数(1952)
(昭和27年5月1日現在)

新、旧制	学部名	学科名	学 年 別				計
			1 年	2 年	3 年	4 年	
旧制大学 (三年制)	法経学部	法政科			99		99
	〃	経済科			213		213
	法経学部 研究科	法政科	3	2			5
	〃	経済科		7	2		9
新制大学 (四年制)	法経学部	法学科	71	71	57	111	310
	〃	経済学科	381	422	302	417	1,522
	文学部	社会学科	24	13	7	10	54
	〃	文学科	43	30	24	29	126
短期大学部 (夜間二年制)		法経科	458	354			812
		文科	20	22			42
計			1,000	921	704	567	3,192

(愛知大学20年史)

での意識を、大学設立時の開学趣旨の浸透度、初期編入学の東亜同文書院生やほかの大学などからの編入入学生との交流状況、大学誕生後、地域文化への貢献の目標のもと1か月半後に学生が企画実行した豊橋市民との文化交歓祭の実施と成果、昭和27年の愛大事件などとの諸関係、母校である愛知大学との関係の強弱やその思い、その後の人生の中での愛知大学の存在などを多面的に問うた。

かなり多岐にわたり、設問の数も多いので回答を危惧したが、やはり高齢化による忘却も目立ったが、丁寧な回答も目立った。

なお、このアンケート内容は、新制愛知大学の法経学部の法学科、経済学科、新制時に誕生した文学部の社会学科ほかいくつかの専攻の卒業生に対しても同様に使用した。それぞれの比較も意識したためである。

そのほか、2部、短大は若干変更はあるが基本はあまり変えず実施した。ただし、今回はその結果については、対応時間や紙幅の関係で残念ながら次号へまわさせてもらった。

(3) アンケートの結果

①「旧制愛知大学」への入学生たち

「旧制愛知大学」は昭和21年(1946)11月15日に創設が認可された後、同22年春から授業を開始した。この初年度に予科へ入学した学生は編入学生も見られたため第1学年は188名、第2学年は110名、第3学年は66名の合計404名であった。このように学年間に入学者の数に差はみられたが、開学から3学年がそろってスタートしている(表A-1)。その出身校を見ると「東亜同文書院大学」が157名とやはり最も多く、

全体の約4割を占めた。次いで終戦までの最後の3年間は東亜同文書院大学に併合された「北京経専」が11名、次いで「台北帝大」が10名、あと「満州建国大」7名、そしてハルビン学院、新疆法政大学、大連経専、ほか外地からの引揚げ学生たち、また内地からは日本大学6名、明治大学5名、ほか慶応大学、早稲田大学、中央大学など、戦後都市での生活が苦しくて帰郷してきた学生たち、GHQによって神道主義の大学として閉鎖された神宮皇学館大学の学生たち6名、ほか第七、第八、松江などの旧制高等学校や東京高師、陸軍幼年学校、そのほか旧制中学など、全部で80余りの外地および内地の諸学校から入学した。全体的に見れば、「旧制愛知大学」は東亜同文書院大学の出身学生を主にした外地からの引揚げ学生による「総合引揚げ大学」の様相を示していた。

帰国学生はその後も続き、また国内からの入学希望者も増えて、創立2年目には、予科への新1年生入学の志願者は1000名を超えた。また編入学志願者も100名を超え、女子学生の受け入れも始まり、それぞれ入学試験が行われた。新1年生への入学試験は5倍近くの競争率となった(表A-2)。こうして各学年の一斉開講が本格化した。

②アンケートによるA系列の個人的情報の回答から

以上のように、開学時に東亜同文書院大学(以下書院大学と称す)帰国学生たちを主軸にしつつ、「旧制愛知大学」は新たな学生も確保し順調に船出した。その全貌については興味深いものがある。しかし、今回のアンケートの「旧制愛知大学」卒業の回

2

学生番号	東亜大学(旧制)の沿革期間(経済学科)																						同(経済科)				
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	1	2	3	4	5
昭和22年(1947)	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
23		↓								↓										↓	↓	↓					
24			↓				↓				↓										↓	↓		↓			↓
25															↓										↓		
26																										↓	
27																											
28																											
29																											
30~																											

(2020年3月アンケート結果、判明分)

答者は予想以上に少なかった。調査時期が遅く、卒業生たちは、すでに 85 歳以上、中には 90 歳を超える方々もおられた。すでに多くの卒業生がなくなられ、あるいはご存命であってもご高齢のため記憶を失ったり、病氣入院となり、回答が困難になっていた。中には病床中のご本人に尋ねアンケート表をわかる範囲で埋めてくれたご遺族の方々もいた。前述したように、調査時期は 10 年遅かったといえる。

しかし、そのような中で回答をお寄せいただいた方々は、記憶も豊かに記録され、ご回答いただいた。アンケート数は少ないが、単なる一部の意見ではなく、その当時の方々一般の記憶と 생각이伝えられているといえる。また回答数は少ないながらも絶対数から言えば、信頼度は高めだといえる。その状況を踏まえ、以下、アンケート中心にその内容を見ていく。

まず、表 A-3 は「旧制愛知大学」入学時の前身校と卒業年及び生年を示したものである。回答者も前述したように多様な出身校を示している。旧制中学卒が目立つが、当時は戦後の学校制度再編期にあり、この時期のみ旧制中学から旧制大学の予科への入学ができた。

図 A-1 は回答があった「旧制愛知大学」への入学・編入性の在学期間を、わかりやすく示した。部分回答だけの方もおられるので、合計値に若干のずれが出てくるのはご理解いただきたい。そのさい、法経学部の経済学科と法学科を分けて示した。書院生を卒業生はすべて経済学科へ入学している。書院大学が、大学昇格後、商業学部中心の大学になっていたからである。

前掲の表 A-1 では、書院生は予科だけで

157 名も初年度に入学しているが、アンケートでは回答に項目によって無記入もあり 6～10 名ほどに留まっている。在学 3 年以下は学部へ編入した学生たちで、5 年以上は予科と学部を通して「旧制愛知大学生」として卒業したといえる。旧制愛知大学卒業生の回答者数は 40 名ほどであった。

表 A-5 は愛知大学を知った理由を示した。経済学科生の回答が中心で、書院生の場合は、書院時代の本間学長や小岩井教授からの新大学設立の案内を中心に書院復活への期待感が彼らの得た情報から生まれていたことがうかがわれる。一方、書院以外の出身者も大陸からの引揚げ大学としての情報をとらえ、優秀な教授陣への期待感があったことなどがわかる。いずれも基本的には書院情報であった。

表 A-6 はその先のより具体的な入学志望の理由についてである。書院卒業生は書院の延長線上でとらえ、一方、書院以外の出身者は「有望」、「旧制大学」、「著名な教授陣」など客観的なとらえ方をしていたことがわかる。法学科志望の書院大学以外の出身者は、かつての自分の教師情報などより情報を集めていたことがうかがわれる。法学科はまさに書院時代ではなく、「旧制愛知大学」としては新学科であり、中部地方最初の学科であったことがその背景にあったといえる。

③B 系列の入学先などの回答から

B 系列では具体的な志望学科、入学理由、入学後の転学科などを問うた。

志望学科はすでにここで分類した通り。入学理由は A 系列表 A-6 で示した内容と重なるが、他に、自由な教育への期待、農家

表 A-4 旧制愛知大学法経学部および予科入学者の出身校と卒業年および生年

＜出身校＞		卒 業 年					生 年					計
A. 旧制経済学部	昭和24	昭和28	昭和29	昭和29～	不 明	計	～大15	～昭和2	～昭和4	昭和5～	計	
東海大学経済学部	3人	3				6人	3	1	2		6	
在清柳菰学校	1					1			1		1	
台北帝国大学					1	1	1				1	
京 城 経 専		1				1					1	
明 倫 中 学		2				2			1	1	2	
明倫中、台北中			2			2						
刈 谷 中 学	1					1			1		1	
愛知第2師範		1				1						
刈 谷 中 学		1				1			1		1	
京都繊維経済		1				1			1		1	
浜松工業専		1				1			1		1	
成 奎 中 学		1				1				1	1	
東 海 中 学		1				1				1	1	
名古屋中		1				1				1	1	
浜 松 中 学		1				1						
浜 松 南 業		1				1				1	1	
東 海 中 学		1				1				1	1	
名古屋中		1				1				1	1	
計	5人	17	2		1	25	4	1	8	7		
B. 旧制法学科												
名古屋工業専		1人				1		1			1	
陸軍幼年学校(前)		1				1		1			1	
天理経済専		1				1			1		1	
保八高等学校		1				1	1				1	
豊 橋 中 学 校		1				1			1		1	
計		5人				5					5	

(アンケートより作成)

表A-5 [A5] 愛知大学を知った理由

A. 経済学科	
書院生 7名	大学設立情報を得た。 本町、川岩井両先生からの通知案内と誘い。 先に帰国した同期生から、 書院を継続したい。 中国を学びたい。
その他	中部唯一の法文系大学。 大陸からの引揚教員と学生の新大学。 すぐれた教授陣のもと、学びたい。 設立経緯を知って。 新聞報道を見て。 同じ海外からの引揚げに共感。 旧制中学の先生からのすすめ。 旧制中学で書院生の先輩から。 書院の伝統に惹かれて。

表A-6 [A6] 愛知大学を志望した理由

A. 経済学科	
書院生	書院の延長で学べる。 本間学長からのすすめ。 中国語をさらに学びたい。 大卒の資格をとりたい。 書院の先生、同級生に会いたい。
その他	有望な大学だ。 旧制大学だ。 教授陣は著名。 工学系からの転向。 自宅に近い。
B. 法学科	
その他	文系大学ができたという情報。 旧制中学教師からのすすめ。 塾講師からのすすめ。 書院先生からのすすめ。 外地からの学生間のネット情報。 自宅に近い。

(アンケートより作成)

表A-7 [C3] 興味や面白かった学業分野

A 経済学科	
書院生	母に就業と引換えに自由を保証してもらった 農業調査法、手形法 国際法、経営経済(大石教授) 小岩井教授 日本資本主義発達史、マルクス経済学 金融資本論(林要)、 企業形態論(大石)。
その他	生き方と知識 経営学(大石) 倫理(横山)。 中国語(鈴木沢郎)
B 法学科	
その他	予科のフランス語 すべて面白く、とくに集中講義と

(アンケートより作成)

表A-9 [C6] 卒業論文のテーマ、()内は指導教授

A 経済学科	
書院生	「私権と公共福祉」(一円-億) 「労働総合運動」
その他	「減価償却論」(大石) 「道路、マーケット論」(大石) 「企業形態論」(大石)
B 法学科	
その他	「民主主義と死刑制度」(花村) 「百貨店論」()

(注) 他の卒業生はテーマの忘却者が多い

(アンケートより作成)

経済研究を進めたい、戦時中の勉学の空白を取り戻したいという決意、語学習得や就職を検討したい、などのより具体的な入学理由が見えてきている。

④C 系列の在学中の学業などの回答から

C 系列では学業についての内容とその満足度について問うた。

まず、在学中の学業のウェイトについては、経済学科の書院出身者は回答 7 人の内 6 人が学業中心であり、ほかの出身者も回答者 13 人のうち 8 人が学業中心だったとしている。法学科の場合は 6 人中 3 人、残る 3 人も学業志向であったとしている。当時の学生生活は経済的問題もありアルバイトも生活の中にあり、数人は家庭の事情もあって学業が従というケースも見られたが、若干のアルバイトをしつつも勉学には集中していた状況が伝わってくる。それは戦時中の勉学の空白を余儀なくされた部分への回復と勉学ができる喜びがうかがわれる。全体として、勉学には熱心に取り組んでいたといえる。

そんな中で表 A-7 は、授業の中で興味や面白いと思った学業分野についての回答を示したものである。経済学科の書院出身者はかなり具体的な内容にまで関心を持っており、一方、そのほかの出身者は、やや教養的なレベルへの関心が高い。書院生は書院時代の生徒出陣前に集約的授業を受け、その発展形を新たな学部授業で関心を持ち、一方、法学科は集中講義への関心が見られる。法学の各論は東西からの優れた法学者が本間先生の差配の下で集中講義を展開しており、学生もそれに呼応し、熱心に受容したように思われる。

その関係でのゼミを見ると、経済学科では大石教授の経営学、法学科では、花村教授の刑法と胡麻本教授の共産党宣言の原著購読（むつかしかったと）、とあるのみである（表 A-8）。この点の実態はこれではよくわからないが、これはアンケート用紙の記入欄が用紙の端になり、回答記入が困難であったこと、また学部への編入年が学生によって多様であり、その点もゼミの開催に影響があったかもしれない、などが理由だろうと思われる。アンケート用紙の記入欄配置のまずさは、こちらのミスでもある。

そこでゼミにも関係して卒業論文についての回答を表 A-9 に示した。無記入欄に「忘却」、「書いたのだが思い出せない」という回答が散見された中で、この表は貴重な記憶であるといえる。経済学科では書院生の原理論的な実践論への関心が見られ、そのほかの出身者による、より実践的内容とは少し異なっている。この場合の実践的指導は大石教授一色となっている。大石先生は実践的な経営学を講じ、多くの学生がそれに興味を掻き立てられたとする記録が見られる。一方、法学科では「忘却」が多いが、記憶されたその主題の傾向はその片鱗から伝わってくる。

以上のようにゼミや卒論など具体的な記憶はかなり薄れてしまっているが、印象に残った先生たちというレベルについてはかなり記憶されている。表 A-10 はそれを示している。ひとりだけの回答から複数の回答もあり、それらをすべて挙げた。書院卒業生に書院時代からの先生の名前がやや目立つものの、新たに加わった先生の名前も見られ、そのほかの出身者や法学科ではさらにその傾向が強くみられる。いずれにせよ

表A-8〔C5〕ゼミ状況

A 経済学科		教授名(テーマ)
書院生	三好(日本農業の将来)	
	小岩井	
	-	(漢文)
		(あと忘却多し)
その他	郡第之助	
	大石(アメリカ経営学)	
	-	(あと忘却多し)
B 法学科		教授名(テーマ)
		花村(刑法)
		旗藤本(共産党宣伝)
(アンケートより作成)		

表A-11〔C3〕図書館利用

A 経済学科	利用者
{ 書院生	5人
	{ その他 3
B 法学科	1 (毎日利用)
(アンケートより作成)	

表A-12〔C9〕在学中の満足度レベル

その内容

レベル	A 経済学科		B 法学科	その内容
	書院生	その他		
1 大いに満足	1	1	2	<ul style="list-style-type: none"> ・混乱期の中、大学を準備し、講義も充実。 ・大石教授とゼミ仲間。 ・図書館利用はつらかったが、よく頑張った。 ・色々な学校出身者と交流し、人材が豊かになった。 ・先生と友、自分を見直せた。 ・取れた教授陣。 ・書院大出身者から大なる刺激を受けた。ほか。
2 まずまず	3	3	2	
3 まあまあ		2	1	
4 あまり				

(アンケートより作成)

表A-13〔C11〕学業がその後の人生に与えた影響レベルとその主な内容

レベル	A 経済学科		B 法学科	その主な内容
	書院生	その他		
1 大いに影響	2	5	2	<ul style="list-style-type: none"> ・激動する社会へ対応、欠乏の中で元氣張れた。 ・愛大精神「自由受難」を身に付けた。 ・海外技術協力で合年入の実力をつけた。 ・考える力、友を得た、就職に役立った。 ・戦後復興と人類平和への貢献と信憑。 ・改革への意識を得た。ほか
2 まずまず	1	3	2	
3 まあまあ	1	1	1	
4 あまり				

(アンケートより作成)

多くの教授たちは優れた授業で学生たちを魅了していたことがわかる。それは「優れた教授陣」を知り、「旧制愛知大学」へ志願入学してきた学生たちにとって予想通りの手ごたえがあったことがうかがえる。

ゼミにしても卒論にしても、学生、教員ともに学習と研究には図書の整備と図書館の整備が必要であった。しかし、無一文からスタートした「旧制愛知大学」は認可される前から支給準備を始めたが、書籍の収集などは戦後の混乱が続く中、大変であった。豊橋などの書店からの購入も資金が必要であった。そんな折、旧霞山会の建物がGHQ に接收される直前に富山県の書院呉羽校舎の教員と書院学生有志が東京へ向かい、3 万冊あまりの収蔵図書資料を運び出すというドラマチックな快挙があり、それがこの後新生直後の愛知大学へ運ばれ、購入されて図書館のベースとなった。しかしその整理には時間がかかった。その後いくつかのコレクションも収集され、昭和 20 年代の終わりごろには耐火収蔵庫の建設、同じ 30 年代にはいと図書館本館も建設され、のちには名古屋図書館分館も建設され、図書環境は一気に充実されてゆく。いずれにせよ、当然ではあったが、当時の図書環境は十分でなく、卒論執筆にあたり、指導教員から参考書を借りて完成させたという回答も見られた。

表 A-11 はそのような当初の時期の図書館利用状況へのアンケート結果である。十分利用したという回答が多くないのは、上述の図書館環境のせいもある。豊橋市立の図書館を利用したという回答も見られた。そのような中でゼミや卒論に工夫をしながら取り組んだことがうかがわれる。

表 A-12 は在学中の満足度に対する回答である。全体として「大いに満足」、「まずまず」とする回答が多く、満足を得ていたといえる。その理由である内容を見ると、大学側も学生側も厳しい環境を理解しつつ共に頑張ったという評価を示している。そのような厳しい環境下での対応が、卒業後の人生にもプラスになったという理由を挙げている（表 A-13）。

このことから見ると「旧制愛知大学」当時、学生たちは新愛知大学の産みの苦しみを理解し、教員、大学と精神的にもかなり一体的にまとまった強い絆で結ばれつつ、終戦直後の厳しい環境をのりこえようとしていたことがうかがえる。そしてその背景には書院出身の学生たちが、上海から引き揚げてきた本間先生はじめの書院の教員たちへの強い一体感が存在していたことがうかがわれ、それが旧制大学を維持し、旧制としての新生愛知大学の第一歩を支えたといえるだろう。

⑤D 系列へクラブ活動への回答

D 系列はクラブ活動に関する回答である。

まず、創設期の学生たちはどのようなクラブ活動をしていたかについての回答である。概していうと、施設もまだ未整備のためか、記入例は少ない。経済学科では書院出身者では農業問題研究会、中国問題研究会の 2 件のみ。校舎は中国への関心によるものであり、全社は三好教授の実践研究の影響であろう。いずれもしっかり参加している。そのほかの出身者では写真、経営経済研究会、児童文化研究会、陸上競技部、児童文化研究会、庭球部があげられ、この庭球部の部員は他大学とも積極的に交流を

表A-10〔c4〕印象に残った先生

A 経済学科	名前	授業内容	名前	授業内容
書院生	本間喜一		波多野	(経済学)
	鈴木 扱		園部	(法学)
	鈴木 正		四方	(法学)
	桑島			
	大田			
	大内			
	池上			
	三好	(現地調査) (大橋)		
	山口			
	玉井			
	若江	(英語)		
	小幡	(財政学)		
	一戸			
	森谷			
	山本ニミ	(憲法)		
	林 要	(経済学)		
	小岩井			
	戸沢	(トク・アタス)		
その他生	板倉			
	横山			
	若江			
	本間			
	久曾神			
	大石			
	林 要			
	小岩井			
B 法学科	三好	(農業政策)		
	藤沢	(ロンドン語)		
	戸沢			
	園部			
	大橋			

(アンケートより作成)

し、国体選手としても出場し、その後の人生にも大きな影響があったとする。ほかの学生たちは無記入が多いが、その理由に「暇がない」との付記が目立つ。ほかのメモからは勉学への集中、あるいは一部にバイトに従事したためとわかる。また、法学科ではバレー部、ラグビー部、弓道部、キリスト教教育部、そして仏文研究会が前掲バレー部と同一人物が参加している。概して法学科生の方がクラブ活動に積極的に見える。しかし、バレー部も施設整備が不十分とあり、この時期、ごく一部を除いて低調であったといえる。しかし、初期に誕生したクラブの状況がわかり、これらかベースになって新制大学になると、多くのクラブが創部され、活況を呈していくことがわかる。

⑥E 系列の就職についての回答。

次の E 系列は就職の問題である。戦後の昭和 20 年代はまだ復興もままならず、昭和 26 年日本が GHQ の支配下からようやく独立が認められても、経済もまだ発展の動きは乏しかった。そんな折、昭和 28 年、となりの朝鮮半島で南北戦争が始まると、南側を支援する連合国側は多くの調達品を隣の日本に求めるようになり、それが日本経済を引き上げることになり、それが景気上昇になった昭和 30 年代から始まる高度経済成長へとつながっていくことになった。

しかし、「旧制愛知大学」の学生が時間差を持ちつつ卒業するころは、経済活動はまだ乏しく、いわば就職氷河期で、大学側の学生推薦も一人 1 件のみに限定されていた。表 A-14 における就職活動を積極的に実施した書院以外の出身者は半分ほどが積極的であり、表 A-14 に示した就職環境の厳しさ

は書院出身者も含め、すべての卒業生に共通していた。しかも昭和 24 年に大学再編改革ですべての旧制大学も新制大学へ移行し、さらにタケノコのように「新制大学」が各地に誕生した。昭和 28 年にはその新制大学の第 1 期生が卒業し、就職戦線に加わったため、すべての学生の就職事情が厳しさを増した。前表はそれを示している。こういう状況がある一方、当時は今日とは異なり、いわゆる先輩、知人や親族などからの引きであるコネの力が生きていた。表 A-15 中の「ふつう」という回答者はすでにそのような力で就職先が決まっていたケースが見られる。表 A-16 は希望分野への就職状況の回答である。全体としては「なんとか」以上の就職を実現しているケースが多い。就職競争の中で「旧制愛知大学」卒、とくにまた書院出身などの学歴、履歴が不況の中でも就職をうまく実現できたように思われる。それゆえ、大学学長や教授からの推薦も効果があり、本間学長や大石教授の推薦で就職先が決定している。とくに本間学長による八幡製鉄への推薦は書院出身者ではなかったため推薦された本人は生涯本間先生に厚い恩義を語っている。

こうして決定した就職先を表 A-17 に示した。厳しい環境であったとはいえ、また昭和 27 年には愛大事件もあったとはいえ、それぞれが当時の企業でも、金融、メディア、大手メーカーなど第一線の企業に順調に就職している。当時、「旧制愛知大学」の法文系卒業生は中部地方で唯一であり、名古屋大学は昭和 24 年に新制として初めてスタートしただけであり、昭和 28 年により卒業生が出たばかりであった。それだけに「旧制愛知大学」の卒業生は中部地方

表A-14 [E1] 卒業時の就職活動

レベル	A 経済学科		B 法学科	その理由
	書院生	その他		
1 かなり積極的	1	4		} かなり厳しかったから } 社会生活に不安だったから
2 やや積極的	1		1	
3 ふ つ う	1	5	2	} 知人にまかせた。
4 あまりしない				
5 全くしない				
計	3/6	9/	3/5	

(アンケートより作成)

表A-15 [E3] 卒業時の就職環境は

レベル	A 経済学科		B 法学科	その理由
	書院生	その他		
1 かなり厳しい	6	10	2	・ 折しも大不況下にあり、 ・ しかも 旧制大卒と新制大の 新卒業生がダブったため 就職希望者が急増
2 やや厳しい		2		
3 ふ つ う			1	
4 あまり厳しくない				
5 全く厳しくない				
計	6/6	12/12	3/5	

(アンケートより作成)

表A-16 [E5] 希望分野に就職できたか

レベル	A 経済学科		B 法学科	その理由など
	書院生	その他		
1 はい	2	5	2	[書院]中国語が決め手になった。 ・ たまたま入社試験に合格 ・ 知人の紹介
2 なんとか	2	3		
3 意識せず		2	1	[その他]大石先生の推薦 2件
4 意に反して	1		1	[法]本間先生の推薦 2件
計	5	10	4	・ 自営業を継承故郷へ帰る

(アンケートより作成)

表A-17 [E7] 就職先(判明分)

A 経済学科		B 法学科
書院生	その他	
日本通運	丸栄	公立中高等学校
帝国銀行 ^(日銀)	瀬戸信金	八幡製鉄
八幡製鉄	帝國理化学	名古屋中高等学校
販売新庫	日本証券協会	県立高等学校
愛知大学	渡辺製菓	
住友系企業	静岡銀行	
ラジオ関東	日本製鋼所	
外務省	小畑江小学校	
	デンソー	
	アイシン	
	三井住友銀行	

(アンケートより作成)

表A-18 [E9] 就職先で愛知大卒の意識は、またその理由は

レベル	A 経済学科		B 法学科
	書院生	その他	
1 はい(あり)	① 5	② 7	① 2
2 少しあり			
3 特になし	1	3	
計	6	10	2

理由

- ① 育った書院の力が大きかったため、決してヒケをとらなかった。
旧制、新「愛知大」で充実した勉強ができた。
旧制最後の愛知大学で学べたという意識。
愛大事件の影響もあった。
- ② 海外からの引揚大学としての自信。
職場には他大学の卒業生もいたから。
三井住友銀行にはすでに「愛大卒」が15人もいたから。
愛大事件の風評もあった。
- ③ 愛大卒が少い職場には本間先生から「愛大卒生がんばれ」と。
愛大卒後輩の指導も行った。

(アンケートより作成)

表A-19「E13」 職場で社会人として愛大生の評価

A. 経済学科 書 臨 生		B. 法 学 科	
<ul style="list-style-type: none"> ・まだ大卒が少い時代、新規な目でみられた。 ・まじめで、パワフル ・高く評価されている。 ・わからない。 		<ul style="list-style-type: none"> ・自称「寺小屋大学」として、愛大に愛着と誇りあり。そこに伝統的大学との違いがある。 ・最初の愛大生として頑張ったことに誇りあり。 ・自己努力。 ・名古屋の愛知の職場は愛大卒が多く有り 	
<ul style="list-style-type: none"> ・正義感が強い。 ・企業の実務に努力。 ・よく働く。 ・わからない。2件 		<ul style="list-style-type: none"> ・苦境に強い。 ・自主独立の志あり。 ・武骨でまじめ。 ・私学第1大学として優秀な人材が集っている。 ・名古屋文化を支えた。 	
その他生		(アンケートより作成)	
(アンケートより作成)		(アンケートより作成)	

表A-20「E14」他大学卒生と比較した愛大卒生の特徴

<ul style="list-style-type: none"> ・創設された新大学としてのハンデはあるが書臨時代の経験を生かした。 	(アンケートより作成)
---	-------------

の代表的なトップ企業を独占できていたと
いうことができる。法学科では法曹界がま
だ未整備であり、教職が目立った。

このような状況は表 A-18 でもうかがえ
る。新たな就職先での愛知大学卒業生とし
ての意識は全体として高く、その理由をみ
ても自信に裏打ちされていることがわかる。
また、とりわけ書院出身の卒業生は、超一
流企業へ就職できている点は、書院への評
価もあったろうし、その影響はその後の愛
大卒業生の評価へもつながっていったよう
に見える⁶。

それは次の表 A-19 および表 A-20 にみ
られる。新たな職場での愛知大学卒業生の
評価と他大学卒業生と比較した特徴にもあ
らわれている。そこには創設期の愛知大学
卒業生たちが新鮮で自信と活力に満ちて各
職場や社会での活躍の軌跡と足跡を刻んだ
ことがうかがえる。

⑦F 系列の「旧制愛知大学」卒業生として の意識への回答

F 系列は「旧制愛知大学」の卒業生の意
識についての回答である。

まず、「愛知大学設立趣意書」の理念をど
のように受け取ったかについてである。こ
の設立趣意書は昭和 22 年、「旧制愛知大学」
創設にあたりその志をまとめたもので、明
治 33 年 (1901) に創設された東亜同文書院
は「興学要旨」、「立教綱領」として掲げてお
り、そのような伝統を引き継ぐ形で、内容
は次の時代を見越してそれにふさわしいか
たちで提示された。基本的には、「世界平和
への貢献」をベースに、「国際的人材の育成」
と「地域文化への貢献」を掲げた。このよ
うな設立趣意書を終戦直後に堂々とうたっ

たことは特筆された。特に GHQ の日本の鎖
国化を図った戦後政策に対して、はっきり
と「国際人の養成」を明示したことは明ら
かに書院の東アジアを見据えていた伝統を
受け継ぐことを宣言した独立宣言風であり、
「地域文化への貢献」は戦後 6 大都市以外
の地方都市へ初めての「旧制大学」を立地
せしめた使命感を宣言した独創性に満ちた
ものであった。この文面は学内に学生たち
の手で建立された「自由、受難」の鐘のふ
もとに掲げられた。これは歴代の学長が入
学式や卒業式でつないで挨拶してきた内容
である。卒業生たちはこれをどう受け取っ
たかである。

表 A-21 はそれを示している。それによ
ると両学科とも書院、そのほかの出身者の
違いを問わず、すべての卒業生がこの新大
学の設立趣意書の内容をわがものとしてそ
の後の人生にも生かしてきたことがわかる。
それは愛知大学の新たな魂として、またア
イデンティティとして学生たちに広く受容
されていたことがうかがわれる。

表 A-22 は書院出身や他の出身の学生た
ちとの交流状況である。旧制の学生同士の
付き合い状況ということになる。「交流がな
かった」という回答が不思議であるが、大
勢としては、書院生同士はもちろん、外地
の各学校からの編入入学生たちとお互いが
交流してことがわかる。

次いで表 A-23 は、昭和 22 年 4 月に愛知
大学の授業が開始された 2 か月余り後に、
学生たちの主催で豊橋公会堂と愛知大学グ
ランドを会場に豊橋市民との文化交歓祭が
1 週間近く実施され、成功裡に終わったこ
とに関してのかかわりや情報についての回
答である。この背景には、前述したように

表 A-21 [F1] 愛知大学設立趣意書理念の反映

A 経済学科

書院生

- ・大賛成である。
- ・「真理探求」、「自由・受難」は生きる道筋。
- ・日中友好、中国研究と目標伝わる。
- ・大いに受け入れ。

その他生

- ・その通りだと受容してきた。
- ・「真理探求」の受容。
- ・地域社会への貢献を実践してきた。
- ・大変すぐれた理念だと評価。
- ・外国企業との取引時に心構えとしてきた。
- ・「自由・受難」を体現できてきた。

B 法学科

- ・愛知大学の設立は天与の福音。
- ・純粋な学問への憧れをもたらしてきた。
- ・「知る」、「愛する」者への可能性を信じてきた。
- ・すべての考え方に共感、賛成。

(アンケートより作成)

外地の学校を中心に 80 余校の学生たちが愛知大学生になったが、多種多様な学校の出身であり、当初は互いの交流がうまくいったわけではなかった。そこで多くの学生が入居した寮生のうち、学部 3 年制へ編入した書院出身者などがリーダーとなって、市民に共同の文化交歓祭実施を呼び掛けて実行された。直前に豊橋側には豊橋文化協会が設立されており、協力関係を結んだ。この文化交流事業計画の実施により学生たちもまとめ、仮装行列、講演会、演劇（「胡蝶の舞」書院 46 期の間宮信夫氏演出）、巖本マリのバイオリンリサイタル、バレエ、運動会、そして最終日は昨年 NHK 朝ドラ「エール」の主人公であった古閑裕而とコロンビアオーケストラ楽団、さらに伊藤久雄ほかの有名歌手も出演する音楽祭で幕を閉めた。学生たちにとって、食糧不足や物資不足の中で、志を実現すべく知恵を絞り、苦勞しながらも乗り越えたというのが実態であった。最終日に豊橋市公会堂玄関の最上階の階段の階段から挨拶に立ったまとめ役の書院 42 期生出身の小崎昌業は公会堂前に集まった数千人の市民に向かって挨拶をし、本人は大成功であったという。市民も豊橋に初めてやってきた大学と学生への好奇心に満ちていたのであろう。これにより学生たちも愛知大学の学生としてまとまったという。アンケートに添えられた書院の予科生から編入学した山内喜充（和夫）氏によると、演劇は「胡蝶の舞」で書院 46 期、間宮信夫氏が演出し、女性役は安城学園生に出演してもらったという。そしてこの交歓祭の実施に当たりもっとも奔走したのが井上圭氏（昭和 25 年卒）であったという。しかし、井上氏は読売新聞社事業部に

就職が決定していたが、卒業打ち上げの後、酔いのため街で凍死してしまったとし、悔やんでおられた。残念なことである。

なお、少し前、外務省で各国大使を務められた小崎昌業氏の自叙伝作成の関係で、小崎氏が実家から持参された多くの写真の中に当時の交歓祭の時の「愛知大学交歓祭」が発行した招待券と入場券の写真が見つかり、豊橋市民との交歓祭の臨場感が伝わってきた。なおこれらの券には「愛知大学学生自治会」の朱印が押されており、この時初めて愛知大学に学生自治会が誕生したものと思われる（A-24 参考記事 1）。その初代自治会長に小崎昌業氏が就任したという。

こうして誕生したばかりの「旧制愛知大学」は学生の側からもまとまりをみせた。この背景にはこの新たな「旧制愛知大学」が入学したばかりの新 1 年生だけの新設大学ではなく、予科生や学部生までが創設時にはそろってスタートできたこともこの企画をまとめ、実施する力を凝集できたことがあげられ、とくに、上海の書院時代に寮祭り、運動会、仮装行列、各クラブ活動を経験していた書院生は多く、学生の自治意識としては完成した大学として出発したといえる。

そのことは、創立から 5 年後で、その前年に GHQ の支配が終わり、日本が独立の喜びを得たその翌昭和 27 年 5 月 7 日深夜に起きた、いわゆる「愛大事件」をめぐる評価にも表れている。それは挙動不審な二人を学内で寮生活を送っていた学生が捉えたことがきっかけであった。とらえた二人は拳銃や手帳などの所持品から警官であることがわかり、学生との間でいざこざが生じ、それが裁判問題に持ち込まれ、最高裁、さ

表A-22[F2] 愛知大学へ編入学した東亜同文書院生と他校出身者との交流

交流レベル	A 経済学科		B 法学科	交流状況
	書院生	その他		
1 交流があった	㊶ 4人	㊶ 1	㊶ 3	㊶ 各寮、各出身者と交流、同志的威情あり。
2 少しあった	㊶ 1	㊶ 3	2	㊶ 友人として。
3. なかった	1	3		㊶ セミナ下宿で交流、少人数でのコミュニケーション。
計	6	7	5	㊶ 先輩として語り、7人と交流。
(アンケートより作成)				㊶ 出身同窓会的。寮には書院以外の学生も。

いて交流した→ 上海、北京、南京、建國、ハルビン、台湾、内地各々出身者と

表A-23[F3-2] 開学時豊橋市民との交歓会との交流会について

認知レベル	A 経済学科		B 法学科	その内容
	書院生	その他		
1 知っている	㊶ 3人	㊶ 3	㊶ 2	㊶ 文化館中心、演劇、中国語劇、児童文化館市民が見たことのない大学を大歓迎してくれた。
2 知らない	1	5	2	㊶ 豊橋文化協会、音楽祭、人形劇、演劇など、外部からは日本最高レベルが来豊し、出演。
計	4	8	4	㊶ 大学が市公会堂への仮装行列に参加、演劇は岩井達や張本などがやった。
(アンケートより作成)				㊶ 大学が市公会堂への仮装行列に参加、演劇は岩井達や張本などがやった。

<付記> 寮生が中心になり、この交歓会をプロモートした経緯も紹介され、大好評だった様子も紹介されている。

表A-25[F4] 「愛大事件」の認知状況と同事件への感想

認知レベル	A 経済学科		B 法学科	感想
	書院生	その他		
1 よく知っている	㊶ 1人	㊶ 5	㊶ 2	㊶ よくやった。
2 多少知っている	㊶ 1	㊶ 3		㊶ 大学一致で戦うべきだと、大学の自決を学んだ。
3 ほとんど知らない	2		2	㊶ 卒業後のことで、新聞で知った。高校同級生が警察官になっていたので複雑な心境だった。
計	4	8	4	㊶ 本間先生の尽力をのり新聞で知った。
(アンケートより作成)				㊶ 入社のあとだったが、誇りに思った。当時の大学は自治を大切にしていた。
				東大、日大、明大、法大など各大学へ拡大は自分には批判的だった。

[A-24] 次ページの「参考記事」へ

らには国会審議までに至った。当時、安保問題、メーデー事件、その前には東大のポポロ事件、早大事件などがあり、公安側は過敏になっており、その渦中へ取り込まれた感があった。警察側も戦後再編された市町村警察に県警察が誕生し、豊橋市警察の問題が県警まで拡大された面もあった。それに地元紙も同調して誇大記事を書き、騒ぎを増幅させた。この中で本間学長と小岩井、さらに続く脇坂両学長も一貫して大学の自治と学問の自由を柱に毅然とした態度で臨み、他大学からも多くの支援を得た。特に本間学長は当初から二人の警官の行動の信びよう性に疑義を持ち、学生の証言を信用して学生も3身等の身内であるとして最後まで弁護を務めた。

しかし、この事件は「旧制大学」を誕生させ、学制改革で新制大学として文学部も併設して、さらなる発展を目指し始めた愛知大学にとっては、罨を仕掛けられたような状況に見舞われた。東京や関西などの大学では問題にならないような事例が、保守的な東海地方にあって愛知大学は「赤い大学」とする風評被害がそれである。一時的には就職や寄付金への影響が見られた。

このような状況下で、当時の卒業生は卒業後の事件でほとんど知らないとする回答以外の多くは、愛知大学側の大学の自治を主張する態度と対応に強い支持を示している。これは後述する新制大学後の当時の卒業生にもおおむね共通している。今日では昔語りのな事件になった感もあるが、この事件はその約20年後の東大紛争など全国に広がった大学紛争とは大きく異なり、戦時中の学徒出陣など大学や学生が厳しく制約されていた記憶がまだ生きていた時代に

において、戦後のアカデミズムと学生自治を確立する純粋な大学と学生の問題であったといえる。学生たちの見識も含め、十分に再評価されてよいだろう。表 A-25 はそれを示している。

以下は次の母校愛知大学への思いについてである。

まず、表 A-26 では母校愛知大学への関心度である。そのほとんどは「多少以上」の関心を持っている。「大変関心」を持っているのは書院以外の出身者に多く、その理由には人間形成の場になったことと、愛大事件に関係して権力の介入を許さなかったこと、愛大と豊橋が第二の故郷になったという実感まで抱いている。書院出身者では大学の産みの苦しみを共有するほどの一体感を持つなど愛大ファンが誕生していることを示している。法学科では本間先生や恩師、旧友への感謝が述べられ、これも愛大ファンだといえる。このような愛知大学に関する情報源は表 A-27 である。「新聞などのメディア」のほか「愛大通信」や「同窓会報」が中心である。大学のホームページはみられていない。高齢化のせいでもあるだろう。それだけに上述の通信や会報は丁寧なつくりが重要である。

それに関係して、愛知大学に期待する情報を挙げてもらったのが表 A-28 である。それぞれ期待している内容はシャープである。大学の特色化、その目標の明確化、全国レベルへの指向性、書院出身者や法学科からは中国研究の発展、三遠南信地域とのかかわり、などがあげられている。熟年になった卒業生の眼は要を射ているように見える。

表 A-29 は同窓会をめぐる回答と意見である。まず出席状況では出席率は高くない。

東愛知新聞 [A-24]



ドッグフードの神様
Dog feed no kamitama

社会・経済

政治・行政

地域・教育

芸能・文化

スポーツ

イ

愛大と古関さん関係資料見つかる (参考記事)「愛大・市民交歓祭」

愛大と古関さん関係資料見つかる

10月13日(火)00:00掲載

カテゴリー: 社会・経済 / 地域・教育

ツイート

いいね! 59

NHKで放送中の連続テレビ小説「エール」の主人公のモデルとなった作曲家の古関裕而さんが、1947(昭和22)年6月に豊橋市公会堂で開かれた「愛知大学交歓祭」の音楽会で指揮をしていたことが、愛知大名誉教授の藤田佳久さん(79)と、元東亜同文書院大学記念センター職員で、専門学校事務員の森健一さん(40)による調査で判明した。2人は「ドラマで有名になった古関さんが愛知大学とも関係があった」と驚いている。

交歓祭は設立間もない愛知大が、地域住民と交流することを目的に開いた。体育祭や児童文化祭、教授の講演会などが数日間にわたってあったとの記録が残る。古関さんが訪れた音楽会は6月16日にあった。歌手の伊藤久男さんらが出演し、古関さんはコロムビア軽音楽団の指揮をしたとみられる。

藤田さんと森さんは2016年、愛知大東亜同文書院ブックレットとして、1期生で元外交官の小崎昌業さんの記録をまとめた「小崎外交官、世界を巡る」を発刊。この時集めた資料の中に、古関さんの記録が残っていた。小崎さんは交歓祭の開催に深く関わっており、資料の中にあった音楽会の入場券に古関さんの名前が記されていた。新型コロナウイルス禍で資料を整理中に見つけた。

藤田さん、森さんは「古関さんの名前を見つけた時は、とても驚きました。有名人が愛知大学と関わりがあることが分かり、光栄に思います」と話していた。

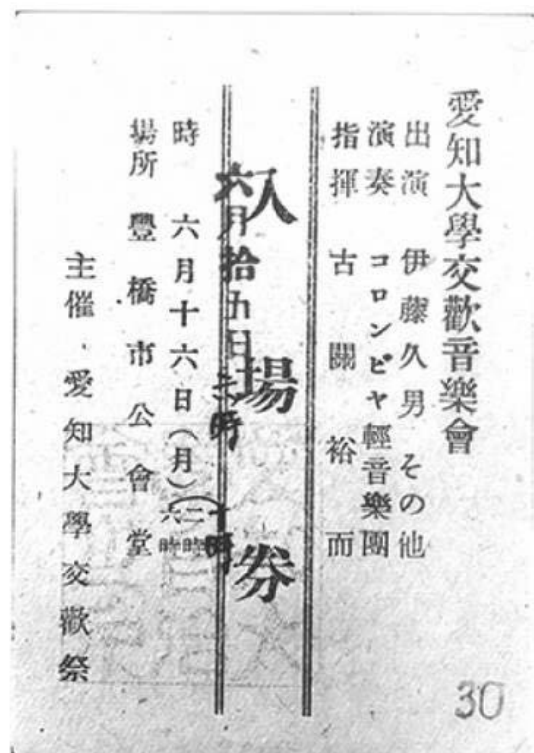
【竹下貴信】



1947年の愛知大学交歓祭の様子(同)



愛知大学と古関裕而が関わる資料を発見した藤田さん(左)と森さん(右)=東愛知新聞社で



古関さんの名前が記された音楽会の入場券(提供)

- 表A-26 [F. 6, 7] 母校愛知大学への関心と理由

レベル	A 経済学科		B. 法学科	理 由
	書院生	その他		
1 大変関心	① 3人	② 8	③ 3	① 産みの苦しみを知っていたから、 設立以来世話になったから、 地方大学になってきたのが残念
2 多少関心	④ 2	1	⑤ 2	
3 ふつう		⑥ 2		② 人間形成の充実した場であった、
4 あまり 関心ない				権力の介入を許さなかったこと、
計	5	11		第2の故郷が豊橋と愛大になった

① 母校、恩師、親友が原点。本間先生による推薦状が人生を決めた
同窓会員として西日本支部や沖縄へ出かけたほどだ。

② 書院出身だというと、インテリ層はすぐに愛知大学だと反応してくれる

③ 名古屋からも多くの愛大進学者と卒業生が出ている。

④ 卒業した中学校と同程度の関心をもっている。

(アンケートより作成)

表A-27 [F. 8] 愛知大学情報の入手先

入 手 先	A. 経済学科		B. 法学科
	書院生	その他	
1. テレビ、新聞	1人	5	2
2. 大学のホームページ			
3 「愛大通信」	4	5	2
4 さまざまな会合		3	
5 受験雑誌			
6 同 窓 生		2	1
7 同窓会報	2	7	4
8 「愛大新聞」			
9 ほ か			
計	7	23	9

(アンケートより作成)

表A-28 [F. 7] 慶知大学へ期待する情報

A. 経済学科

- | | | |
|---|-----|--|
| { | 書院生 | <ul style="list-style-type: none"> ・特色ある大学としての情報. ・中国研究をさらにすすめる情報. ・中国との交流関係の情報. |
| | その他 | <ul style="list-style-type: none"> ・全国レベルの大学へ指向する情報. ・大学間の交流や大学としての社会活動情報. ・特色ある大学としての情報. ・何を目標としているかわかる情報. ・「三遠南信地域」関係の情報を広くP.R. |

B 法 学 科

- ・中国関連の情報をもっと出せるように.
- ・同窓生の活動、動向の情報.

(アンケートより作成)

表A-29 [F. 8-2] 同窓会への出席状況と同窓会魅力アップ方策

(1) 同窓会への出席状況

レベル	A. 経済学科		B. 法学科
	書院生	その他	
1. はい(いつも参加)	1人	2	1
2. よく	1		
3. 時々	3	1	1
4. いいえ	1	6	1

(2) 同窓会の魅力アップ方策

A 経済学科

- | | | |
|---|-----|---|
| { | 書院生 | ・関係方面への積極的なR.R. 活動を. |
| | その他 | <ul style="list-style-type: none"> ・今のままでよい. よく頑張っている. ・とくに横浜支部は活発に活動. これをモデルに. ・政府、経済界、日経とのネットワークを. |

B 法 学 科

- ・地域ともっと密着する形を.
- ・同窓仲間への旅行先をふやし、各地で各支部との交流を活発化させる.
- ・すべてがよくいっている.

(アンケートより作成)

理由に高齢化に伴う身体的門外と顔見知りの減少が上がっている。そんな同窓会の活性化案は長年の経験の中から、交流をさらに活発にする方向でのいろいろ建設的な意見が提案されている。

表 A-30 は前掲の表 A-28 と関係するが、今日の愛知大学をどう見ているかという問いへの回答であり、さらに要望であり、提案である。全体としては各出身者とも共通して、愛大の個性化、全国化、レベルアップ化であり、その背景には現愛知大学に対する停滞感が共有されている。また、中国も含めた世界への飛躍とこの地域に根差した文化を基にした地域振興への要望もあり、これは愛知大学の設立要旨の具体化だともいえる

以上の大学への要望に次いで、表 A-31 は「後輩の学生たちへ伝えたいこと」のアンケートである。それらを見ると、活躍の場も広く、多分野で活躍できるように羽ばたいて、スケールも大きくなってほしいこと、書院史、愛知大学史、愛知大学創設の精神などその基盤をしっかり学んでほしいこと、当地方第1の大学の学生としての誇りを持ってほしいこと、などを挙げている。「旧制愛知大学育ちのこの卒業生たちにとっては、長い人生経験を踏まえたうえでの希望であり、志であるだろう。

最後に、表 A-32、と表 A-33、そして図 A-2 である。まず前者は卒業生個々の人生に対する満足度を問うたもの、それによるとほとんどは「まずまず」以上のほぼ満足な人生であったということを示している。「不満」は少ないが、それもアンラッキーな問題によるものであった。一方、後者はその満足度と愛知大学との関係を問うたもの。

ここでも「多少関係」以上がほとんどである。そこでその両者を相関関係図で示してみると、図 A-2 のようになる。学科別、さらに書院とその他の出身校別に示した。それによると全体として図の右上方への傾向線がひけるほどの相関関係が読み取れる。ここまでのアンケート結果を考慮すると、卒業生たちの人生の満足度のベースが愛知大学在学中に形づくられたことが明らかになり、このアンケートの結論のようなものだといえる。これは愛知大学にとってはもっとも望ましいことであろう。

その背景には多くの学生が外地から苦勞して引き揚げてきて苦勞を共にしたこと、「旧制愛知大学が無一文の中から産声を上げて晴れて旧東亜同文書院大学を先駆とした大学を学びに集まった学生たちと作り上げたこと、そこには当時学問的には日本屈指の優れた教授陣に学問の洗礼を受けたことなどが、彼らの自信と誇りを培ったことなどを挙げることができるように思われる。

¹ 藤田佳久・佐原陽子 (2021) 「愛知大学創設期における入学制の動きについて」、『同文書院記念報』Vol. 29。

² 藤田佳久 (2020) 「日本初のビジネススクールとして誕生し、発展した東亜同文書院」、『同文書院記念報』Vol. 28、179～204 頁。

³ 藤田佳久 (2020) 「荒尾精と日本初のビジネススクール・日清貿易研究所の誕生」、『同文書院記念報』Vol. 28、5～28 頁。

⁴ 佐藤恭彦・藤田佳久編 (2017) 『日本人学徒たちの上海——上海日本中学生と東亜同文書院生——』あるむ、302 頁。

⁵ 愛知大学五十年史編纂委員会 (2000) 『愛知大学五十年史』通史編、愛知大学。

⁶ 同書、102～104 頁。

表A-30 [F.10-2] 今日の愛知大学をどう見ているか。また要望、提案も。

A 経済学科(旧制大学)

東亜同文書院出身生

- ・大学の個性をもっと打ち出すべき。
- ・地方大学化へ向っている。
- ・地方大学化を懸念している。
- ・中部日本、日本、世界で活躍できる人材を輩出できるシステムを。

その他の出身生

- ・世界へ飛び立つ学生が少いのではないかな。
- ・総合大学化をめざすべき。
- ・中国友好をリードできる大学へ。
- ・教員はもっと頑張してほしい。
- ・産学は駅近だけで内容のP.R.がない。
- ・学部と短大のP.R.を。

B 法学科(旧制大学)

- ・戦後志をもって愛知大学が創設された自信と誇りをもっと継承すべき。
- ・設立趣意の「地域文化への貢献」については、もっと地域固着化を図るべき。
- ・大学の発展が遅れているように見える。
- ・大学の発展には岩井透氏のカ、同窓会には伊藤氏の力が大きく寄与した。それらの力を再評価し、今日の大学へ注入すべき。

(アンケートより作成)

表A-31 [F.11] 後輩の学生たちに伝えたいこと

A 経済学科(旧制大学)

東亜同文書院大学出身生

- ・東アジアへの視点と力点へ。
- ・大いに羽ばたいてほしい。
- ・書院史をふくめ愛知大学史を学び、知ってほしい。
- ・中部はもちろん、日本、さらに世界へ羽ばたいてほしい。

その他大学の出身生

- ・多分野にわたり、色々学んでほしい。
- ・書院史、そして愛知大学史を学んでほしい。(2件)
- ・悪に負けない人物になってほしい。

B 法学科(旧制大学)

- ・愛知大学創設の精神を学び、忘れないでほしい。自信と誇りを。
- ・愛と知の結合、そのキャンパスで学べる幸せと自信を。
- ・スケールの大きい人間になってほしい。
- ・この地方第1の大学としての誇りと地域文化への貢献を。

(アンケートより作成)

表A-32 [F.12] 人生への満足度

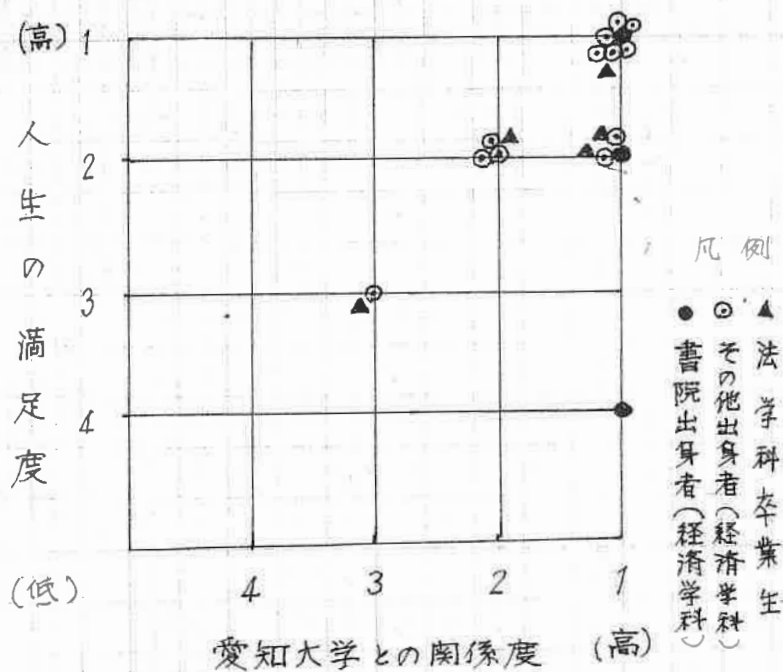
満 足 度	A 経済学科(旧制大学)		B 法学科(旧制)
	書院出身生	その他出身生	
1. 大いに満足	2人	5	1
2. ますます満足		6	4
3. ふ つ う			
4. 少し不満	1		
5. 大変不満	1		
計	4	11	5

(アンケートより作成)

表A-33 [F.13] 人生の満足度と愛知大学との関係

関 係 性	A 経済学科(旧制大学)		B 法学科 (旧制大学)
	書院出身生	その他出身生	
1. 大いに関係	2人	6	3
2. 多少関係		3	1
3. ふ つ う		1	1
4. あまり関係ない	1		
5. 全く関係ない			
計	3	10	5

(アンケートより作成)



図A-2 旧制愛知大学卒業生の人生の満足度と大学との関係

(アンケートより作成)

【卒業生アンケート調査報告特集】

第2章 「新制愛知大学」法経学部経済学科卒業生たちの在学時代とその後の軌跡

1. 「新制愛知大学」への歩み

前章でもふれたように、教育の民主化、国民教育の拡大による高等教育機関への進学が増大が期待され、教育改革は高等教育まで及んだ。その中で新たに制定された新・学校教育法は4年生の大学教育が原則とされ、昭和24年(1949)、新制大学が全国で発足することになった。ただし、基準に満たぬ学校は翌年短期大学として暫定的に認められたが、教育需要を満たすようになり、昭和39年には制度化された。こうして昭和24年にはそれまでの帝国大学、旧制大学、旧制高等学校、(高等)専門学校などをベースに再編成が行われ、「新制大学」が発足した。その当時の国立大学は69校、公立大学は17校、私立大学は81校が再編ないし新たな誕生を見た。愛知大学はそれまでの「旧制」の残存を満たしながら、新たな文学部新設も含めた形で立案し、設置審査委員の实地調査を得て、「法経学部、文学部(社会学科)」の新制大学として認められた。この新設文学部の社会学科は全国初の学科であった。なお、すでに昭和22年9月に開設されていた夜間2年制の法政、経済、文学別科、夜間1制の高等科は、昭和24年のこの新制大学発足時の翌年に夜間の短期大学部として、改組され発展することになった、具体的には、豊橋の法経科と文科、名古屋車道の法経科である。この年には、文学部にさらに文学科も設置された。

こうして、新制大学が全国で一気に200校以上誕生したし、この東海地方にもいく

つかの新制大学が誕生した。このような動きの状況について、『愛知大学五十年史』は、(愛知大学の)教授陣容に関しては、このような形容は適切ではないかもしれないが、一言で言って豪華絢爛(けんらん)たる顔ぶれである。新制開設時、一举に200校以上の大学が設立され、「駅弁大学」とも称された中で、本学に匹敵しうる内実を備えた大学がどれだけあっただろうか。豊橋に愛知大学ありとは東京でも良く知られていた」と述べ、これだけの優れた人材を豊橋へ呼び寄せる魅力、人徳を愛知大学が備えていたということに驚嘆するとも付記し、50年後の当時、学生や社会への吸引力を維持しているかを自問している¹。

上記の豪華絢爛たる教授陣については、前章で示した「旧制愛知大学」への志願者がほとんど異口同音に志願理由にあげており、きわめて広く知られたことであったことがわかる。改めて慕っていた学生と慕われた教授たちの間の強い絆が浮かび上がってくる。これは今日の愛知大学にとっても「温故知新」とすべき課題であろう。

なお、表B-1は新制大学スタート後の昭和27年における愛知大学の学部学科構成と学年別学生数を示したものである。旧制と新制が並行しているが旧制学生も300人余り在籍し、一方新制学生は文学部とも全学年がそろい、夜間短期大学も発展し元気である状況がうかがわれる。

本章、以下のアンケートは、これら学生も含め、昭和34年の法経学部卒業生の内、経

済学科の卒業生を対象としたものである。

〔表 B-1〕旧制新制大学並びに短期大学部の学部学科構成と
学生数 (1952年 5 月 1 日当時)

新、旧制別	学部名	学科名	学 年 別				計
			1 年	2 年	3 年	4 年	
旧 制 大 学 (三 年 制)	法経学部 法経学部 研究科 〃	法 政 科			99		99
		経 済 科			213		213
		法 政 科	3	2			5
		経 済 科		7	2		9
新 制 大 学 (四 年 制)	法経学部	法 学 科	71	71	57	111	310
		経済学科	381	422	302	417	1,522
	文学部	社会学科	24	13	7	10	54
		文 学 科	43	30	24	29	126
短期大学部 (夜間二年制)		法 経 科	458	354			812
		文 科	20	22			42
計			1,000	921	704	567	3,192

〔出典〕『二十年史』116ページ

2. A 系列の出身校、志望理由など。

アンケートの問うた内容は前章の「旧制大学卒業生」と同じである。全部 117 名の回答があった、以下順にみていく。

表 B-2 は、各卒業年別の出身校を一覧した。高齢化と学生数の関係で、初期ほど回答数は少なく、最後の昭和 34 年が最も多い。同 31 年には短大からの編入性も見られるが、概して東海地域の出身者が多く、「旧制大学」時代の回答よりもその傾向が強い。ベースは地域型になっていたといえる。当時の経済事情から言えば、東西の大都市へ下宿をして進学するのは厳しい環境にあったし、東西の大学もまだ整備は進んでいなかった。次第に経済成長期に入ると愛知県を中心にしたメーカーを中心として関連産業の勢いも見られるようになり、この時期から地元地域志向が始まっていたといえる。

表 B-3 は、愛知大学を知った理由、同 B-4 は愛知大学を志望した理由である。前表からは愛知大学が新制大学になった当時からすでに身近な存在になっていたことが知られ、次第に愛知大学についての情報や特性が評価され、色々な関係者からの推薦があったことがわかる。また、後掲表では愛知大学の魅力を感じつつ、経済学科で学びたいという意識も含め、学ぶ意欲へ焦点化されていること、そして前の表と同様に、多くの関係者である高校の先生や親族からの推薦が多く、愛知大学の信頼度が高まっていたことがわかり、この地域のリーディング大学であったことがわかる。

次は、在学中の学費と生活費の負担者についての回答である。全体としてみると、授業料では約 5 割強の学生が親からの支援で、残る 4 割弱ほどが奨学金とアルバイトに依

2

表B-2 [A3] 新制経済学部年次別入学生の出身校 (アンケートより作成)

～28年	29	30	31	32	33	34		年次不明
豊橋商	信大・教育	半田商	国府商	名古屋	明和	東濃	桑名	海軍経理
明大・商	四日市商	西陵商	韮崎商	陵如	浜松北	国府	四日市商	深川
	深志商	豊橋市立工	浜松北	刈谷	八百津	東海		岡崎工
	愛知商	豊川工	浜松西	益田	安城	滝		佐原
	豊橋	名市立工	東海	時習館	名市立工	豊川		阿南
	一宮	明和商	富山中却	惟信	旭丘	本郷		浜松西
		四日市	松蔭	浜松西	中京商	柳井		刈谷
		拳母	岩津	豊橋商	西陵商	名古屋学院		豊橋
		愛短大	西陵商		拳母	滝		
			半田商		豊橋東	蒲郡		
			掛川西		安城農林	成章		
			愛短大		津島	明和		
			愛短大		桜台	刈谷		
					菊里	豊川		
					岡崎	大垣南		
					北野	浜松西		
					明和	松蔭		
					国府	岐阜		
					国府	豊橋商		
						刈谷北		
						瑞浪		
						不破		
						中京商		
						何陽		
						時習館		
						名古屋西		
						東濃		
						西陵		
						東邦		
						四日市		
						尾鷲		
						愛短大		
						春日井		

(アンケートより作成)

表B-3 「A5」 愛知大学を知った理由

〔～昭和29年〕	〔昭和31年〕	〔昭和33年〕	〔昭和34年〕
・高校教師から	・高校教師から 3人	・高校教師から 2人	・高校教師から 2人
・書院卒生から	・親族から	・友人から 2人	・書院卒の教師から
・身内・知人から 2人	・愛大創設を知り	・身内から	・すべての教授陣
・大学新設ニュース	・すべての教授陣	・友人から	・旧制大学からの歴史
・大学案内から	・設立趣意書を読み	・県内唯一の法経学部	・創立時から知る
・地元だから	・愛大の流れを知り	・すべての教授陣	・有名な大学
	・愛大の先輩から	・知名度高い 2人	・中国研究にすぐれている
〔昭和30年〕	・自由なふんばり憧れ	・地元有名大	・以前から知っていた
・書院関係者から 2人	・入学案内から	・名古屋私立大トップ	・知を愛する趣旨
・先輩から	・帰国が遅れたが	・建学精神を知り	・書院からの伝統
・身内から 2人	・二次試験に合格	・引揚げ大に惹かれ	・愛大事件で知った
・教授陣充実		・大学案内から	・受験雑誌で 2
・旧帝大系先生の自由さ	〔昭和32年〕	・愛大予科生から	・新南で
・愛大創設を知りて	・高校教師から	・通学至便 3人	・商高卒も受験可能
・大学一覧から	・愛大先輩から	・先輩から	・授業料安い
・自明で自然に	・通学至便 3人	・授業料安い	・東邦高とのつながり
	・良いふんばりに		・通学至便など 10人
			(アンケートより作成)

表B-4

〔A-6〕 本学志望理由の年次別キーワード

昭和～29年まで	30年	31年	32年	33年	34年
著名教授	同文書院の系統	旧友らと学べる	書院卒出のすめ	教授陣の充実 4	設立趣意書
書院の旧制文化	偉大教授陣の充実	教授陣の充実	中国語を学べる	学費が安い 2	親大生への取組
蔡 あり	海外への優れた教授	書院文化の流れ	留学生活がでる	入試方法 4	教授陣充実 5
通学至便	通学至便	質実剛健故国	通学至便 3	他人へのすめ 4	学費が安い
	蔡 あり	自由な環境	会計士をめざす	通学至便 3	私学のトップ校
	著名教授たち	語学を学べる		引揚大学	非 栄 教
	会計士をめざす	高校教師からのすめ		経済学を学ぶ	書院一校大先輩尊敬
		経済を学べる		建学精神に共励	中国 研究 2
		引揚の事情			通学至便 2
		通学至便			自分の実力 2
					先輩へのすめ 4
					昼夜間薄利
					落ちのきある豊橋故郷
					夜間学部あり 3
(注) 表中の数字は同一キーワードの数を示す		(アンケートより作成)			

存し、一方、生活費負担でも親依存が5割、奨学金やアルバイト、一部は親に依存していたことがわかる。前述したように、当時は経済的にはまだ大変な時代であり、愛知大学も勤労学生を考慮して授業料も他大学に比べかなり安く設定しており、それもまた愛知大学への志望理由のひとつにもなっていたことがわかる（222 ページ参照）。

3. B 系列のアンケート

この系列では入学先については、それに従って整理しておりここでは省く。また、入学理由については個別的な回答にはなっているが、前章の B3 と B4 の回答にだぶる面が多く、それも省くことにした。

4. C 系列の在学中の学業についての回答

表 B-4 と表 B-5 は、在学中の学業のウェイトの回答である。表 B-6 は在学中の卒業年次別の学業のウェイトを示した。全体では、回答数の過半が勉学に指向していたことがわかる。その理由は次表に示した通りで、意欲に燃えて学問に打ち込んだ学生や人生設計も考慮しながら学んだ学生たちがいたことがわかる。愛知大学が学びのセンターであったことがうかがえる。

表 B-7 と同 8 は、そのような学びの中で、興味や関心を持った分野と、次いで印象に残った教員についての回答を整理して示した。興味関心分野を見ると、専門分野から語学、教養までかなり広範囲に及んでおり、特に教養科目の分野が目立っている。新制大学として制度化された教養部提供の科目がそれなりに効果を上げたとも見えるが、愛知大学は旧帝大が採用した前期2年間の教養部制ではなく、教養科目は4

年間の在学中に受講すればよく、3年生以上でも受講できる形をとっていた。理念はバランスの取れた人材育成にあり、旧帝大系大学とは一線を画していた。そのシステムがここに教養科目が並んだようにも思われる。しかし、次表の印象に残った教員についてみると、一気に専門科目担当の教員が並ぶ。特に経営学の大石教授はその実践的な授業内容が多くに関心ある学生の心をつかんだようである。一方、マルクス経済学では、これもまた理屈だけでなく、ズバリと明言する内容の教授が人気だったようである。近代経済学では、後半就任した岡崎教授の計量的経済学に魅了された学生も多かった。

経済学科の専門の授業では、ゼミがその核心を担うことになる。そこでトレーニングを受けて学生たちは卒業論文へ挑むことになる。

まず、そのゼミはどうであったのか。表 B-9 がそれである。多くが「忘却」との回答が多かった中で、何とか記憶をたどって回答してくれた貴重な記録である。指導教授と指導テーマが浮き上がってくる。学生数が増え、テーマの幅も広がり、この期間としては最も新しい昭和34年卒のゼミの数も増え、ゼミ活動が展開し始めた感を受ける。大きくみると、それまでのマル経と近経の2本柱を中心にしながらも、その周辺の分野が新たに取り巻いていく様子が読み取れる。これはこの時期日本経済が歩みだし経済のみならず、社会もそれに対応し始め、新たな価値観が生じてくるその次の舞台の予感を感じられるように思われる。新しい分野、世界を知り始めた学生たちの気持ちが伝わってきそうである。

表B-5 「C1」在学中の学業の年次別ウエイト

ウエイト	～昭29	30	31	32	33	34
1 学業が主	4	3	8	5	9	25
2 どちらかといえど		1	2	1	4	3
3 まずまず	2		8	1	6	4
4 学業は徒	1	1			2	6
				(アンケートより作成)		

表B-6 「C2」「学業が主」の理由

「～昭和29年」	・何といても大学生生活を實現したい。				
「昭和30年」					
「昭和31年」	・受けられる授業はすべて受講。経営学を中心に学ぶ。・当りのこと。				
	・進学率が低い時代ゆえ学生の移り目は学業だ。・学業に専念できた。				
「昭和32年」	・経済学とは何かを学ぶ。・色々のなかで進学させてくれた親へ感謝して、				
	・さらなる教養を身につける。・社会人として役立ちたい。・零細農家から自立のため				
「昭和33年」	・すぐれた教授に師事。・将来の経済的自立のため。・学生本来の姿。				
「昭和34年」	・通学時間をカバーするため。・学費の心配をなして学業へ。・就職も考えたから。				
	・授業料免除ゆえ学業を。・経済ラジオをめぐす。・兄の援助に答えるため。				
	・アルバイト不要ゆえ学業に。・高校の不十分をカバー。・どうしても専攻をわさしたい				
				く以下	略)

表B-7 [C3] 興味、関心を持った分野

[~ S. 29年]		[S. 32]		弦 記	
山本ニ三丸 (貨幣)	3人	経営学	統計学	新南学	2人
高桑		全科目		(細迫)	2
細迫		倫理学		中国語	3
哲学		文学		(金丸)	
中国語				(桑島)	
[S. 30]		[S. 33]		(アサートより作成)	
経営学	2	経営学 (大石)	会計学	ドイツ語	
統計学		計量経済 (岡崎)	山本	フランス語	
経済原論	2			厦山登山 (体育)	
憲法		現代経済 (小幡)			
日本の自由化		応答経営 (野)			
英語		憲政学 (三好)			
フランス語		経済情報 (中日新聞)			
源氏物語		新聞			
本邦学長談		社会学			
		哲学 (桑下)			
[S. 31]		論理学			
経営学 (大石)	3	化学			
山本		華語要編			
財政学					
会計学		[S. 34]			
経済学		経済学		4	
近代経済学		経営学 (大田)		4	
英語 (若江)		貨幣金融 (山本)			
〃 (大内)		近代経済 (小幡)		2	
西洋哲学		経済学			
心理学 (梶山)		資本論		2	
国文学 (大増)		会計学			
哲学		ケルツ経済		5	↑

表B-8〔C4〕印影にのぞいた先生たち

先生の名前	昭和29	30	31	32	33	34		34
小 噺	2		1	2	1	1		黒木 1
小岩井	3		3	2	4	6		杉 1
細 迫	3		2		2	3		松葉 1
山 本 三丸	2	1	2	1	2	10		金丸 1
桑 島	2		1			3		川崎 1
林 要	1		1			2		田中
伊 藤	1							菅木 1
胡蝶本	1							太田 1
久曾碑	1	1	1	1		2		桂野 1
平 尾	1							若山 1
大 内	1	1	1			1		山崎 1
大 井 集	1		1					杉木 1
大 石 集	1	1	3	3	4	9		欧陽
本 板 倉	1	1	2	1		2		
横 山	1		2					
藤 井 好	1		1			1		
三 若 江	1		1			2		
王 城 坂	1		1			3		
王 末 坂	1		1					
大 土 島	1		1					
大 崎 島	1				2			
真 崎 下	1				2	4		
鈴木 保郎					1			
池 上					1			
一 田					1	2		
副 島					1			
酒 井					1	1		

2021年 3月 1日

(マシネットより作成)

100

	29	30	31
指導教授	ゼミティー		経営学
山本 3件	資本論研究	杉本 1	大石 2 経営学
小幡 1	ケイズ研究	清水 1 新聞研究	本間 1 商法
林 1			山本 1 資本論
			玉城 1 経済史
			小幡 1 地方財政
32	33	34	
大石 2 経営学	岡崎 1 ケイズ経済学	大石 3 英語精読	山崎 1 会計学
小幡 1 財政論	三好 1 農村社会学	" " 人間関係論	田中 1 経済学
郡 1	郡 1 社会学	小幡 2	門屋 1 貨幣金融論
大島 1	清水 1 社会学	岡崎 4 近経. 英語	杉浦 1 経済地理
	紺野 3 会计学	山本 3	副島 1 計画経済論
		清水 2 新聞学	
		紺野 4 会计学	
		郡 1	
		青木 3	
		渡辺慎一郎	
		会计学理論	
		"	
		(アンケートより作成)	

そして学生たちの自立した卒論が、表 B-10 である。新制大学創設期の昭和 29 年までの卒業生の卒業論文は、回答分だけではあるが、アダムスミスの古典経済学から、マルクス主義の資本論、そして近代経済学のケインズ経済学と経済学史の核になる研究から始まり、それに戦後日本の農地改革分析が加わり、当時の戦後日本の経済学のスタートとしてふさわしいように思われる。それが次第に財政学や会計学、地方自治論、欧米文献研究、マスコミ研究、なども加わり、学生たちの関心の幅も広がって発展していく様子がわかる。以上のゼミや卒論もふくめ、教授、先生たちとの交流についての回答が表 B-11 である、昭和 30 年卒業生は少ないが、それを除くと各年次とも全体的には回答記入者の 8 割ほどが「交流あり」としており、先生がたとの交流は公私ともにあったことがわかる。とくに懇親会や先生宅への訪問が多い。また、それに関係して図書館の利用状況を示したのが表 B-12 である。ここでも記入回答者数の内の利用率は高く、図書館の利用はかなり進んでいたことがわかる。

以上も含め、在学中の満足度とその理由を示したのが表 B-13 である。それによれば「まずまず」以上の満足度を示した卒業生が各年度とも多い。その理由を見ると、優れた教授陣の下で、幅広く自由に学べ、国際感覚まで身に着けられるほど、勉学ができたといえる。またそれ以外の満足度でも、昼夜開講制下で、夜も勉強できたとしている。

そしてこのような満足度が、その後の人生に与えた影響について、その影響レベルと各理由を示したのが、表 B-14 である。

ここでも、「まずまず」以上の影響を受けたとする回答者が 6 割から 8 割以上を占めていて愛知大学への評価は高い。その理由は各人にとって個別的だが、研究法、研究態度、人間としての精神力、就職成就などがあげられていて、次第に多面的になっていることがわかる。

5. D 系列のクラブ活動状況について

表 B-15, 16, 17 はクラブ活動への参加状況、それがその後の人生へ与えた状況のレベル、そしてその際の社会参加への展開状況を示した。

まず参加加入したクラブ活動を見ると、当初は施設整備の関係や回答数の少なさもあり、参加クラブ数は多くないが、それが次第に幅がひろがり、運動系のみならず文科系も含め、多様化していく状況がわかる。馬術部が当初から存在しているのはもちろん東海地方唯一で当時としては極めてユニークであった。クラブ員の中には当時の国体選手に選出され出場したメンバーもいたほどで、今日もその伝統が生きている。その背景には豊橋キャンパスが明治末に設置された第 15 師団時代は騎馬兵が主流であり、その後の教導学校や陸軍予備士官学校時代も馬場が維持されていたことが、その施設利用を愛知大学でも可能にしたためかと思われる。そして各クラブへの参加レベルも高く、クラブ活動そして表 B-16 に示すように、このクラブがのちの人生に与えた影響も大半が認めている。青春をクラブに燃やした学生も多かった。それは卒業後の社会活動にまでリンクしていることがうかがえる (表 B-17)。

表 B-11.

[C7] 先生との交流あり

年次	「あり」	回答数	全数
～昭29年	7	10	13
30	2	7	17
31	8	9	13
32	3	4	8
33	7	11	13
34	20	24	47

(アンケートより作成)

表 B-12

[C8] 図書館利用者

年次	あり	回答数	全数
～昭29	5	7	10
昭30	5	8	17
31	8	8	13
32	5	6	8
33	10	15	19
34	17	25	47

(アンケートより作成)

表B13.C9J 在学中の満足度と理由

レベル	～S.29	S.30	S.31	S.32	S.33	S.34	計
1. 大いに	1	2	3	3	4	6	19
2. まあまあ	1		1	2	3	0	7
3. まあまあ	1		1		1	2	5
4. あまり							
〔理由〕	～S.29	S.30	S.31	S.32	S.33	S.34	
1 大いに	元氣	優秀な先生方	教授陣の一流の教授陣	個性の強い授業	通学至便	優れた教授陣	多様な研究会、学科すべて、国際感覚 学科すべて、友人を得た
			優秀な教授陣	国際感覚	自由、充実	国際感覚	
			自ら勉強		自治会交流		
2 まあまあ	自由な学生生活	地方学生多い		校学で勉強			学風、勉強、同僚、先輩仲間
3 まあまあ					多くの学生、校学で勉強		夜学で勉強充実
4. あまり							

(アンケートより作成)

表B-14 [C11]人生への影響

影響レベル \ 年次	～S29	S30	S31	S32	S33	S34
1.大いに	1	1	2	1	2	7
2.まずまず	3	1	2	3	3	5
3.まあまあ			1	1	3	2
4.あまり					1	1
5.無記	1			1	3	2
[C11]の理由						
1.大いに	就職,社会人	自信もち教壇へ		教員採用 人々へ奉仕	就職合格 平和活動の重み 国際感覚を得た	考え方を学んだ 教職につけた 学業が仕事に役立った(2人) 労務管理
2.まずまず	兄弟仲良く相続	研究態度を身につけた	学業達成感 探究心,法学思考,判断力	学び続ける 債権など契約を修められた	指導力 弓道部発足	学業が仕事に生きた(2人) 営業能力 法解釈の基本習得 人間としての幅の広がり
3.まあまあ			家族制度解体	社会へ出て基礎学力不足痛感	学業,先生,友人 受講は熱心	
4.あまり					学業と無関係の仕事について	

(アンケートより作成)

表B-15[D1] 加入クラブ		参加レベル			表B-16[D5] クラブの人生への影響				表B-17. 社会参加
	1人 (よく参加)	1人 (よく参加)	1人 (よく参加)	1人 (よく参加)	大いにあり	ますます	まあまあ	あまり	した(○)
[昭29] 馬術	1	1			1				
演劇	1	1			1				
不明	1		1						
[昭30] 柔道	1	1			1				○
[昭31] マクダス	1				1				○
法学研	2	1		1			1	1	
サッカー	1	1			1				○
中国研	1	1			1				○
合唱	1				1				
[昭32] 硬式庭	1		1				1		
法学研	1	1							
不明	1	1		1					○
[昭33] 文学研	1	1		1				1	
自治会	1	1			1				○
新 聞	1	1				1			
弓 道	1	1							
剣 道	1								○
弓道創設	1					1			○
卓 球	1								
[昭34] 法学研	3	2	1		2	1			○
茶 道	1	1				1			
空 手	1				1				
庭 球	1			1			1		
自治会	1	1							
水 泳	1	1			1				
不 明	1								○

(アンケートより作成)

表B-18 [E1] 就職活動状況

レベル	~S.29	S.30	S.31	S.32	S.33	S.34
1 かなり活動	1人		2	1	1	
2 やや	1			1	1	
3 ふつう	1		1	2	2	6
4 あんまり	1	1		1	5	2
5 全くしない		1			2	5
無記	1	1	2	2		8

(アンケート より作成)

表B-19 [E3] 就職環境状況

レベル	~S.29	S.30	S.31	S.32	S.33	S.34
1 かなり厳しい	2人	1	5	1	7	10
2 やや厳しい	1			5	4	8
3 ふつう						
4 あまり厳しくない						
5 全く厳しくない						
無記	2人	1	1	1		3

(アンケート より作成)

表B-20 [E8] 就職のさい世話になった人

レベル	~S.29	S.30	S.31	S.32	S.33	S.34
1 大学就職課			2	1	2	5
2 卒業生	1人				1	
3 知人			1		2	2
4 自 力		1	2	2	1	2
5 就職先						
6 ほ か	2		1	1	6	2
無記	2			1	1	6

(アンケート より作成)

6. E 系列の就職状況についての回答

戦後の新制大学では、学生時に就職の斡旋をする傾向が強まった。とりわけ昭和 20 年代半ばの経済不況化の時代や昭和 30 年代前半にかけての就職は大変で、戦前の第 1 次世界大戦後と同様に、「大学は出たけれど」の状況が見られた。当時はまだいわゆるコネの時代でもあったが、大学に就職課が作られ、企業などからの求人の受け入れと学生への紹介を積極的に行うようになり、学校推薦制度が愛知大学にも取り入れられた。しかし、不況時、学校推薦は学生一人につき 1 回に限定されたりして厳しい状況もあった。一方、「旧制愛知大学時代」でも見たように、教授による推薦も生きていた。本間先生や小岩井先生などが推薦状を書き、就職先を確保したケースもみられた。

表 B-18 は、当時の就職環境状況で、各年次とも回答者のすべてが「かなり」「やや」厳しいとしている。しかし、表 B-19 が示すその対応のために就職活動を積極的に行ったかは、それほどではなく、「ふつう」だとか「あまりしない」が目立つ。世の中一般は厳しかったが、個々愛知大学の学生にとってはそれほどではなかったことを示している。表 B-20 はその理由の一端を示している。就職に際し、世話になった相手は、就職課のほか多様な世話人がサポートしてくれたことがわかる。つまり、コネの力でほぼそれによって就職を実現していたといえる。つまり、昭和 20 年代後半は若干の愛大事件の影響があったとする記述もあるが、現実には就職を実現しており、この 30 年代の不況期も就職課の斡旋も含め、コネ的状況で学生たちは有名企業

に就職を決めている。しかも、当時の愛知大学はこの地方唯一の法経文経系大学として優れた教授陣も知られ、企業側も愛知大学卒業生を積極的に採用した面が強く、ほかの大学の追随を許さない勢いがあったといえる。

それは、次の表 B-21 の学生たちの就職先からもわかる。昭和 30 年代になって軽工業から機械工業が次第に復活、起業が進むようになる中で、愛知大学卒業生たちはその波の第一波の前線に就業していることが読み取れる。教員や県や都市レベルの公務員もその波の中にあつたといえ、貴重で有用な職務を果たすことになっていった。

こうして新たな職場へ就業した愛知大学の卒業生たちは、卒業した愛知大学をどのように意識したのであろうか。それを示したのが表 B-22 である。3 つの意識レベルの中で、もっとも「意識した」回答は絶対数で 17 人、「少し意識」は 1 人、「特になし」は 7 人となっている。最も「意識した」の理由は、すでに同じ職場に多くの先輩がいたためという回答が多い。あとは初めての愛知大学卒業生の職場であったり、愛大が東亜同文書院からの系統であることを知っている人が各所に多く、その目で期待されて見られることが多かった、などである。「とくになし」の回答では職場は学歴とは無関係だったとしている。

それに関連して、表 B-23 卒業生たちの他大学卒業生との比較上の評価についての回答である。回答をキーワード的にならべた。

自己評価であるため、自画自賛的な側面も含まれているかもしれないが、全体としてはネガティブよりもポジティブな評価が

表B-21〔E7〕年代別就職先

〔～S29〕	〔S33〕
菊井織布 愛知県 静岡中央銀 北海道教委 豊橋教委 フコク生命 三重県教委 名古屋タイムス 防衛庁 無記 4人	高野商事 明治生命 ヤナセ 富士ゼロックス オリエンタル中村 古河電池 銀行(大阪) ケンウッド 日本ビクター 豊田市役所 福井漁網 名古屋市役所 名古屋トヨタディーゼル 税務署 名古屋市役所 碧海信用金庫 大栄企業 無記 4人
〔S30〕	〔S34〕
明治生命 高野精密 日本電信電話公社(NTT) 岡崎信金 名古屋教委 静岡県庁 20世紀フォックス デンソー 教委(中学) 無記 3人	遠州染工 中央信託銀行 住友生命 三菱自動車 中部日野ルノー 高校教員 朝日工業 名古屋塗料 人事院 玉塚(みずほ)証券 丸吉商店 八千代証券 菱和調湿工業 豊橋市役所 大阪ナショナル販売 明治生命 岩崎通信機 高校教員(岐) 誠工舎 地方公務員 東海銀行 岐阜県庁 公的医療機関 大同洋紙店 名古屋鉄道 名鉄運輸 岡三証券 (大阪) 2人 (名古屋) 2人 中部電力 愛知県庁 書店経営
〔S31〕	
中学教員 朝日工業 ラジオ関東 河合楽器 オリエンタル中村 2人 網太製網 日本農業KK 高校教員 名古屋銀行 日本電信電話公社(NTT) 日本発電公社 近鉄広告社 無記 1人	
〔S32〕	
昭染貿易 名古屋電気 郵政省 地方公務員 日本電信電話公社(NTT) 富国錦 網太製網 無記 2人	

(アンケートより作成)

表B-22[E9] 就職先での愛知大学への意識レベルと理由

年次	意識 レベル	1 意識 した (理由)	2 少し 意識 (理由)	3 特 に なし (理由)
～昭和29年		2人 ・ 職場に先輩が多かった		
昭和30年			1人	
昭和31年		14人 ・ 母校ゆえに ・ 学校推薦ゆえに ・ 誇りと名誉 ・ 当時4大卒の小学校教師は少なかった		
昭和32年		1人 ・ 母校の名誉を汚さぬように	1人 ・ 職場に先輩が圧倒的多数 ・ 他大学との比較を羨望した	1人
昭和33年		4人 ・ 母校初就職の職場 ・ 同窓生多く有利であった ・ 各所に東証同文書院の系統を知る人が多かったため ・ 母校の誇りがあった		2人
昭和34年		6人 ・ すぐれた先輩がいて誇り ・ 活躍する先輩が多かった ・ 同期の国立大卒に負けないと ・ 同職場に母校先輩が多かった ・ 名古屋支店へ転勤ができたため		4人 ・ 学歴重視の職場ではなかった ・ 東大関がみられた

(アンケートより作成)

表B-23[E14] 愛大卒業生と他大学卒生と比較特性

<p>[~S.29]</p> <p>根性あり</p> <p>団結力あり</p> <p>まじめ 2人</p> <p>個性強い</p> <p>その他</p> <p>無記 6</p>	<p>[S.34]</p> <p>バイタリティと指導力</p> <p>組織力</p> <p>ローカル愛と</p> <p>粘り強さ</p> <p>独立、自立</p> <p>堅実</p>
<p>[S.30]</p> <p>実経済とリンク</p> <p>私大として高評価</p> <p>企業の中堅担った</p> <p>設立趣意書を理解</p> <p>無記 4</p>	<p>誇りと負けぬ精神</p> <p>県内では優位</p> <p>人望あり、後輩いも、</p> <p>使われ易く、うまく使う</p> <p>斗争心</p> <p>本人次第</p>
<p>[S.31]</p> <p>自分の意見をはっきり言う</p> <p>優秀である</p> <p>比較したことなし</p> <p>無記 3</p>	<p>考えたことなし←10人</p> <p>忘却 無記入 21人</p>
<p>[S.32]</p> <p>優秀</p> <p>バイタリティあり</p> <p>無記 5</p>	
<p>[S.33]</p> <p>書院継承で自信 2人</p> <p>一番活躍している</p> <p>実直勤勉 2人</p> <p>地味</p> <p>個性的</p> <p>横のつながり</p> <p>学生運動</p> <p>無記 5</p>	

(アンケートより作成)

大きく上回っている。そして卒業年を超えて共通に評価が見られる「努力家」、「まじめ」、「自由」、「個性派」、「独立独歩」、「良い評価」、「自信」、「管理職」などのキーワードがあげられる。そこに昭和 30 年代前半までの職場でまじめに頑張っている愛知大学卒業生の姿が浮かんでくる。

次いで表 B-24 の愛知大学卒業生の他大学生卒業生との比較でみた特性認識についてである。前表で参られた「まじめ」「努力家」などの気質が職場社会の中で「組織力」、「指導力」、「バイタリテイ」、「発言力」など実践的でバランス感覚のある特性を生かして、優れて活躍していたことがうかがわれ、企業社会のなかでも評価されていたことがわかる。とくにこの世代は企業や行政、教育などの各界でリーダーとして活躍した人材が多く輩出されており、その背景がわかる。また、自由、個性。独立心などは、自由な学園の基調もあって、そこから芸術文化界で活躍する国際的、日本人材も輩出している。

7. F 系列の「愛知大学卒業生として」の回答

ここでは愛知大学卒業生としての、愛知大学とのかかわりについての考え方や意見などを問うた。その回答である。

まずは表 B-25 愛知大学設立趣意書の内容についての受け止め方、反応についての回答である。

それによると、全体として全面的に受容すると反応をしている点が大きな特徴である。しかも、「機会あるごとに参照」、「自分の宝だ」、「日常生活の基準にしている」、「心に秘めている」、「この理念で生きて

きた」、「心身に染み込んでいる」、「信念を持ち愛大を愛してきた」、「愛大はわたくしの友達だ」などなど、自からの実践のなかにも取り入れているなど、予想以上にこの設立趣意書への理解と受容が大きく強いことがうかがわれ、趣意書が文字通り愛大生、同卒業生の精神と同化していることがわかる。これは本間先生たち何人かの指導的な先生たちが、新たなあるべき大学像を議論検討して生み出されたとされ、そのことも多くの入学学生の胸に共感として入り込み、定着したといえる。意見の中に昭和 30 年代の学生間では希薄化していないかという懸念が記されているが、回答者がまさに初めて胸の内を開陳した反応から見ると。まぎれもなく、当時もなお「愛大憲法」として認識され「愛されてきた」といえる。

表 B-26 と同 27-1 は、「旧制大学時代」に書院生など外地から引き揚げてきた編入学生との交流についての状況を問うた回答である。それによると初期の昭和 29 年度までの卒業生ほど接点が多く、昭和 31 年度の卒業生までは直接の接点があり、じかに交流をしていたことがわかる。しかし、そのあとは卒業後に同窓会、寮歌祭。霞山会などでの交流である。ところで、そのうちの寮歌祭は旧制高校の予科生が主催して戦後、旧制高校が廃止された中で、その体験を傳承しようといわれはじめた。そんなときに愛知大学の学長であった本間先生が、上海にあったとはいえ、東亜同文書院大学に昇格したときに予科ができた、愛知大学も戦後とはいえ「旧制大学」としてスタートしたときに予科ができた。当然、寮歌祭のメンバー資格はあるから、

表B-24 [E13] 愛大卒生を他大学卒生と比較評価

[~S.29]		個性派も
努力家が多い		高い評価が多い
ますます		差異はない
十分いける		実力ない者は低評価
まじめ		まだ新大学の評価も
まじめ、地味		無記 9
(パシット感もほしい)		[S34]
アジア平和意識		優秀である
無記 3		自由なふんいき
[S.30]		努力家が多い
努力すればできる		まじめ、朴訥、芯強い
職場で重視される		自信をわけている
愛大トップを		斗争心もある
無記 7		積極的
[S.31]		個人次第だ
まずまずの評価		管理職は愛大
堅実で信頼可		(私の職場では皆
泥くさいが誠実		頑張っている
独立 独歩		迫力もほしい
ポジティブな人多し		評価されてない
誇れるところなし		他大学知らない
無記 9		考えたことなし
[S.32]		ふつうだろう
まじめで努力型		無記入 19
決して負けない		
差異はない		(アンケートより作成)
特にはない		
無記 4		
[S33]		
良い評価		
堂々とやってきた		
書院継承の自信 2人		
まじめで根を張り目的をめざす		

15

表 B-25 [F1]年代別愛大設立趣意書への反応

<p>[~S29]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域社会文化の貢献 / ・自由闊達精神 ・価値観による ・自由、受難の誇り ・一生の理念と国際的秩序 ・自由平等を実践 ・機会あることに参照 / ・引き揚げからその後の発展 ・無記入 <p>5人</p>	<p>[S33]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域社会の貢献 ・日常生活の基準としている ・同感、今後とも継承を ・職場での具体的成長 ・グローバル時代にフィットする ・語学の重要性 ・理念は今も誇り ・愛知は県名で良いのでは ・無記入(意識せず、ほか) <p>12人</p>
<p>[S30]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域社会貢献 町の ・リーダーとして実践 ・会社は海外へ進出 ・教職現場へ愛大の雰囲気 ・無記入+わからぬ <p>8人</p>	<p>[S34]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平和を愛する学校だと ・細迫先生の教えが今も支えてくれる ・自由の鐘を見上げ、よかったと ・自信 ・自由、自主、独立 ・自然のまま反映 ・心に秘めている ・ロータリー精神とも重なる ・30年代学生の中で希薄化してないか ・青年会議所で自信をもって活動、自信 ・視野広く東西大学と比較できる ・この理念で生きてきた ・業務をまじめにこなしてきた ・心身に沁みこんでいる ・信念をもち愛大を愛してきた ・愛大は私の友達だ ・戦後、平和実践下で役立った ・学の根本と真理の探究を意識 ・哲学、宗教も学ぶようになった ・公正、中立で過ごしてきた ・自分には反映していない ・少しだけさかも <p>2人</p>
<p>[S31]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・書院、愛大教授を尊敬 ・自信につながった ・納得している ・常に新しい知識を得る ・自分の宝だ ・学びの多様性と複眼力をもつ ・無記入 <p>4人</p>	
<p>[S32]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中国ビジネスの開拓を ・文字通り納得 ・世界平和を希求 ・無記入 <p>4人</p>	

(アンケートより作成)

表B-26[F.3] 書院など外地帰りの校友との交流						
〔～昭和29年〕						
	・甲斐氏、大野氏と					
	・中国語発音を習った					
	・寮で同室、鍛えられた					
	・兄はハルピン学院					
	・寮寮で交流					
	・書院出身者と交流					
〔昭和30年〕						
〔昭和31年〕						
	・書院、ハルピン学院、北京経専、					
	陸士、海兵、旅順高、京城予科					
	ほか多数の出身者と交流					
	・書院卒で富山県人と					
	・昭27年卒の人と					
〔昭和32年〕						
	・九州支部で交流					
	・霞山会、寮歌祭で					
	・卒業後交流					
	・中国語研究会で					
	・教師が書院卒					
〔昭和34年〕						
	・叔父が書院、鈴木城先生と縁					
	・大野先輩の世話になった					
	・ゴルフで					
	・東北大からの編入生と					
	・引揚げ先で					
	・愛大同窓会で					
	・（ほか）					

(アンケートより作成)

表B-27-1[F2] 年次別 書院からの編入生との交流						
交流レベル	～S29	30	31	32	33	34
1. 交流があった	6	1	2	1	1	1
2. 少しあった	5		2	4	4	10
3. なかった	1	10	5	11	17	24
無記	0	2	7	6	5	10

(アンケートより作成)

交渉して今後参加したらどうかと卒業生に伝え、交渉の結果、参加が認められたという経緯がある。その後、豊橋校舎でも寮歌祭の全国大会が開催されるほどになり、今日も寮歌祭は継承されている。しかし、全国の旧制高校の卒業生は高齢化がすすみ、後継学校がないため、後継問題が課題になっている。そんな中、唯一旧制愛知大学の予科は新制大学に世代変わりして引き継がれており、今や、愛知大学の卒業生たちが全国寮歌祭の役員を務め、その主催の中心になっている。愛知大学のおかげで寮歌祭が存続継承されているとあってよい。愛知大学の現役学生や卒業生にもっと知ってもらってもよいだろう。

それに関連して、旧制愛知大学の章で触れたが、開学、開講の2か月後には、学生たちの提案主催で豊橋市民との「市民交歓祭」が市街地のうちで空襲を免れた市公会堂をメインに「愛知大学」のグラウンドも使った「市民交歓祭」を約1週間行い、最終日には、昨年の朝ドラNHK「エール」で知られた古関裕而や伊藤久男たちの歌謡祭まで行われ、大盛況、大成功であった。企画や運営は書院出身の最上級生たちが中心メンバーで行い、それにより、出自がばらばらであった学生たちはまとまり、市民もやってきた初の大学の学生たちと溶け込んだ。まさに愛知大学設立趣意書のうちの「地域文化への貢献」をまっさきに学生が実践したという驚くべき快挙であった。そこには書院出身学生たちの書院での経験が発揮され、書院出身生ゆえに、空腹と物資具足の中で、実現できた愛大創設最初のビッグイベントであった。この交歓祭は終戦直後、また大学開学直後であり、その後の

学生たちに伝わりにくかったかもしれないが、それを問うたのが表B-27-2である。イベントの5年後の昭和29年までの卒業生は「知っている」、「知らない」がほぼ半々であるが、その後、順次知っているが減少している。それでも昭和30年代まで一部で知られていたことがわかる。もっと知られてよい歴史である。

次に表B-28は、昭和27年に起こったいわゆる「愛大事件」の認知レベルとそれに対する「うけとめかた」についてである。昭和27年は旧制が新制に変わった昭和24年の3年後のことである。この件の経過や内容については前章の「旧制愛知大学」の卒業生の対するアンケートの部分で触れたので、ここでは繰り返さず、その結果だけを示したい。

まず、認知レベルは事件発生時にまだ近かった昭和31年卒頃までは、「よく知っている」が大半を占め、昭和32年卒はそれがほぼ半分となり、昭和33年になると、「多少知っている」が最も多くなり、昭和34年も同様である。その「受け止め方」は「旧制大学卒生」と同様に、大学自治に対する警察権力への強い批判が多く、本間学長ら大学の姿勢に強く共感している。現場で体験した学生も含め、当時の警察のやり方への批判は、学生たちのバランス感覚の表れであり、時代背景をベースにしたメディアの過剰反応と愛知大学に対する風評に対する学生の眼の確かさを確認できそうである。とりわけ本間先生の正義感による学生への弁護と大学の自治を守る主張は、学生たちに強い共感を与えたことは、愛知大学史の大きな汚点ではなく、さらに高く評価されるべきこととして「温故知新」の

表^B27-2 [F3] 市民との交換関係について

レ	ベル	～S29	30	31	32	33	34
1 知っている		6	2	1	1		2
2 知らない		7	9	11	4	20	39
	無記	4	1	4	3		5

(アンケートより作成)

表B-28〔F4〕「愛大事件」の認知レベルと「受けとめ方」

(アンケートより作成)

表B-29[F.6] 愛知大学への関心度とその理由

関心度	～S.29	S.30	S.31	S.32	S.33	S.34	計
1. 大変関心	6	4	3	4	10	18	45
2. 多少関心	2	2	3	2	3	8	20
3. ふつう		4	1	1	4	15	25
4. あまり	1		2		1		4
無記	1			2	2	1	6
(アンケートより作成)							
[理由] 番号は関心度レベルを示す							
～S.29.	1. 母校ゆえ当然・愛大事件後の後遺症あり・人間形成上 ・全国区の大学へ・現在の世界観の礎を形成						
	2. 元書院の歴史あり・大卒の資格取得						
	4. かつての愛大ではない。						
S.30.	1. 卒業後の大学を知りたい・愛校心・同窓会へ出席し、情報知る ・旧学長の同級生として						
	2. 愛大の特徴が薄まるのが気になる						
	3. 卒業後のかかわりがなくなっているから						
S.31	1. 地元大としての発展を・もっと広く知ってもらう・大学の社会的役割を						
	2. ローカル化してマスコミからネグレクトされていないか、これは大学の責任だ 歳月が経過し、少々高令化。						
	3. 良い大学である。						
	4. 当時は不本意組も						
S.32	1. 他大学を上回ってほしい・優秀な教授陣・母校の世話になった						
	3. 出身高校への関心と同程度だ。						
S.33	1. 同窓会へ協力・常に関心注目・息子も入学させた・東京から見ている。 ・活力低下が心配・教職員と学生の協力を発展・学生を大きく育てて。 財政力に注視・学向の自由を						
	2. 母校ゆえ(3件)						
	3. 航空、ITなど工学部門を・青春の思い出が記念館だけに・府県大学						
S.34	1. 母校をから知りたい(8件)・各事件に対する本学学長の言葉・設位理會良し。 ・設立時野球大会優勝・書院からの愛大をひとつ語って・教子子の進学先 ・確固たる地位を・先輩として関心・中部の大学らしい大学だから・メディア上で ・良い環境を生かす・書院の伝統・常に革新的精神を・先輩後輩活躍知りたい ・母校発展を願うから。						
	2. 卒生、入試、就職知たい・母校だから						
	3. 在学4年間の変化に強い思いあり						

(アンケートより作成)

モデルとすべきことを卒業生たちが教えてくれたというべきだろう。あらためて、大学におけるリーダーの役割が重要であることを認識させてくれる事件であったといえる。

では 卒業生たちは愛知大学にどの程度の関心を持っているか、およびその理由を示したのが表 B-29 である。

全体の関心度では「大変関心」が 45 パーセントと最も多く、「多少関心」ありの 20 パーセントを加えると、65 パーセントの卒業生が関心を持っており、関心の度合いは高い。その理由は卒業生として当然という理由のほかに、愛大の書院以来の歴史や優れた教授陣などの特徴への自信と、子息の入学、それゆえ愛大の動向に注目する理由が多い。その一方、昭和 34 年卒業生にみられるように、学生数の増加の中で愛大の良さが劣化するのではないかと、他の学年の中にはローカル化や活力低下への懸念も見え、心配する声も見られる。愛大に対して多くの卒業生から多大な関心が払われていることがわかる。愛大に対する一つの世論であろう。

それがダイレクトに示されたのが表 B-30 の「愛知大学への期待」である。そこには多様な提案が期待を込めて示されている。その中でいわば古参の卒業生からは、大学のリーダーである学長たちへの積極的な発言要請が見られ、教授たちにも学術情報の発信への期待が込められている。卒業生の在学時代の著名な学長や教授たちの時代の発信力に比べて、今日それがかなり少なくなっていることへの物足りなさのあらわれであり、愛知大学に誇りをもち自信を持つて愛するが故の卒業生からの危機の

念の表れだといえそうである。表中に示された個々の期待は、それをどのように打解するか具体的な方法が寄せられとみて良いだろう。愛大の創設期からの歴史的展開を共通のベースにしたうえでの、そこから発信発達できる各分野への展開であり、突飛なことではない。学外の眼の客観性と確かさをふまえたその指摘は参考になりそうである。

次はこのような卒業生たちが愛大情報をどこから入手しているかの回答である。それを示したのが表 B-31 である。情報源はこちらで可能性のある項目を上げさせてもらった。その中心は古くからの「愛大通信」、そして「同窓会報」、そして「メディア」で、「大学ホームページ」は、その後のことである。これは古い卒業生には苦手かもしれない。「愛大新聞」はあまり情報源にはなっていない。かつては新聞部が独立自立的に発行し、ジャーナリズムも目指そうとする部員の力で格調が高かったが、今日では自治会の機関紙的発行となり、幅広い取材をベースにする記者魂は弱く、その目線は異なっている。新聞部は学内でも独立すべきで、かつての輝かしい時代へ戻るべきであろう。学生の眼から卒業生たちにも読みたくなるような情報を提供して、大学と卒業生をつないでほしいというのがこのアンケートからの感想である。

同表では「同窓会報」はもっとも多い情報源になっているが、その活動の根源である同窓会への出席状況の回答を示したのが、表 B-32 である。よく出かける会員も各年代にみられるが、出席できない、あるいは時々出席だとする回答が過半数を占めている。これはその理由を見ても高齢化で

表B-30 [F7] 愛大への期待

<p>[~S29]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学長、関係者からの情報発信 ・教授の学術発信 ・同窓生の社会活動 ・後輩たちの活躍情報 ・全国区大学への取組 ・大学の動向 ・東アジア関係成果 ・無記 	<p>[S33]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発展中のニュースを ・全国大学、旧制大としての名声を ・もっと積極的に情報を ・世界に挑戦する学部、学生、教員 ・文系だけでなく学部新設計画を ・「愛大通信」の充実と発行回数増を ・各支部状況 ・情報発信を多く ・無記
<p>[S30]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各支部とのつながり方 ・中国通大学への期待 ・無記 	<p>[S34]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新学部情報を(農、など) ・中国との交流情報 ・中国で差別化できる情報を ・書院がつくった愛大をもっとP.R. ・成果、受験、就職、同窓生活躍情報 ・方向性をはっきり示す ・「つボイノリオ」の活用を ・愛大版中国情報を ・愛大精神をP.R. ・愛大卒生のネット化を ・一般かつ広汎情報を ・就職情報を ・東海地区経済発展を支えた情報を ・無記
<p>[S31]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・愛大設立過程を正確に魅力的に ・OBの活動情報 ・中小企業を学べる大学として ・無記 	<p>[S32]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生、OBの活躍状況 ・教授陣をもっとP.R. ・無記

(アンケートより作成)

表B-31 [C8] 愛大情報の入手先別分布

入手先	～S.29	30	31	32	33	34	計
1 テレビ・新聞	3	2	3	3	6	2	19
2 大学ホームページ	1	1		2	4	2	10
3 愛大通信	5	2	3	3	5	14	32
4 諸会合	4			1	4	4	13
5 受験雑誌	2			1	1	1	5
6 同窓会	3			3	3	5	14
7 同窓会報	4	4	3	4	10	22	37
8 愛大新聞・他			1	2	1	3	7
無記	2	4	5	3	3	6	23
(アンケートより作成)							

22

表B-32 [F8] 同窓会への出席状況

状況	～S.29	30	31	32	33	34	計
1 はい	2		3	8	7	2	22
2 よく	3	1	1	0	1	1	7
3 時々		1	1	4	4	6	16
4 いいえ	2	4	3	6	6	27	48
無記	5	5	5	3	1	10	29
(アンケートより作成)							

表B-33[F10] 同窓会の魅力アップ提案

[~S.29]			・挑戦型か無風型か
・もっと楽しめる工夫を			・見栄力を高める工夫を
・実生活に役立つ情報と交換を			・豊田市はかつて愛大卒たちが大活躍した
・愛大出身著名人のスピーチを			・楽しい会に
・クラブ系による出席促進を			・理念の具体化を
・より広報につとめることを			・常に注目されるように
・関東4支部活動は充分だ			[S.34]
無記	7		・より発展を
[S.30]			・会を卒業年次に近いグループとか学部
・人的交流で楽しめるように			・割とかの工夫で
・データの提供を			・会の通知をもれなく出してほしい
無記			・存学期間を限定し、先生も招く
[S.31]			・学者、スポーツ人の優秀者 彰を
・講演会が楽しみになるように			・大学を側面からアピールする
・企業は院生の雇用を			・外部広報へも力を
無記			・講演会の方が見えるように
[S.32]			・名古屋校舎での開催も
・名古屋支部を細分化し、地域とのつながりを			・語り合える多くの機会を
・笠島校舎とともにどう変わるか			・中部同友会との共催を
・もっと情報を			・特別会費をとってもよいから案内状を
無記			
[S.33]			
・旧制大学としての誇りを			
・大いに積極的に			
・誇りに同窓会を思っている			
・同窓会と校友課のトップが軸になる			

(アンケートより作成)

会場へ行けなくなったこと、同年の知り合いがめっきり減少したためだとしている。今回のアンケート対象の卒業生は、繰り返すが、ほぼ 85 歳以上であり、身体的にかつてのように自由が利かなくなっているということであろう。それだけになおよく出席する 22 人の回答者、時々出席する 7 名の回答者は十分元気な長寿の方々だといえる。

しかし、それでも全体としてみると、この年代の方々も何とか同窓会を盛り上げたいと思っておられることが伝わってくる。そこでこの年代の方々から、どうしたら同窓会を活性化できるかについての、つまり、魅力度アップのための方法を回答していただいた。それが表 B-33 である。みな古くからの同窓会出席者たちであり、その提案はかなり具体的である。色々見るとまず新人には会へ顔を出してもらい、その楽しい雰囲気とネットワークの人脈も知ってもらうことかと思われる。いつも会費問題が課題に出ようだが、その会の工夫の雰囲気から新参者にも気持ちよく会費を払ってもらえる工夫がみえてくればと期待したい。

以上の愛知大学との関係の中で、あらためて愛知大学をどう見ているかについて、その回答を表 B-34 に示した。記入すべき問いが続いたせいか、あるいは愛大情報を十分得ていないせいか無記入も見られたが、その中での回答分を示した。それらを見ると、卒業生たちは、評価もする一方、もっと発展させてほしいという意見や提案が多くみられる。ここでもその根底には愛知大学誕生の歴史さらに高めてほしいという気持ちを踏まえて抱いてきた誇りを、さ

らに高め、大学自体がさらに発展してほしいという強い気持ちが表れている。卒業生からこのような熱い視点が投げかけられていること自体にも愛知大学の良さがあると思われるが、それだけに卒業後社会人を踏まえた卒業生たちの視点や提案は、大学のエネルギーにしていくべきであろう。

そしてその期待は後輩の学生たちにも投げかけられている。表 B-35 は、「後輩たちに伝えたいこと」の回答である。

学生を経験し、社会人を 50 年あまりにわたって経験した卒業生からの伝言は価値がある。ここでも愛知大学の「旧制大学」時代以来の歴史を学び、自信と誇りをもって学び自立し、活躍してほしいという願いがこめられている。創設期以来、「自由、受難」の学風の中で、自立と学びをめざし、そして愛知大学を自分たちが支えて来たという自負心にもあふれているようにみえる。ここでは一人一言ずつの伝言であるが、そこに長い人生からの知恵が詰まっている。大先輩たちの言葉が現学生たちに伝わればと願いたい。

そしていよいよ問いはクライマックスへ進む。表 B-36 と表 B-37 の内、前表は各人の「人生の満足度」の回答であり、その満足度と愛知大学との関係の回答である。前表では無記入回答はかなり少なく、関心が持たれた問いであったといえる。回答の内「大いに」と「まずまず」が 3 分の 2 を占め、無記入を含めても約 6 割を占める。「不満足」は少ないが、これはほかの関連した問いから不本意な就職などの理由がうかがわれる。いずれにせよ、卒業生の多くは人生がほぼ満足だったことがわかる。

そして次の「愛知大学との関係」を見る

表B-34 [F2・10]愛大をどうみる

<p>[~S29]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・なんとか頑張っしてほしい ・益々充実発展を ・名古屋から東京圏への広報も ・現中は上海進出を 	<p>[S33]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・もっと自信を ・経済と財務諸表を必修科目に ・旧制大学としての誇りを ・誇りをもっている。さらに積極的に ・活力を ・施設整備の次は教育力と地域力 ・私大の中のレベルに問題 ・三角形のロゴマークはナンセンスだ ・大学名に「同文書院」を入れた方がよい ・後発大のようにP.R.も
<p>[S30]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・創立精神を愛大カラーに出して欲しい ・駅前立地、次は質の向上を 	<p>[S34]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各学部専門性をより高め、社会貢献を ・時代に合った学部を設けてほしい ・笹島校舎は確実に充実している ・学生も全体におとなしい ・教学上も「愛大あり」と認知されるように ・ランクアップして以前と同じく南山以上になるように ・設立趣旨をもっと徹底し、理念を国外へも ・中国研究をもう少し強化されたい ・総合大学化をめざしてほしい ・欲望よりも生活上に自由、受難の鐘を ・P.R.をもっと積極的に ・司法試験でさらに活躍を ・成果の拡大を ・皆さんの尽力に感謝 ・まじめで従順の感
<p>[S31]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・名駅拠点での頑張り ・中国軸に片よりすぎ ・良い思い出がない 	
<p>[S32]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ベストを尽くすべき ・在校生をもっときたえる ・大変よいが、もときびしくも ・駅前立地は立派だ 	

(アンケートより作成)

表B-35 [F11]後輩に伝えたいこと

<p>[~S29]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・豊橋校舎では地域貢献実現を ・主体性独立と夢を ・大学史を学んでほしい ・自信をもってほしい ・時流を越えられる勉強を 	<p>[S33]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スポーツも大事だが、それ以上に勉学は大事だ ・旧制大学以来の誇りを ・旧制大学以来の歴史に誇りを ・実力を養う ・縁あっての「愛大生」各自の世界観、人生観を養い、 ・4年間キャリアを残せ ・創設期の著名な教授陣が愛大をつくったこと ・知性のためにも読書を ・生涯学習をする ・「愛知大」の知名度アップを ・人生勉強も沢山すること ・多くの友人をつくること
<p>[S30]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・よく勉強すること ・創設期の先生達の意気込みに触れてほしい ・愛大は中部法文系で唯一の旧制大であったこと 	<p>[S34]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今の学風のままでよい ・努力は人が見てくれている ・社会人になったら、おじぎをしっかり、酒グセを正し、金銭はきれいにする力を ・もっと海外へ出かけてほしい。提携大学も積極的に利用すべき ・コンプレックスは不要。人間としての教養を身につけること ・学業とクラブ調和両立を ・先輩達のように上場大企業にチャレンジしてほしい ・世代のリーダーになってほしい ・卒業生が多くの職場で活躍していることを知ってほしい ・立て看板や団交がなくなったが、近年の社会問題への意識をもってほしい ・1960年代の高度経済成長の結果、間のぬけた生き物になってしまっていることを認識してほしい ・中部圏一の大学になってほしい ・法学部の学生は司法にもっと関心を ・「加油愛大生」 ・経験から言えば、自己主張が弱いと出世で損することが多いようだ。
<p>[S31]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・勉学に努めてほしい ・勉学とともに社会常識も身につけてほしい ・携帯電話ではなく、本をよみ、考える力、要約力、そして表現力、応用力を。まずは50冊の読書を ・スポーツでもすぐれた後輩たちを賛えたい 	
<p>[S32]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教学、スポーツともに強化し、上位を狙う力をまじめにやること 	

(アンケートより作成)

表B-36 [F12] 人生の満足度

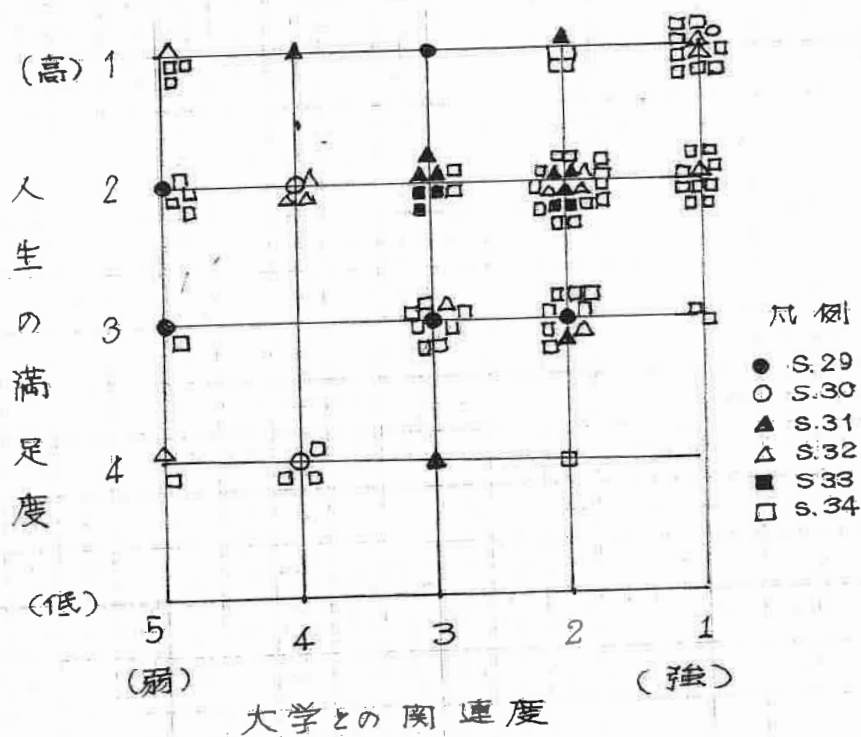
満足度	～S.29	30	31	32	33	34	計
1 大いに満足	1	2	2	1	4	7	17
2 ますます満足	6	7	5	5	7	16	46
3 ふつう	4	1	1	1	3	14	24
4 少し不満	1		4		1	0	6
5 大変不満						2	2
無記	1	2	1	1	4	5	14

(アンケートより作成)

表B-37 [F13] 人生の満足度と愛大との関係

愛大との関係	～S.29	30	31	32	33	34	計
1 大いに関係	3	2	3	2	4	9	23
2 多少関係	2	2	4	2	5	15	30
3 ふつう	2	1	1	3	2	12	21
4 あまり関係ない	4	5			3	2	14
5 全くない			1			3	4
無記	2	2	4	1	0	3	12

(アンケートより作成)



図B-38 経済学科卒業生の人生の満足度と大学との関連度

(アンケートより作成)

と、「大いに」と「多少」の関係があると
する回答が約 6 割弱の 57 パーセントを占
め、大きくみれば若干のばらつきがみられ
るが、愛知大学との関係は有為に認められ
る。次の図 B-38 は、両者を相関図として
示した。全体として右上がりの相関関係が
見られる。このことは学生の個々の大学で
の機会が、学生のその後の人生を左右する
傾向があるということであり、在学中に教
授や事務職員、諸施設、クラブ活動などを
通して、大学と学生がどうつながりを持て
たかは相互にとって重要である。とくに教
育レベルでは、一般授業はもちろんだが、
とくに個々の学生とつながるゼミと卒業論
文作成の際の指導環境の充実、また学生の
クラブの充実支援やキャンパスライフ、さ
らに環境整備の支援などが重要であろう。

それらは次の表 B-39、「愛知大学から
得たもの」の回答に集約されている。回答
数も多く、反応は高く、この問いに関心が
かなり高かったといえる。

その内容は、類似部分は若干取りまとめ

たところもあるが、全体としては、愛知大
学時代から多くを学び、それを社会に出て
役立たせ、実践したというまじめな回答に
満ちている。戦後の厳しい時代、勉学が大
学でのまだに学びの場所であり、そこで努
力し、多くの学問を積極的に吸収しようと
した姿が伝わってくる。また学問だけでな
く、それらを通して価値観や生活訓なども
吸収し、その後の人生や社会に役立ってい
ることもうかがえる。

この時代、創設期の愛知大学から、優れた
教授陣たちとの学びの交流を通して、この
時期の卒業生たちは、骨太の愛大生、さら
には愛大人をつくり出したということがわ
かる。いわば愛大力の伝統の原点を創出し
たといえる。また経済学科の卒業生たちは、就
業地は関東など全国にも広がるが、最も多
く就業した東海地方では、このあとの高度
経済成長期に、まだほとんど競争相手のい
ない経済学を学んだ社会人として、この地
域の経済界を支え、この地域の発展の大
きな力となったといえる。

ⁱ 藤田佳久編 (2020)『東亜同文書院卒業生の軌跡を追う』、あるむ。131～138.

表B-39 [F14] 愛知大学から得たもの

[~ 昭 29 年]	[昭 33 年]	・愛知大学による明治生命就職
<ul style="list-style-type: none"> 日々更新 地味な努力がすくいになる その時代稀少価値の大卒を得て自己啓発 感謝、根性 学歴をあてにする 益々の発展を 多くの先・後輩を得て交友 自力で生きる 寮生活で友情と先・後輩を知った 更なる世界観を得、時流を越えた 	<ul style="list-style-type: none"> 人生の大幸な指針 怒るな、後には、100歳まで勉強 書院後継大としての自信の 精神的バックボーン 何事にも感謝、プラス思考は 世のため、人のため 愚直王道 恩師・先輩ほか他者からの学び 著名な教授陣からの学び 運命と良心に従い、精一杯生きて きた「わが人生に悔いなし」 知と愛を以て公僕として奉仕 	<ul style="list-style-type: none"> 松下電器でリーダーに就任、発揮した 適正な判断力と決断の養成 常に政経の最新情報を 知識を多面的に得た 本国学長流に(1)学問は深いから大きなことは言わず、(2)考えつけ、(3)最善を尽す 公正中立 探求心 中国を正しく見る目 愛大卒、同窓生ではなかった 就職先への愛着と恩返し
[昭 30 年]	[昭 34 年]	・学長はじめられた教授陣
<ul style="list-style-type: none"> ゴツゴツ努力が大切 良い友人を得た 東三河で愛大OBのリーダーで連盟づくり 学んだことが仕事で役立った 失敗や苦悩した人が仲間 真剣の味 	<ul style="list-style-type: none"> 社会に役立つ人間になる 地域への貢献 懷疑は思想の母 同窓生は同級生を大切にしている 小岩井学長の言葉 独木の新しい経営学を学んだ 4年間の寮生活で人間関係を得た 「随縁線」にのって生きる 学業から多くを得た 学生生活の楽しさと運動根 知を愛し世界へ まじめに努力 「天は自ら助くる者を助く」 は「力なり」 	<ul style="list-style-type: none"> 人間の個性が大切 自由、平和、教智 「敬天愛人」 「温故知新」、「自主独立」 本当に愛大にお世話になった 愛大は私の booster 急ぐな、怒るな、気にするな 持続は力なり
[昭 31 年]	[昭 32 年]	・「アンケートより作成」
<ul style="list-style-type: none"> 人生の進路を決められた 先生、先・後輩、同級生との交流 真理の探求、「主、師、親」を尊敬 勤勉 教養 誠実 学ぶ姿勢 雑草は踏むほど強くなる(小岩井先生) 愛大卒が誇り 一部上場企業の社長になった 	<ul style="list-style-type: none"> 相手の立場を考える 粘り強さと誠実 自由、受難、そして知を愛する 愛と知 	

【卒業生アンケート調査報告特集】

第3章 「新制愛知大学」法経学部法学科卒業生たちの在学時代とその後の軌跡

1. はじめに

ここでは前述の経済学科に次いで法学科の昭和 34 年卒業生までに対するアンケート調査の結果を示す。

「旧制愛知大学」から「新制愛知大学」になった経緯は前章の経済学科誕生の節で示したのでここでは省き、すぐにアンケート結果についてみていく。なお、回答数は 47 名であった。

2. A 系列の出身校や志願理由などについて

表 C-1 は、法学科入学制の出身校の一覧を示した。学年によりに人数が異なるのは、初期ほど高齢化が進みまた入学生の数も多くはなかったからである。

昭和 33 年以降は多くなっているが、高齢化に多少幅があり、入学者数も増えたため、いずれにせよ、その全貌は示されない。初期には一部旧制の名残があるが、ほとんどは高校からの進学で、旧制大学時代とは異なり、東海地方の高校からの入学生がほとんどである。経済状況が厳しく大都市の大学もまだ十分復活していない中、東海地方から他地域へ進学することはむづかしく、したがって全国から愛知大学へ進学することも困難で、旧制大学時代の海外からの引揚げ学生の入学もすでに終わっていた。

表 C-2 は法学科へ入学した学生たちが、愛知大学をどう知ったかという点の回答である。当初はその情報源は限られていたが、それが次第に多様化し、愛大を知る人たちが

が増え、それらの人たちからの情報を得られるようになったことがわかる。

次いで、表 C-3 は、愛知大学への志望理由についてである。自分の将来の方向と、愛知大学についての「引揚げ大学」、「東亜同文書院」、「優れた教授陣」への魅力とその内容が、強い志望動機になっている。

いよいよ入学時の授業料や生活費の工面についてを表 C-4 と 5 で回答を得た。それによると、授業料については、6 割ほどが親から支えられ、後の半数は奨学金やアルバイトに依存している。これは生活費についてもほぼ同様である。当時の愛知大学は、勤労青年の進学も誘導するために授業料は安く設定されており、勤労青年の入学が実現していたといえる（222 ページ参照）。

3. B 系列の入学理由について

こうして入学した学生たちが法学科を選んだ理由は表 C-6 に示した。それによると前述の優れた教授陣をベースに、法律学を学びたいとする明確な目的が見られ、中には新しい社会を開こうとする夢も抱いている入学生もいる。後半になるとその理由も人数が増える分、幅が出てきている。

4. C 系列の在学中の学業についてなどの回答

こうして法学科で学び始めた学生たちの学業へのウェイトについての回答を表 C-7 に示し、その理由について同 8 に示した。まず表 C-7 での学業のウェイトを見ると、

学業中心が圧倒的に多く、強い勉学意欲でもって学んでいたことがわかる。これは前述の経済学科も同様で、当時の愛大生の学業への志向性の強さが伝わってくる。大学のまだ大衆化が始まる前の時期であった。その理由を同 8 でみると、大学は学ぶところであり、学生として当然のことだとする回答が目立つとともに、その具体的内容については法律学への熱意があふれている。目標を持つと、遊んではおられないという決意が伝わってくる。

どの授業に興味や関心を持ったかについての回答が表 C-9 である。法学関連の科目がならぶが、教養科目や語学にも広がりが見られ、幅広い関心が見られる。その中で「印象に残った先生」については、表 C-10 に卒業年次別に示した。当初に国文学の久曾神先生があげられ、また若干の語学や哲学の先生の他は、ほとんど法学専門の教員たちが並び、赴任してきた年次別の傾向がわかる。久曾神先生は古典和歌集の大家で、語り口も面白く全学で人気があった。のちに学長になっている。挙げられた教授はその任期によって異なるし、授業の持てない学長の期間によっても異なるが、小岩井、酒井、長谷部、細迫、脇坂、園部、勝部、松坂、大林などの教授が印象を残している。

表 C-11 は、ゼミ担当と科目で、年度別にゼミの幅が広がり、充実していく状況がわかる。また、表 C-12 は 卒論のテーマと指導教員を一覧した。テーマは時代の問題テーマを取り上げて興味深い。それに関連して、先生との交流はゼミ指導や懇親会、先生宅訪問などで活発に行われ、(表 C-13)、図書館利用(表 C-14)もそれなりにすすめていたことがわかる。

こうした学業も含め、在学中の満足度とその理由を示したのが表 C-15 である。それによると、「大いに満足」が最も多く、「まあまあ」のレベルも理由を見ると勉学は充実していたとの回答が多く、一流の教授陣のもと、国際感覚も身につけつつ各学年とも満足していたことが示されている。法学科はより専門性が要求されるだけに、在学はそれを目指して学んでいたことがわかる。

ではそのような学業が人生への影響はどうだったのか、またその理由を示したのが表 C-16 である。全体としては、「大いに」と「まずまず」が 7 割以上を占め、学びとともに、思考方法の習得が、学び続けることを通じて、社会人になって、また職場にあっても極めて有用であったことを示している。

このように法学科生の多くは、学びを通して充実した学業生活を送り、それがその後の社会人生活にも反映したことがうかがわれる。

5. D 系列のクラブ活動について

一方、クラブ活動の状況はどうであったのかを示したのが、表 C-17 と同 18 である。まず加入状況を見ると学年が進むにつれて施設整備も進み、創部に尽力する学生も出てきて、年々クラブが幅を広げたことがうかがわれる。また、参加レベルも高かったこともわかる。同 18 のクラブ活動の人生への影響「大いにあり」が過半を占め、人生を豊かにしたことがわかる。それは表 C-19 の社会参加へもつながったことも納得できる。

6. E 系列の就職に関する回答について

ここでは卒業後の就職状況についての問への回答である。

表C-1〔A3〕 法学科入学生出身校

〔～S.29〕		〔 S 34 〕
瑞 陵		岡 崎
愛知青年師範		松 蔭
横須賀		新 城
瀬戸農		岩 津
〔 30 〕		東 邦
新 城		昭 和
蒲 郡		瑞 陵
〔 31 〕		瑞 浪
浜松西		華 陽
岡 崎		焼津水産
東 海		神戸工業
常盤松		加 納
〔 32 〕		豊 川
岐 阜		岡崎中
明 和		岡崎工
松 蔭		刈谷商
愛知学芸大(社会)		
豊橋東	(アンケートより作成)	
〔 33 〕		
刈 谷	2人	
猿投農		
気 賀	(S は昭和)	
豊橋東		
東 海		
明 和		
斐 太・(工)		

表C-2 [A5] 愛大を知った理由

[~昭29]	[34]
新聞	旧制大学だから
知人、先輩	東邦高との関係
地元入学状況	担任から
[30]	知人から
新聞、雑誌	存在を知っていた 5人
[31]	大学案内 2人
中部で法唯一	受験雑誌
東亜同文書院由未	
通学可能	
[32]	
友人のすすめ	
近くに通学者	
[33]	
いとは愛大卒	
と書院卒	
大学案内誌 2人	
ハイレベル大学	
大学を見た 2人	
先輩から	
創立時より知る	
地元にある	
通学可能	
旧制大レベル	
東邦と関係あり	
担任から	
友人から	
知人から	
歴史を知っていた	

表C-3 [A6] 愛大志望理由

[~昭29]	[34]
引揚大の歴史	教授陣充実 3人
優秀な教員 2人	校長から
[3]	書院の魅力 3人
教師か法曹	父から
界をめざした	自宅通学 3人
真摯探求に惹かれた	名大よりおれている(父から)
[31]	旧制大学の魅力
文系志望 2人	夜間コースあり 3人
通学可能 2人	国家公務員志望
授業料安い	授業料安い
民法指向	自由思想を学びたい
[32]	すてれた大学だ
父から	建学精神
教員志望	設立経緯を知って
書院の魅力	南山、名城をやめた
通学可能	学びの途を
何となく	めざしたい
[33]	
いところから	
教員充実	
地元指向	
志望先の1つ 2人	
学風の純粋さ 2人	
先々伸びる大学	
通学可能	
有名な法学教授陣	

(アンケートより作成)

表 C-4 [A8] 授業料の工面方法

	～ 29年	30	31	32	33	34
1 親 から	3	1	3	3	6	12
2 親戚・縁者から	1		1		1	
3 奨学金から		1			2	5
4 アルバイトから			2	2	1	
5 その他 から					1	7
無 記	1	0				1
(アンケートより作成)						

表 C-5 [A9] 生活費の工面方法

	3	2	3	5	11	11
1 親 から	3	2	3	5	11	11
2 親戚・縁者から	1					
3 奨学金から					1	3
4 アルバイトから			1	2		4
5 その他 から			1	2	1	
無 記	1					1
(アンケートより作成)						

表 C-6 [B2] 入学理由

[～S29]		[S33]	
<ul style="list-style-type: none"> ・新私学に関心 ・名大より優れた教授陣 ・父(銀行)のすすめ ・地元入学者多い 		<ul style="list-style-type: none"> ・知り合いのすすめ ・通学可 ・政治学を学びたい ・新しい生き方をみる ・法曹会をめざす ・国際関係に関心 	
[S30]		[S34]	
<ul style="list-style-type: none"> ・法律を学びたい ・教授陣すばらしい 		<ul style="list-style-type: none"> ・教授陣が一流 ・校長のすすめ ・自宅通学 ・旧制大だから ・法律学を学びたい ・夜間高からさらに向上したい ・働きながら学ぶ ・法を学ぶため転学科 ・良い分野だ ・社会人必要 ・学びたい一心 ・教授陣が他大学を圧倒 	
[S31]			
<ul style="list-style-type: none"> ・会社員指向 ・アメリカ民法を学びたい ・自宅通学 			
[S32]			
<ul style="list-style-type: none"> ・就職有利と考えた ・国税勤務中、さらに学ぶ ・法律を学びたい ・教授陣一流 			

(アンケートより作成)

表 C-7 [C1] 学業の位置

年次	～S29	S30	S31	S32	S33	S34	計
学業レベル							
1. 学業が主	3	1	4	4	9	7	28
2. どちらかといえば学業			1	1		1	3
3. 学業はまずまず	1			2	2	3	8
4. 学業は徒	1					4	5

(アンケートより作成)

表 C-8 [C2] <1. 学業が主の理由>

～S29	[S30]	[S31]	[S32]
<ul style="list-style-type: none"> ・法律勉学に集中 ・アルバイトなしで勉学 ・法を学ぶ(とにかく)-2人 	<ul style="list-style-type: none"> ・大学は学ぶところ ・学生として当然 ・教職中心に 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生として当然 ・アルバイト少いですんだ ・とにかく勉強したかった 	<ul style="list-style-type: none"> ・当然学業だ ・国税局勤めていたなら ・法律勉強中心-2人
[S33]	[S34]		
<ul style="list-style-type: none"> ・法律家への夢 ・学友と学ぶ ・学業専念 ・専門授業が面白い ・卒業後の生き方を考えて ・弁護士めざした ・学生の自分 ・学風、教授陣、学友に恵まれた 	<ul style="list-style-type: none"> ・通学できて勉学集中 ・アルバイトせず勉学 ・学業専念+全学部原水協参加 ・卒業後役立つ 		

(アンケートより作成)

表C-9 [C3] 興味・関心をもった授業

科目名(教員名)	
文学・熊沢	1人
丸山薫講演	1
民法	5
法社会学	2
商法	3
憲法	3
憲法	2
政治学	7
政治史	3
フランス語	1
商法(本間)	4
(小岩井)	1
刑罰法	3
西洋史	1
東洋史	1
ロシア語	1
新開	1
比較文学	1
中国語	1
政治思想	3
国際政治	1
社会思想史	2
ドイツ語	2
哲学	1
英語	2
国際法	3
法学	5
論理学	2
法哲学	1
私法	1
刑事訴訟法	1
地方自治法	1
哲学史	1
経学	1

表C-10 [C4] 印象に残った先生

教員名	[29]	[30]	[31]	[32]	[33]	[34]
久曾神	1人					
鈴木安蔵	1					
林	1			1		
山本	1					1
小岩井	1	1	2	1	7	1
中本	1					
一戸	1					
山崎(公)	1					
花村(規)		1				1
黒木			1		1	
本間			2	1		
戒能			1			
酒井			1	2	2	2
胡麻本			1			
鈴木次			1			
真下(哲)				1		
大迫(哲)				1		
夏目				1		
大林					2	
勝部					3	
山中					1	
松坂					1	2
中條(雅)					1	
長谷川					1	3
細迫					2	4
高桑					1	
鈴木正					1	
脇坂					2	1
園部					1	
入江					1	
木田						1
広浜						1
岡部						1
成川						1

(アンケートより作成)

(アンケートより作成)

表 C-11 [C5]ゼミ担当教員とテーマ

種別 \ 年次	～S29	S30	S31	S32	S33	S34
黒木:法社会学	1					
黒木:民法	1		1	1	1	
黒木:鈴木正四	1					
酒井吉栄:立憲			1		1	2
小岩井:アメリカ政治			1	1		
黒木:自衛力是非			1			
前田:民法				1		
川崎一郎:国際法					1	
勝部:社会思想史					1	1
鈴木正四:政治史					1	
本間:商法					1	
脇坂:商法					1	
花村:					1	
入江:国際法					1	
脇坂:判例研究						1
長谷川:商法					1	1
園部:行政法						1

(アンケートより作成)

表C-12 [C]卒論テーマと指導教員(判明分)

[~S29]	指導教員	[S33]	指導教員
・法社会学	黒木	・死刑廃止論 フランス文献より	勝部 山中
・家族法	黒木, 鈴木	・自由について	
・民主主義の民法	黒木	・法的思考	
・財産相続の平等	黒木	・国際法と大陸棚	
・信用金庫		・日本政治史 安保関連	
[S30]	指導教員	・日本戦後政治史 (学会賞)	花村
-		・「 」(学会賞)	
		・日ソ中立条約の研究 満州, 北鮮, ソ連侵 攻と引揚げ	
[S31]	指導教員	[S34]	指導教員
・自衛力保持の是非	黒木	・我が民法における妻の地位 戦前との 比較	酒井 長谷川
・ラスキ原本訳	酒井	・二院制について	
・民法の財産分与		・会社と合併	
・アメリカ政治機構	小岩井	・過失相殺	
[S32]	指導教員	・憲法と基本的人権	
・家族制度考 人格的独立と民主化		・憲法改正限界点 新平和憲法	
・不法行為 自力救済		・抵当権について	
		・戦後の警察組織と権力	
		・死刑について 死刑廃止論の盛り上り	
		・天皇制について	酒井
		・人工受精児の嫡出性	

(アンケートより作成)

表C-13 [C7] 先生との交流 (あり/回答数)

～昭和29年	3/5		
昭和30年	0/2		
31	4/5		
32	7/8		
33	8/11		
34	7/7		

(アンケート作成)

表C-14 [C8] 図書館利用 (あり/回答数)

～昭和29年	-		
昭和30年	2/5		
31	2/4		
32	4/5		
33	2/6		
34	11/18		

(アンケート作成)

表C15〔C9〕 在学中の満足度と理由

レベル	～S.29	S.30	S.31	S.32	S.33	S.34	計
1. 大いに	1	2	3	3	4	6	19
2. まあまあ	1		1	2	3	0	7
3. まあまあ	1		1		1	2	5
4. あまり							
〔理由〕	～S.29	S.30	S.31	S.32	S.33	S.34	
1 大いに	元氣	優秀な先生が 授業が面白い	授業が面白い ～流に授業が 及権自治会	個性が強い 自由、充実 国際感覚	優秀な教授 通学至便 国際感覚	優秀な教授 多様な研究会、学科オバテ 国際感覚 学科オバテ、友人得た	
2 まあまあ	自由な学生生活	地方学生多い	自ら勉強	授業で勉強		学風、勉強、同級、後輩仲間	
3 まあまあ					多くの学友、授業で勉強	夜学で勉強充実	
4. あまり							

(アンケートより作成)

表C-16 [C11]人生への影響

影響レベル \ 年次	～S29	S30	S31	S32	S33	S34
1.大いに	1	1	2	1	2	7
2.まずまず	3	1	2	3	3	5
3.まあまあ			1	1	3	2
4.あまり					1	1
5.無記	1			1	3	2
[C11]の理由						
1.大いに	就職,社会人	自信もち教壇へ		教員採用 人々へ奉仕	就職合格 平和活動の重み 国際感覚を得た	考え方を学んだ 教職につけた 学業が仕事に役立った(2人) 労務管理
2.まずまず	兄弟仲良く相続	研究態度を身につけた	学業達成感 探究心,法学思考,判断力	学び続ける 債権など契約を修められた	指導力 弓道部発足	学業が仕事に生きた(2人) 営業能力 法解釈の基本習得 人間としての幅の広がり
3.まあまあ			家族制度解体	社会へ出て基礎学力不足痛感	学業,先生,友人 受講は熱心	
4.あまり					学業と無関係の仕事について	

(アンケートより作成)

表C-17[D1] 加入クラブ					表C-18[D5] クラブの人生への影響				表 [-19[D8] 社会参加
加入クラブ	参加レベル				影響				した(○)
	1人 (よく参加)	2人 (やや参加)	3人 (あまり)	4人 (多い)	大いにあり	まあまあ	あまり	社会参加	
[~昭29] 馬術	1	1			1				
演劇	1	1			1				
不明	1		1						
[昭30] 柔道	1	1			1				○
[昭31] マーダンス	1				1				○
法学研	2	1		1			1	1	
サッカー	1	1			1				○
中国研	1	1			1				○
合唱	1				1				
[昭32] 硬式庭	1		1				1		
法学研	1	1							
不明	1	1		1					○
[昭33] 文学研	1	1		1				1	
自治会	1	1			1				○
新 劇	1	1				1			
弓 道	1	1							
剣 道	1								○
弓道創設	1					1			○
卓 球	1								
[昭34] 法学研	3	2	1		2	1			○
茶 道	1	1				1			
空 手	1				1				
庭 球	1			1			1		
自治会	1	1							
水 泳	1	1			1				
不 明	1								○

(アンケートより作成)

表C-20[E1] 就職活動状況

レベル	～S.29	S.30	S.31	S.32	S.33	S.34
1 かなり活動	1人		2	1	1	
2 やや	1			1		
3 ふつう	1		1	2	2	6
4 あんまり	1	1		1	5	2
5 全くしない		1			2	5
無記	1	1	2	2		8

(アンケートより作成)

表C-21[E3] 就職環境状況

レベル	～S.29	S.30	S.31	S.32	S.33	S.34
1 かなり厳しい	2人	1	5	1	7	10
2 やや厳しい	1			5	4	8
3 ふつう						
4 あまり厳しくない						
5 全く厳しくない						
無記	2人	1	1	1		3

(アンケートより作成)

表C-22[E8] 就職のさい世話になった人

レベル	～S.29	S.30	S.31	S.32	S.33	S.34
1 大学就職課			2	1	2	5
2 卒業生	1人				1	
3 知人			1		2	2
4 自方		1	2	2	1	2
5 就職先						
6 ほかに	2		1	1	6	2
無記	2			1	1	6

(アンケートより作成)

表 C-20 での就職活動レベルは、表 C-21 ではかなり就職環境が厳しい状況の中で、積極的に行っていない状況が見えるが、この根底には公務員試験や教員志望、弁護士志望などの受験組が多く、民間への志望が少なめであったことによると思われる。厳しい環境は、当時の経済不況と新制大学がこの時期一斉に就職市場へ参加してきた面もあった。そのような中で、多くの学生があまり動かなかったのは、表 C-22 に示すように、大学就職課による正攻法のほか、様々なコネクションが機能していたことがその背景にあった。当時は就職に際しては、コネクションによる就職が広く行われ、そのコネクションに恵まれない学生が、就職課にお世話になるという局面もあった。しかも就職課による学校推薦は一人につき 1 件に限定されていた。今日のように就職解禁日が設けられていたり、大学就職課が一手に学生の就職の世話をするという状況ではなかった。しかし、愛知大学には卒業生の信頼も得て、大学への求人も多く、求人票から就職先を決定したケースも多々見られた。

表 C-23 はこうして決定した就職先の回答分である。それによると、弁護士や法務局、同少年院、通産局、府警、県警、県庁、市役所などの法学科卒業の専門的な就職先をメインとした特徴がみえるほか、学校教員、一流の民間企業、メディアなども多く、幅は広い。法学教育はかなりの成果をあげたといえるように思われる。

こうして就職したさきでの愛知大学への意識を問うたのが表 C-24 である。それによれば、学歴を重視していないという就職先の 7 人以外は、多少以上に意識したことを回答している。その多くが具体的には職場

にすでに先輩が多くいたり、母校への誇りを大事にしたり、学校推薦ゆえの就職のためだったり、また愛知大学が東亜同文書院の系統だと多くの人がし知っていたため、母校も含め、その名を汚さないように意識したなどの回答が多くみられた。

それと合わせて自己評価として、愛知大学卒業生の他大学卒業生と比較したときの評価と愛知大学卒業生の特性を問うた。まず、評価(表 C-25)を見ると、まじめ、責任感、闘志、努力、勉強家、反戦、他などのキーワードが並び、高い評価をしている。次いでその特性を見る(表 C-26)と、自由で世界まで意識するほど視野が広く、まじめで責任感もあり、社交的で協調性もあり、エネルギーであること、そして気質は早大や明大と似ているとする指摘もある。一方、玉石混交で、際立った特性はないとする指摘もある。多様な見解もあり、全体としての偏狭性が見られないところは、愛知大学卒業生の特性かと思われ、実社会で活躍してきた姿が浮かんでくる。

7. F 系列の「愛知大学の卒業生として」についての回答

ここでは愛知大学生の卒業生として、愛知大学をどうみているかの問への回答である。最初に愛知大学創設の原点である「愛知大学設立趣意書」をどのように受け止めてきたかという点である(表 C-27)。平和と自由の大切さ、自由と受難など、戦時体制から解き放たれた戦後の雰囲気をも十分に感じた卒業生は、昭和 30 年代の初期においてもことさらに実感として味わったことであろう。そのあと、世の中のおちつきが出てくる中で、真理の探究、地域社会や文化への貢献、

表C-23[E7] 法学科の就職先(判明分)

へS.29	S.30	S.31	S.32	S.33	S.34年
愛知県警	県立高	明治生命	弁護士	カリツー	愛知県庁
C.B.C.		東京凸版	県上級恥	豊橋市役所	名産通産局
県教委		円形待住職	名古屋トヨ	天 竜	東邦高校
名産精糖		小学校教員	愛知銀行	下田金庫	少年院法務
		津田工業	西武百貨店	電 通	新城八条事
				証券会社	名古屋法務局 2人
				桜丘高校	トヨミ工業
				市役所	組合(静岡)
				山一證券	国 鉄
				名古屋法務局	法務局
					大府警本部
					日本油脂
					司法行政士
					銀 行
			(アンケートより作成)		

表C-24[E9] 就職先での愛知大学への意識レベルと理由

年次 意識 レベル	1 意識 した (理由)	2. 少し 意識 (理由)	3 特 に なし (理由)
～昭和 29 年	2人 ・ 職場に先輩多かった		
昭和 30 年		1人	
昭和 31 年	4人 ・ 母校ゆえに ・ 学校推薦ゆえに ・ 誇りと名誉 ・ 当時4大卒の小学校教師は少なかつた		
昭和 32 年	1人 ・ 母校の名誉を汚さぬように	1人 ・ 職場に先輩が圧倒的多数 ・ 他大学との比較を意識した	1人
昭和 33 年	4人 ・ 母校初就職の職場 ・ 同窓生多く有利であつた ・ 各所に東亜同文書院の系統を知る人が多かつたため ・ 母校の誇りあつた		2人
昭和 34 年	6人 ・ すぐれた先輩がいて誇り ・ 活躍する先輩多かつた。 ・ 同期の国立大卒に負けないと。 ・ 同職場に母校先輩が多かつた ・ 名産屋支店へ転勤してきたため		4人 ・ 学歴重視の職場ではなかつた ・ 東大関がみられた

(アンケートより作成)

表C-25 [E13]愛大卒生の他大学卒生の比較評価

<p>[~S29]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・この地域の私学として高い評価 ・高い評価あり ・無記 <p>2人</p>	<p>[S33]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・まじめで責任感強い。遜色なし ・旧制大卒はレベルが高い ・行動力あり ・反戦貫く卒業生多い ・私大では高く評価 ・80年代までは勤勉、協調性、個性的 ・無記 <p>3人</p>
<p>[S30]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・無記 <p>2人</p>	<p>[S34]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・比較的高い評価 ・頑張っている ・遜色なし ・努力タイプが多い ・まじめな勤務態度 ・ふつう ・中部で高い評価 ・知名度あり ・大切に扱ってくれる ・地元信頼 ・まあそこそこに
<p>[S31]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他校卒に負けない闘志あり ・自分に一心不乱、懸命、無我夢中 ・勤勉、努力家多く、視野広い ・無記 <p>0人</p>	
<p>[S32]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自由で闊達な発想 ・他大卒に遜色なし ・まじめ、勉強屋 ・無記 <p>1人</p>	

(アンケートより作成)

表C-26 [E14]愛大卒生の他大学卒生と比べた特性

<p>[~S29]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自由な雰囲気 ・視野が広く、世界を意識 ・中国語に関心 	<p>[S33]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・まじめ、責任感 ・バイタリティあり ・思想が明確 ・私学ゆえ2番手に見られることはない ・法科大に伝統生きている ・同窓会、父母会の結束強い
<p>[S30]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・古いことばかりにこだわらない 	<p>[S34]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・努力家多い ・強調性と団結力あり ・きわ立った特徴なし ・責任感あり ・平均的に馬力あり ・官庁勤めと個人企業多い ・まじめ ・前向きで仕事頑張る ・愛大卒の自負あるが、さらに知名度を <p>2人</p>
<p>[S31]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・かくれた闘志あり ・律儀で堅実、早大・明大系 ・まじめ ・自信がなさそうにも 	
<p>[S32]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社交的で冷たくない ・玉石混交 ・あまりない 	

(アンケートより作成)

自らの実践活動へと広がり、この趣旨への誇り、継承へと趣意書の持つ重みを実感している。特にこの趣意書の根幹の精神に開眼し、先の経済学部生と同様に、実践活動まで展開する卒業生が出てきたことはこの趣意書が持つ大きな力の存在感が示される。まさに高い理念と志を示した「愛大憲法」となったといえる。

ところで、開学当初の「旧制大学時代」に外地から大学へ編入学した書院生は最も多かった。その書院生との交流はどうであったかという問いへの回答である(表 C-28)。書院生は経済学科へ編入学したため、法学科との接点は多少少なかったかと思われるが、これを見るといろいろな場で交流していることがわかる。ここには出てこないが、書院生はほとんど寮生活であり、寮での交流はかなりあったのではないと思われる、そしてこの寮生の書院生からの刺激は強かったことは他所で記されている。

次いで、授業開講の昭和 22 年の 6 月に、愛知大学の学生たちは空襲で焼け野が原の広がる豊橋市民に呼び掛けて、市民との文化交歓祭を提唱し、約一週間、市内をめぐる仮装行列から始まり、市公会堂と開校したばかりの愛大グラウンドで講演会、演劇、演奏会ほか各種の文化祭や愛大グラウンドでの運動会などの行事を実行した。最終日には、昨年の NHK 朝ドラの「エール」で描かれた古関裕而とコロンビア楽団そして伊藤久雄らの音楽祭が盛り上がった。この文化交歓祭のまとめ役となって活躍し、のちの外交官となった小崎昌業が公会堂の最上段から数千人の集まった市民に対して挨拶をしている。詳しくは、旧制大学と経済学科の卒業生アンケートの項で説明している。

この愛大として最も古い学生行事の認知度を表 C-29 示した。多くの当時の卒業生がなくなってしまった今、これを知っているという回答は 3 人だけである。具体的内容については断片だが記憶していたことがわかる。これは愛大の学生の最初の大きな行事であり、これによりはじめての学生自治会が誕生している。そして少しあと、格調高い「愛知大学学生新聞」が有志により創刊された。

愛知大学に降りかかった最大級の事件は「愛大事件」であった。これも経済学科でその経過は触れたので、ここではアンケートだけに絞る。表 C-30 はこの「愛大事件」の認知とその受けとめ方についての回答である。多少知っているとの回答者は、回答者の 7 割を超えている。法学科生として一段と関心は高かったと思われる。全体としてみると法学科の学生たちの視点で見ているところがうかがわれる。すなわち、外部からの権力に対して学生と大学側、とくに本間学長らの献身的尽力で対応できたこと、とくに本間学長の正義感と愛大への愛着は感動的であったとする受け取り方がその核心を構成している。その意味で法曹界も目指そうとする学生たちにはまさに生きた教材であり、それを身をもって教えることになった本間学長への尊敬の念が伝わってくる。しかし、この事件は愛大がまさに発展しようとしていた時期に風評による痛みを与えたのは事実であった。しかし、経済学部もそうであったように、現場を目の前にした学生たちは物事も筋をきちんと理解しており、風評に惑わされなかった点は十分に評価されてよいだろう。そのような回答は、経済学科でも共通しており、愛大生は大学指導部

表 C-27 [F1] 愛大設立趣意書への反応

[~S29] ・自由と教授のレベルの高さは誇りだった ・自由な生き方 ・平和と自由の大切さが知られる	[S33] ・地域社会への貢献を ・ユニセフへ協力し、開講も ・生き方の根幹に反映した ・それゆえ胸を張れた ・職務上、地域貢献ができず残念
[S30] ・若い時の学習意欲を高めた	[S34] ・地域社会への貢献 ・学友やクラブ活動に反映 ・役所は上意下達だが、おかしいことは指摘してきた ・とにかく前進をと ・国際社会動向、歴史文化から日常生活まで ・誇りをもった ・今後とも継承を ・この理念を大切にして生きてきた ・誇りに思う ・権力や不正への反発 ・主旨はいつも頭にあって頑張ってきた ・自慢である
[S31] ・卒業後に「自由、受難」の由緒を知った ・世界平和、日本文化、日本仏教へのつながり ・川崎市で日本語教室を開設した	
[S32] ・知を愛する真理の探求 ・誇りに思う ・地域社会文化への貢献を誓う	

(アンケートより作成)

表 C-28 [F2] 書院生との交流

年次 \ レベル	1. 交流があった	2. 交流が少しあった	3. 交流はなかった
~S29	1人	1	1
S30		1	
S31	1	1	3
S32		2	2
S33	2	3	7
S34	1		12
具体的内容	・書院出身者と友人 西日本など支部サークルで ・職場や霞山会、同窓会で多くを学んだ。 ・今後の日本人を考えるヒント ・同窓会で上海交通大学訪問の案内 ・噂話で知る ・読書会で卒業生と交流 ・小岩井先生と書院生との議論を聞いた ・同窓会で交流した		

(アンケートより作成)

表 C-29 [F3-2]市民交歓会への認知と内容

年次 レベル	1.知っている	2.知らない
1～S29	1人	2
S30		1
S31	1	4
S32	1	3
S33		11
S34		11
具体的内容	<ul style="list-style-type: none"> ・市公会堂でコーラスなどイベント多数 ・本間、小岩井先生から聞いた ・公会堂で演劇 ・校歌を歌った 	

(アンケートより作成)

表 C-30 [F4]愛大事件の認知レベルとその受け取り方

レベル \ 年次	～S29	S30	S31	S32	S33	S34
1.よく知っている	3人	1	3	1	2	4
2.多少知っている			1	2	6	7
3.ほとんど知らない				1	2	2
4.無記	2	1		1		3

(アンケートより作成)

[～S29]

- 1.警察権力の強大さ
- 1.共産党一部の仕業と思う
- 1.3年の時大学へ入れず、就職で困った

[S30]

- 1.学問の自由をつぶそうとする連中のたくらみ

[S31]

- 1.身近ではなかった。一部の目立ち、ハネ上がりが起こした
- 1.当時は寮にいた。早大事件の流れ
- 1.学問の自由を守り、権力介入を許すべきではない
- 2.事実をきちんと見るべき。コツコツ勉強も

[S32]

- 1.学生と教員が一体となって学園自治を守った
- 2.愛大新聞で知った程度

[S33]

- 1.愛大は一步先へ行っていたが、今は、すべての大学が「ふぬけ」だ
- 1.政治強行は阻止すべき
- 1.大きな試練、刑免除、無罪へ
- 1.私学として大学の自治と学問の自由を守った
- 2.当時は豊橋東高授業で若江先生(愛大)から話を聞いた
- 2.北門でピラを見て知った
- 2.真実と正義を貫く精神
- 2.歴史上の時代背景の中で大学と学生の関係を思い出す
- 2.大学の自治を本間学長が守った。先生の行動に感動
- 2.本間学長の正義感と愛大への愛着を知り感動
- 2.芯のある感じだ
- 2.よく話を聞いた
- 3.在学中、書物で知った

[S34]

- 1.巡査の無許可学内侵入、大学は学生を守った
- 1.裁判が長期化の中、本間学長の弁護はすばらしかった
- 1.大騒ぎするほどのことではない
- 1.思想弾圧だ
- 1.学長の献身的努力に敬服した
- 2.入学当時のこと、見張られているようで緊張
- 2.伝聞で知った程度
- 2.やむえなかった
- 2.校内での警察の思想調査は問題外
- 2.就職時に愛大は赤といわれ苦労した話も聞いた
- 2.入学前のことで、事実関係は知らない
- 2.よく理解できなかった(2人)
- 2.短大夜間にいた時、警察が入ってきて騒ぎとなったが、内容は知らなかった
- 2.本来、権力者は先進的なものに警戒し、口実をつくり侵入してくる
- 2.教授と学生の結束の強さは歴史に残る
- 2.快挙。偏差値の高い大学での事件だ
- 3.単に社会情勢の反映だ
- 3.実際のところはよく知らない

(注)理由の前の番号は上表中のレベルの番号を示す

への強い敬意と共感を抱いていたことがわかる。

次は、こうした出来事も含みつつ愛大は発展し始めるが、その後も含め卒業生たちの愛大への関心についての問への回答が表 C-31 である。

それによると、「大変関心」は最も多く、回答者の中では 7 割が関心を持っている。その理由は、強い母校愛とその母校の動きおよびその活躍を期待していることからであることがわかる。

この期待情報については表 C-32 に示す。ここでは卒業生たちの知りたい情報があげられ、愛知大学の動きや質的向上に加え、教授、学生や卒業生も含め、その活動を広く知らしめるべく、もっと広報活動を活発にしたいとの期待にあふれ、そして最も愛大のレベルアップを望んでいることがわかる。

表 C-33 は、そのような愛大情報を①から⑧の中から選んで示してもらったものである。それによると、最も多いのは「同窓会報」で、次いで「愛大通信」、次いで一般のテレビ、新聞の順になっている。

「同窓会報」が最も多いということは、同窓会とのつながりがあるということであろう。そこで次に、同窓会への出席状況の回答を見た。それが表 C-34 である。それによると、高齢のためか「時々」出席という回答が最も多く、「いいえ」の回答も多い。その理由は欄の下に示したように、高齢化によるものである。「通知がこない」という回答者もいて、きめ細かな情報発信が必要なことを示している。

それはまた、同窓会の魅力を発揮する必要があることでもある。そこで同窓会の活

発な活動のための魅力アップ法を問うてみた。その回答が表 C-35 である。日頃実感している卒業生からの提案であり、いろいろな課題の克服案でもありそうで、同窓会運営の関係者には、十分参考になるものと思われる。

以上は、卒業生が愛知大学をどうみているかという点にもつながる。表 C-36 は、それを示した。それによると、初期の卒業生からは大学の発展ぶりを評価している一方、昭和 30 年代の卒業生になると、豊橋校舎への新学部設置、海外提携大学との交流の活発化、愛大出身の愛知大学教授の増加、教授陣の充実、大学の建学精神と理念の目標の明確化、書院史と愛知大学史を学生に教育、全国区型大学への指向など大学への要望につながる内容を挙げており、社会人として外から見た大学への要望に満ちている。それだけ、大学への期待が大きいということである。

また後輩へ伝えたいことも多くあり、それを表 C-37 に示す。そこには、社会経験豊かな卒業生から、親身になった珠玉の言葉が伝えられている。ぜひ、「大学通信」誌上で後輩たちに伝えたいところである。

そして図 C-1 は、卒業生の人生の満足度とそれの愛知大学との関連度を示した相關図である。それぞれが主観的な評価だと思われるが、自己評価によるものといえる。凡例には各卒業年度別生別を示した。それによると、全体としては右上がりの傾向線が引けるほど関連性が高く、人生の満足度が愛知大学によってもたらされたと判断でき、大学の存在感と評価につながるといえる。なお、図中相關の方向性から外れた数人の点が図の左方側にみられるが、これらの卒

表 C-31 [F6.7] 愛大への関心レベルとその理由

年次 レベル	～S29	S30	S31	S32	S33	S34	計
1.大変関心	3人	1	3	5	9	7	25
2.多少関心					1	2	3
3.ふつう			2	1	1	3	7
4.あまり						1	1
5.無記	2	1		3	1	3	10

(アンケートより作成)

[～S29]

1.母校ゆえ

1.愛大前進へ期待

1.名古屋進出、野球部活躍が身近

[S30]

1.旧制大学の歴史あり

[S31]

1.母校ゆえ当然

1.青春時代のルーツ

1.愛校心、母校発展と世界平和への貢献

3.努力、夢中、頑張ろう

3.寄付ばかり来る

[S32]

1.母校発展と、その評価に常に関心

1.卒後60年、人数は減ったが、友人達とは今もつきあいあり

1.建学の精神をもっと感じてほしい

[S33]

1.大学発展と後輩(とくにスポーツ)の活躍に期待

1.もっと誇りを！自信が足りない

1.大学の活躍を期待

1.生き方を決定してくれた

1.母校ゆえ

1.創学の精神と足跡を評価する立場から

1.人的、物的資産を社会へ役立たせてほしい

[S34]

1.卒業生として誇り

1.成長している

1.母校発展して優秀な学生を送り出して

1.母校への愛着とプライド

1.愛大の評議員にもかかわったので大いに関心

1.ずばり愛大だと

2.卒業生の活躍P.R.を。また、司法合格のP.R.を

2.学生の様子に関心

3.大学に触れるチャンスがないので、触れられるように

(注)理由の番号は表中のレベル番号を示す

7/

表C-32 [FW7] 愛大への期待情報

<p>[~S29]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・この地方のトップレベルへ ・小岩井記念室の設置と図書館のP.R. ・司法試験、公務員関係 ・東亜同文書院史のP.R.を 	<p>[S32]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会への貢献、クラブ活躍情報を
<p>11人</p>	<p>[S33]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・同窓生と現役学生の発信を ・社会貢献、市民とのイベントを ・各校舎のP.R.をもつと ・法科大の開学精神、平和運動も ・愛大の「今」を知りたい
<p>[S30]</p>	
<p>[S31]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・母校の学力、各界での卒業生活躍 ・教授の質、愛大の質の向上を ・メディアに愛大関係者を見ない ・立派な学舎に負けず頑張れ ・将来の展望、世界の大学へ 	<p>[S34]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・卒業生と在校生の情報を ・学生、同窓生の活躍 ・教授陣や学生の動向(入試、就職も) ・今のままで十分

(アンケートより作成)

表C-33 [F8]愛大情報の入手先

種別 \ 年次	～S29	S30	S31	S32	S33	S34	計
1.テレビ・新聞			1	1	6	6	14
2.大学HP			1	2	3	3	9
3.愛大通信	2人	1	2	3	3	9	18
4.さまざまな会合				1	1	6	8
5.受験雑誌					2		2
6.同窓会				2	1	3	6
7.同窓会報	1		3	6	8	10	28
8.愛大新聞	1	1			2	1	5

(アンケートより作成)

表C-34 [FW8]同窓会への出欠状況

種別 \ 年次	～S29	S30	S31	S32	S33	S34	計
1.はい	1人				1	3	4
2.よく						1	1
3.時々	2	1	3	2	5	4	17
4.いいえ			2	5	3	4	14

(アンケートより作成)

《3と4が多い理由》

- 1.多くは高齢化
- 2.通知が来ない
- 3.友人がいなくなった

表C-35「F10」同窓会魅力アップ法は

〔～S29〕

- ・一度参加したら楽しさがわかったのでぜひ出席方を

〔30〕

〔31〕

- ・神奈川支部の活動をモデルに見習ったらどうか

〔32〕

- ・もっと地域、労働界に参与を
- ・親睦と交流の場を決めておく。

〔33〕

- ・茶話会のふんいきも(飲めない会員もいる)
- ・おとなしすぎるのをどう変える。
- ・卒業生各地の活躍情報を。先日「岩瀬」送手の記事はよかった
- ・創立、南学の精神をもっと広く知ってもらう。
- ・若い世代への期待とサポートを。
- ・参加者をもっとふやし、愛大の知名度アップを。

〔34〕

- ・色々な活躍をもっと広くアピール
- ・サクル活動を広げ、活動を活発に
- ・活躍中のOBによる講演、トークショーを
- ・同窓会員をふやす方策を。
- ・名古屋地区同窓会は頑張っている。

(アンケートより作成)

表C-36 [F102] 愛大をどう見ているか

[~ s. 29]	
・想像以上に発展している。	
・豊橋校舎に新学部を	
・図書館建設も	
・第1回卒生7人が今や17万人へ発展	
[30]	
・海外提携大交流を活性化し、国際人養成を	
[31]	
・アカデミックな目玉をつくり出すべき。	
・立派になった。ありがとう。	
・新校舎の発展も	
[32]	
・職場での卒業生の活躍を知ってほしい。	
・色々な情報発信を	
・愛大卒生で母校の先生をふやしてほしい	
・文系私大としての偉績を得ている	
[s33]	
・各校舎のP.R.で全国区大学へ	
・教授陣の充実を図るべき。	
・建学の精神を大切に、	
・不当権科に対抗できる人材を育成してほしい	
・大学のガバナンスを	
・社会的貢献のP.R.と、高名教授のスカウトを	
・社会では大いに期待されている。さらなる発展を。	
・大学理念による目標を明確に。	
[34]	
・積極的に活動のP.R.を。	
・誇りをもちつづけること。	
・法科充実と「司法試験は愛大」の定着を	
・書院史と愛大史を学生に学ばせてほしい。	
・書院の歌も普及させてほしい。もちろん大学歌も	
・愛大がマスコミでの話題づくりになるように	
・司法試験の実績情報を	
・自分自身のための努力を。	
・新キャンパスに期待	

(アンケートにより作成)

表C37[F11] 愛大の後輩へ伝えたい

[~ S. 29]

- ・ コロナ禍、戦時の大空襲を忘れるな
- ・ 資格を1つ以上とるのがよい
- ・ すぐれた設備、施設の活用を

[30]

- ・ 自分の大学への自信を

[31]

- ・ 愚直に知を愛し世界へ
- ・ 世界で活躍を
- ・ 努力、一心不乱、自信を
- ・ 積極的な発信を

[32]

- ・ 建学の精神の理解を
- ・ 部活動を活発に、文系も
- ・ 大きくはばたけ

[33]

- ・ エチケットとマナー、そしてあいさつを
- ・ 「愛大生は礼儀正しい」と
- ・ おとなしすぎるのは、もっと自信を
- ・ 友をもつこと
- ・ 学外でも「よきリーダー」になれ
- ・ 書院時代をふまえ、歴史・伝統を誇りに
- ・ 広い教養を。専門は進歩発展するので自分で研さん。
- ・ 平和と民主主義は守れるように
- ・ 英語のほかもう1か国語を

[34]

- ・ 個性を生かして
- ・ 誇りをもって活躍を → 3人
- ・ 大学は勉学の場とともに心を広げる場でもある
- ・ 政経も頑張れ (法学科の立場から)
- ・ 古典を読む幅を (小岩井先生の言葉)
- ・ 自分に忠実、努力のみ
- ・ 中部ではリーダー格の大学生として
- ・ 活動をもっと発信して
- ・ 社労士として愛大生はすぐれている。がんばれ

(アンケートより作成)

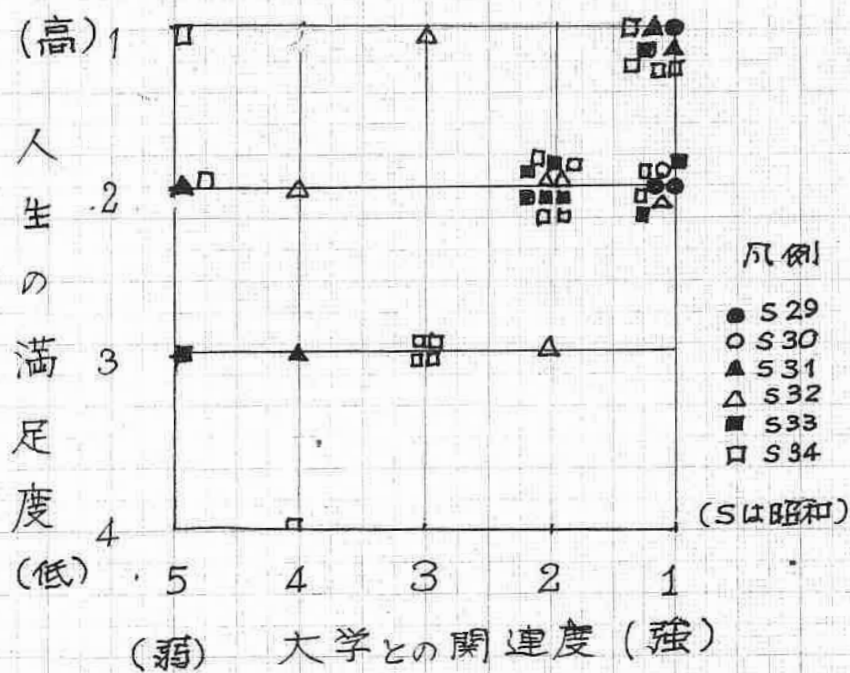


図 C-1 法学科卒業生の人生の満足度と大学との関連度
(アンケートより作成)

業生は、集団の傾向からは独立的な人生だったといえそうである。

以上に関連して、最後に、表 C-38 は法学科の卒業生たちが、愛知大学から得たものを挙げてもらった。それによると、当初の卒業生が「自由な研究ができ、授業以上に役立つことが多かった」というその内容が、それ以降の卒業生にも同感されて継承されており、指摘された個々の宝物につながっているものと思われる。それがまた前表の愛知

大学から得た満足度につながっているといえるだろう。

いずれにせよ、理論と実践という法学が持つ特性は、卒業後、直ちに社会とつながり、実践できる側面があり、まじめに勉学に取り組んでいたことがわかり、その分、学業、またその後の人生の志の軸になっていたということがうかがわれ、それが法学科卒業生の特性を形成したように思われる。

表C-38 [F14] 愛知大学から得たもの

[~ 529]

- ・授業以上に役立つこと多かった。
- ・自由な研究ができた
- ・焦らない、無理しない、あきらめない

[30]

- ・自信を持った
- ・問題と取り組む積極性を大切にした。
- ・いい加減ではない頑張り。

[31]

- ・僕の青春時代
- ・努力、一心不乱に。
- ・基本的人権尊重と国際交流
- ・愛大卒業生を多数採用した。
- ・他大学出身者に負けない気持と力

[32]

- ・真理探求 学問継続の有効性
- ・自由受難
- ・定年時、先輩からボランティア紹介
- ・継続は力
- ・政治への関心
- ・権力への反発
- ・認識の基礎を得た

[33]

- ・問題解決力
- ・物を考える力(「杜説を批判せよ」(小岩井)
- ・杜説は必ず読むこと(小岩井)
- ・友情、不屈の精神
- ・反戦、平和の生き方
- ・新聞発行で大学、研究会、仲間と交流
- ・小岩井学長を訪門
- ・とにかく勉学、横に読書あり
- ・信念

[34]

- ・努力と誇り
- ・私の人生の源泉
- ・クヨクヨしなくなった
- ・豊橋校舎の学園のおかげ
- ・日新、日々新
- ・プライドと満足感
- ・人との交流
- ・個を磨く。
- ・自由、向学心
- ・経済的弱者への思いやり
- ・地域での諸活動ができた
- ・柔軟性を得て転職できた
- ・大いなる愛

(アンケートより作成)

【卒業生アンケート調査報告特集】

第4章 「新制愛知大学」文学部卒業生たちの在学時代と卒業後の軌跡

1. はじめに

「旧制愛知大学」に文学部ができたのは、昭和 24 年（1949）の学制改革により、「新制大学」制度が誕生したときである。旧制大学も新制大学へ移行し、愛知大学も同様であった。この時に全国で専門学校などが、新制大学へ昇格し、各地に新制大学が生まれ、「駅弁大学」と揶揄されたりした。

愛知大学は、この時に文学部を創設し、法文系だけでなく、文科系総合大学を目指した。いわば実利だけでなく、人文系の教養分野へも幅を広げようとした。当初はその第一歩として社会学科を全国で初めての学科として誕生させた。それは京城帝大から着任した、戦後に文化人類学といわれるようになったその第一人者であった秋葉隆教授や海外留学の経験もある農村・都市社会学の第一人者であった鈴木栄太郎教授などが学科創設にかかわったからである。国文学科も当初に計画されたが、2 年目になって創設された。そのご後も中国文学、英文、さらに国史の専攻が旧帝国大学の講座制方式で開設され、昭和 34 年度すぎからも次々と様々な専攻が設けられ、それぞれその分野の第一人者が着任した。

今回のアンケート調査では、できたばかりの社会学、国文学、中国文学、英文学、国史学の専攻がその対象になった。文学部は経済学や法律学と違い実利の科目ではなく、戦後のこの時期のまだ経済的に貧しい時代には、志願者もそんなに多くはなかった。それに、東海地方はその後のものづくり地域

となったように、実利に指向する傾向が強くなり、その影響もあり、その後の文学部の隆盛までには少し時間がかかった。その意味で、愛知大学が「知を愛する大学」と称する以上、この人文系分野はそれを正面から支える新分野だとみることができ、愛知大学のもう一つの柱になったと言えよう。

しかし、そういう経過があり、新制文学部のアンケート対象者はこの時期まだ少なく、今回表 D-1 に示すように、回答者は合計 10 人に過ぎない。そしてそのなかでも社会学科が半分の 5 人を占めるため、まとめの上で、社会学科とそのほかの学科として便宜上区別してまとめた。以下、前述の学科と同様に区分しながら見ていく。

2. A 系列の入学状況について

表 D-2 は入学生 10 人の出身校である。地元校も並ぶが、新設の文学部ゆえか、長野、京都、島根など遠隔地からも入学している。愛知大学を知った理由は表 D-3 に示すように、学部や学科の創設情報とベースになる書院からの伝統とそれに対する信頼があったということであろう。表 D-4 は就職、大学の立地、共学、通学、有名教授などがあげられ、さらにそれが入学理由になると、愛大との関係や学風、授業料、新学科や専攻の新設、勉学意欲などがより目的意識の中で掲げられている（表 D-5）。

3. C 系列の学業状況について

次に実際の学業状況についてである。表

D-6 は学業のウェイトとその理由についてである。全員学業へのウェイトが大きく、バイトもせず勉学に集中し、科目名と教授名を列記できるほどそれぞれのその勉学目的のはっきりしている。

表 D-7 は興味や面白かった授業も社会科学、他学科ともに具体的に挙げられ、勉学に夢中になっていた証であろう。表 D-8 の印象に残った先生は両学科とも優れた教授たちの名前が挙がっている。英語担当の若江教授はサンスクリット語まで教えていたという。

授業の内、ゼミとそのテーマについては全員が思い出したわけではないが、中国語では鈴木沢郎教授の馬力が伝わってくるほどである。また社会学では秋葉教授による社会調査が始まっており、この伝統がその後の社会学における渥美半島、志摩地方、富山村など農山漁村調査に発展していくその原点であった (C-9)。

そして大学時代の勉学の集大成である卒業論文では、学生のオリジナリティを感じられるテーマがならぶ (表 D-10)。人文系の蔵書はまだ少なかったであろうが、図書館もそれなりに利用し (表 D-11)、教授から参考書も借りたりしている。このようにゼミや卒論を通して、教授たちとの交流は活発であった (表 D-12)。

したがって、在学中の満足度は高く、全員がほぼ満足している。その理由はそれぞれが先生や仲間とともに学んだ様子も伝わってくる (表 D-13)

それゆえ、愛知大学での学業が人生に与えた影響も大きく、色々な力を得たことがあげられている (表 D-14)。

4. D系列のクラブ活動について

つぎに文学部の卒業生のクラブ活動について見てみる。

表 D-15 は参加クラブの一覧である。運動系では空手クラブが一人いるだけで、あとは全員文科系クラブである。当時の新聞部は創部をして、その頃は優れた評論も含む新聞発行の伝統を作った。その伝統の中から、マスコミ界へ就職した卒業生は多かった。いずれのクラブ員はクラブ活動も熱心だったことがわかる。

そんなクラブ活動の良かった点とそのごの人生への影響も大きかったこと、就職の役立ったことがうかがわれる (表 D-16、17)。

5. E系列の就職について

では、学業の後の就職へはどのように取り組んだのであろうか。

表 D-18 は就職活動状況についてである。全体としてはかなり積極的なケースとそんなでもない状況が見られる。その理由は鍋底不景気時代に東京で就職を混ざす積極者のいる一方、他は教員志望であったり、すでに公務員や教員に決定していたという余裕もあったようである。しかし、一般的には就職環境はかなり厳しかったことは他の学科と共通する (表 D-19)。

その結果の決定した就職先を示したのが表 D-20 である。社会学科は公務員や著名な企業、ほかの学科では教員や大学など、目指した就職をそれぞれ確保し、学科の特徴もよく出ているといえる。

では、それぞれが就職先でどのような愛知大学卒業生としての意識を持ったのであろうか。それが表 D-21 である。いずれもそ

表D-1 文学部卒業生

卒業年	卒業生	男	女	社会学	国文学	中国文学	英文	日本史 (国史)
昭和28年	1人	1	0	1				
29年	1	1	0		1			
30年	1	1	0			1		
31年	0	0	0					
32年	1	1	0	1				
33年	5	4	1	2			2	1
34年	1	1	0	1				
計	10	9	1	5	1	1	2	1

(アンケートより作成) (注) 日本史専攻(名は社会学専攻からの専攻)

(注) [D-2]はこのページの最下欄左側へ

表D-3 [A5] 愛知大学を知った理由

社会学科(専攻)	高校の隣の大学	2人	社会学科	就職に直結
	学校の先生から			隣接県に近い
	社会学科が初めてできた(全国)			全国私学一覽表のトップ
	東亜同文書院の流れを知った			男女共学、地元、通学可
他学科・専攻	文学部希望			大石先生(経営学)から
	文学部創設		他学科・専攻	久曾神先生の存在
	愛大事件で、			自宅から通学可
	全国弁論大会で成績優秀			文学部を希望
	高校の隣の大学			

(アンケートより作成)

表D-2 出身校

出身校	人数
時習館高	3人
岡崎高	2人
伊那北高	1人
浜名高	1人
松本県ヶ丘高	1人
京都外大短大部	1人
出雲高	1人
計	10人

表D-5 [B2] 入学理由

社会学科	通学至便
	新学科の初誕生
	自由な学風、寮がある。
	授業料が安い
	女性の労働環境学がたい
他学科	史学科日本史専攻誕生(数科)
	高校国語で長歌反歌を学んだ
	貿易関係の仕事で英語を学んでいた
	兄が愛大講師になったため
	中国語に近い中国文学を

(アンケートより作成)

表D-6 [C1, C2] 学業のウェイトとその理由

ウェイト	社会学科	他学科	理由
1. 学業が主	① 4人	② 5人	① 就職に必要、法経も学んだ
2. やや学業	1人		② なく学ぶことが必要
3. まずまず学業			通学でき、家庭教師のバイトで余裕
4. 学業は従			好きな学門に集中した
計	5	5	② バイト不要で勉強に集中
(アンケートより作成)			英語教員免許をとるために
			中国語学習をふまえ、日中関
			係回復を運動でめざした
↳ 現代詩論(丸山)、中文(長沢)、古事記(川出)、古今和歌集(久曾神)に夢中になった			

表D-7 [C3] 興味をもった面白かった授業

社会学科	・社会学・新聞学・現地社会学調査 ・社会調査 ・社会調査(合宿、他大学と合同のフィールドワーク) 2件
他学科	・古事記講読(川出)、古今和歌集・伝本講義(久曾神) ・英語講読(若江) 2件 ・映画演劇論(熊沢) ・生物学概論 ・中国語(鈴木扶郎)、同(桑島)、ロシア語(胡麻本)、朝鮮語、 ・本間学長と小岩井の関連授業
(アンケートより作成)	

表D-8 [C4] 印象に残った先生

社会学科	・秋葉、川越、牧野、高桑、小岩井 ・島本、川越、牧野、久曾神 ・黒木、鈴木扶郎、桑島
他学科	・鈴木泰山・歌川学、 ・長沢規矩也、 ・若江(英語) ・若江(英語学概論、サンスクリット語も)
(アンケートより作成)	

表D-9〔C5〕		ゼミとテーマ		表D-11〔C8〕 図書館利用	
社会学科	秋葉「社会調査」	川越	島本「教育社会学原論」	社会学科	よく利用
					よく利用
					(市図書館)
他学科	鈴木淑郎「中国語学」				あまり
					利用せず
				他学科	常に利用
					あまり
					(自分で購入)
					国研利用も
					[ほか]
	(アンケートより作成)			(アンケートより作成)	
表D-10〔C6〕		卒業論文()は指導教授		表D-13〔C9〕 在学満足度	
社会学科	「世論の研究」(秋葉、川越)			在学満足度	社会学科 他学科
	「社会行動論」(川越)			1. 大いに満足	① 3人 ② 1
	「農村婚姻論—農村と山村の結婚様式比較—」(島本)			2. まずまず満足	① 1 ② 3
	「企業の労務管理」			3. まあまあ	
他学科	「宏本拾玉集」			4. あまり満足せず	
	「中国映画論」				(アンケートより作成)
	(アンケートより作成)			<理由>	
表D-12〔C7〕 先生との交流				① よき先生に恵まれた	
社会学科	・自宅訪問、懇親会			社会に役立つ勉強ができた	
	・ゼミほか			自由な学風がよかった	
	・先生の蔵書を借用			② 未知の学問の世界の扉を開いた	
	・桑島先生に仲人役			自分の志向に沿った教育内容だった	
他学科	・古筆の読みか徹底受け			③ 共学ゆえ、男子から軽蔑されなかった	
	・若江先生宅、聖書読めと			充足したばかりの日本史専攻だったから	
	・荒川先生集中と宿舎で			④ 先輩たちとの交流多く、卒業後も年金	
	・授業外に多くの先生			組合や同文会(書院)に誘われ訪中	
	・宅訪問など、濃厚			(アンケートより作成)	
	(アンケートより作成)				

表D-14 [C11] 学業の人生への影響

人生への影響	社会学科	他学科		
1 大いに影響	① 3人	② 1		
2. まずまず	① 2	③ 2		
3 まあまあ				
4 あまり				
計	5	3		
(アンケートより作成)				

<理由>

社会学科	① 自由な研究 社会に役立つ 公務員の学びに合致		
他学科	② 一生を決定づけた		
社会学科	③ 人を公平にみる力		
他学科	④ 活字になるまでの 大変な努力を知った。		
	その他		
(アンケートより作成)			

表D-15 [D1] クラブ活動

社会学科	参加レベル	特筆事項
新聞	1 (よく参加)	→ 愛大新聞発行
社会研究会	1 (〃)	
中国語研究会	1 (〃)	→ 発音練習、中国情報
空手	2 (まずまず)	
他学科		
文学研究会	1 (よく参加)	→ 部員変動、活動さかん
合唱部	1 (〃)	→ 先輩のサポート
中国研究会	1 (〃)	→ 日中友好運動など
(アンケートより作成)		

表D-16(D4) クラブ活動のよかった点

表D-17

[D5] 人生への影響

社会学科	他学科
<ul style="list-style-type: none"> ・ 広く知識を得ることができた ・ 不動の心を養えた ・ 映画「白蛇女」を上映できた 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 就職後役立つ ・ 仕事に役立つ ・ 努力と友情
他学科	他学科
<ul style="list-style-type: none"> ・ 学外の青年男女と交流できた ・ 自己を向上させたこと ・ よき先輩や後輩と出会えたこと 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 多くの方々と交流 ・ 神戸サクル参加 ・ 日中友好協会参加

(アンケートより作成)

表D-18[E1] 就職活動

表D-19[E3] 就職環境

活動レベル	社会学科	他学科	環境レベル	社会学科	他学科
1. かなり積極的	㊶ 2人		1 かなり厳しい	5人	
2 やや積極的		1	2 やや厳しい		2
3 ふーう	2	㊶ 1	3 ふーう		1
4. あまりしない		㊶ 2	4. あまり厳しくない		
5. 全くしない	㊶ 1	1	5 全く厳しくない		

理由

㊶ 東京での就職希望

就職不況時代(鍋底景気時代)

㊶ 教員希望

㊶ 小岩井先生のおかげで高校教員決定

㊶ アルバイト収入があり、切実感があった

㊶ 公務員試験に合格していた

(アンケートより作成)

表D-20[E7] 就職先

社会学科

愛知県庁

明治生命

大阪金剛製砥KK

愛知大学同窓会

浜松市役所

他学科

愛知県高校教員

愛知・私立高校教員

名古屋市商工協会組合

愛知大学

(アンケートより作成)

の意識レベルは高く、その理由はすでに先輩が同じ職場にいたり、愛大がその就職企業による指定校であったり、まだ愛大が十分知られていない関西ゆえに頑張るとか、それぞれの職場の中で、愛大を意識の軸の中心においていたことがうかがえる。表 D-22 は他大学と比較した評価であり、ここでも自由な思想を持ちつつ、頑張っていて、高く評価されているとしている。さらに、卒業生の特性については、とくにこういう分野に関心のある社会学科生は、自由な思想と発想、それに粘り強さを指摘している（表 D-23）。

6. F 系列の「愛知大学卒業生として」の意識や関心について

まず、開学時代のうち、表 D-24 は、「愛知大学設立趣意書」への受け取り方についてである。それによるとそれを意識したという回答が大半を占め、くりかえし読んで大きな影響を受けたり、その後の職場や社会人として国内外での国際交流時にも役立ち、またみずからも実践したという回答者も見られる。旧制、新製の法経学部卒業生たちと同様、設立趣意書が「愛大憲法」になっていたことがわかる。

次いで新制としての文学部では少し時間がずれるが、大学創設期の編入学生であった東亜同文書院生やそのほか国外からの編入学生との交流については、表 D-25 に示すように、7割以上の回答者に多少なりとも交流があったことがわかり、その内容を見ると、直接交流し、影響を受けたケースもあったことがわかる。

また開学開講直後に、他学部の章でもふれたように、学生が主催した豊橋市民との

交歓祭についてであるが、表 D-26 に示すように、これについての認知は一人のみで、この新制大学の時期になると、だいぶ時間が経過しており、また大きく制度の改革などもあり、先輩たちの戦後の市民との文化交流の大活躍が伝わりにくくなっているのは残念である。

そして次は「愛大事件」をめぐるものである。その認知レベルと受け止め方を示したのが表 D-27 である。これによると、回答者全員が多少知っているというレベル以上であり、広く知られていたことがわかる。しかも多くが大学に自由・自治と学問の自由を守る反応を示し、当時の学長たちの努力に敬意を払っており、新制他学部や旧制法経学部の卒業生たちとほぼ同様の反応を示している。愛大事件はその点で、マスコミも飛びつき、世の中に流布されたデマの風評には流されない、本来の大学の姿を学生たちに認識させたといえる。こうしていれば愛大精神がこれを通して形成されたといえるだろう。

その点に関係するかもしれない次の「愛知大学への関心」は、ほぼ全員にあり、職場や大学とのつながりが見られる（表 D-28）。そのさい、愛知大学に関する情報の入手先を見ると、他学部と同様にやはり「愛大通信」は7割、と「同窓会報」は6割が中心になっている（表 D-29）。

そのうち、同窓会出席による情報は3割となっているが、その同窓会への出席状況は幅が広く、理由も多様で、高齢でもなお元気に出席する卒業生もいるが、この世代としては高齢化や病気などが出席にブレーキをかけつつある側面もみられる（表 D-30）。いつまでもお元気で愛大史の証人であって

表D-21 [E9] 就職先での愛大卒の意識

意識レベル	社会学科	他学科
1. はい	① 5人	② 3人
2. 少し		
3. 意識せず		1

<理由>

① 地元大学からの新卒者として。

明治生命では愛大が指定校だったので、
先輩たちの出身地が各地に広がっていた。
学門が仕事に役立ったから。

関西では愛大がまだ十分知られていなかった

② 愛大卒の先輩が職場に沢山いたから
現場ではまだ教育技術が不十分だから
母校の出身者として。

(アンケートより作成)

表D-22 [E13] 他大学卒と比較した

愛大卒業生の評価

社会学科

・自由な思想と発想
・相対的に優秀だ
・ふ つ う

他学科

・ほとんどの卒業生は
評価されていた
・古い卒業生は総じて
しっかりやっている
・プラス評価である

(アンケートより作成)

表D-23 [E14] 愛大卒業生の特性

社会学科

・自由な思想と発想
・ねばり強さあり

他学科

・ふ つ う
・自己主張に遠慮傾向。
・考えた

(アンケートより作成)

表D-24[F.1] 愛大設立趣意書への反応

社会科学	
・ 職場改革に積極的になった	
・ 大いに影響を受けた。	
・ 職場での国際交流をすすめる 上で大いに役立った。	
・ 国外で学び、東日外国人と仲良 くなった。	
・ 意識していなかった	
・ ふ つ う	

他学科

- ・ 自由・受難の鐘のところに付された
設立趣意書はくり返し読んだので
人生に強く影響した。
- ・ 旧制中学時代の軍国少年の自分にと
って、新憲法下での新たな教育
に感化された。
- ・ 文字通り受け入れて自ら実践し
てきた。

(アンケートより作成)

表D-26[F.3-2] 入学直後の市民との

交歓交流会について

認知レベル	社会科学	他学科
1. 知っている		1人
2. 知らない	5人	3

(アンケートより作成)

表D-27[F.4] 「愛大事件」の認知

認知レベル	社会科学	他学科
1 よく知っている	① 1人	② 2人
2 多少知っている	③ 3	④ 2
3 ほとんど知らない		
＜受けとめ方＞	計 4	4

- ① 学内研究に反する事件
- ② 卒業後、先輩たちの作品を読み、先生
方の努力に敬意をもった。
- ・ 在学生として抗議し、市民への宣伝
活動を行った。
- ③ 大学の自治、自由を犯す行為が發生
- ④ 教職にどうかかわれるが心配した。

(アンケートより作成)

表D-25[F.2] 東亜同文書院出身や外遊の

学校からの編入生との交流

	社会科学	他学科
1. 交流があった	① 1人	② 1
2. 少しあった	③ 2	④ 3
3. な かった	3	

＜その内容＞

- ① 同窓会での交流
- ② 直接指導を受けた。また自宅に数年
間、数人の編入生が下宿をしていた。
- ③ 県方の同級生仲間について交流した。
- ④ 編入した仲間や夜間生とも交流した。

(アンケートより作成)

表D-28[F.6] 愛知大学への関心度

関心度	社会科学	他学科
1. 大変関心あり	① 3人	② 2
2. 多少関心あり	③ 2	1
3. ふ つ う		④ 1
4. あまり関心ない		

- ＜理由＞ ① 県方に多くの同窓生がいる、
会社にも多くの同窓生がいる。
同窓会活動(役員)としている
- ② 毎 書橋校舎「英文会」に出席
愛大の旧教職員であったので
- ③ 母校の発展に関心あり。
- ④ 他に教員志望者があり、心配した

(アンケートより作成)

表D-29【F.8】 愛大情報の入手先(複数回答可)

入 手 先	社会科学	他学科	計
1. テレビ、新聞	1人	2	3人
2. 大学のホームページ		1	1
3. 「愛大通信」	3	4	7
4. さまざまな会合	1	1	2
5. 受験雑誌		1	1
6. 同窓生	2	1	3
7. 同窓会報	2	4	6
8. 愛大新聞			
9. ほ か			
計	9	14	23

(アンケートより作成)

表D-30【F.9】 同窓会への参加状況

参加しますか	社会科学	他学科	計
1. はい	① 2人	② 1	3人
2. よく			
3. 時々	③ 2	④ 1	3
4. いいえ	1	⑤ 1	2
計	5	3	8

<理由> ① 東京のゴルフ会出席

支部総会で大学側から動向を知る

② 中国語を学んだ同窓会(同学会)を通じて

③ 高齢化で知人が減少してきたため

④ 「英文会」は毎年出席している。

⑤ 病氣治療のため

(アンケートより作成)

ほしと願いたい。またあわせて、同窓会の活発化のために、同窓会の魅力アップについての問（表 D-31）に、会員の年齢差による意識の違いを認識し、それへの対応に大学との共同路線の必要性を説いているのは、長老会員の年の功であろう。その際の会費の年齢を考慮する方法は他学部でも挙げられていた。そして情報から漏れている会員への情報提供をこまめに実施することも指摘されている。宝飯郡の会員へは一切情報が来ないという他学部の卒業生からの指摘もあったのを見ると、同窓会の仕組みの検討につながるかもしれない。

アンケートも終盤、「愛知大学をどうみるか」については、「今のままでよい」、あるいは「経営の安定を」、という意見があり（表 D-32）、「後輩たちへ伝えたいこと」については、大学の設立趣意書の理解や愛知大学史を学んでほしいという願いが見られ（表 D-33）、これは他学部卒業生の強い願いと共通する。

そして「愛知大学から得たもの」（表 D-34）については二人の回答のみではあるが、見事に「自由な発想・精神」に集約されていて、他学部とも共通する。

最後に、人生の満足度（表 D-35）とその愛知大学との関係（表 D-36）を問うた。前者は「まずまず満足」以上、後者は「多少関係」以上が多く、人生の満足度と愛知大学との関係性がうかがわれる。それを相関図で示すと図 D-5 のようになり、標本数は少ないが、ほぼ右上方へ伸びる傾向線は正の相関関係を認めてよい。これも他学部と共通する。大学の機能と存在感が認められたことになる。

7. おわりに

昭和 34 年の愛知大学卒業生の中では、旧制大学から新制大学へ移行した中で誕生した文学部は新制大学学部の新しい文化・教養部門の強化として誕生した。これは愛知大学の本間学長はじめ指導者たちの卓見であった。しかし、戦後のまだ日本経済、社会が動き始めたばかりの時期では、戦災復興や食寮不足という基調にあり、文化・教養分野の学問は少数派で、志願者も少なかったのは当然であった。それゆえに、そのような中で、この文学部へ飛び込んできた学生たちは、学問に飢えた若者であり、少ないアンケート数ではあるが、それが個々に伝わってきて、純粋で情熱的であったように見える。その後の高度経済成長期以降の文学部の志願者の急増ぶりを見ると、ようやく東海地方にも文化・教養の波が押し寄せてきたことがわかる。筆者は昭和 41 年にできた文学部地理学専攻に昭和 54 年（実際はその前年）に着任したが、当時定員 15 名のところへ毎年 300 名ほどが志望してきて、最高人数でほぼ 400 から 450 名が連年志願してきた。入試の採点時に合格点を 1 点下げると、それで定員をすぐオーバーし、苦勞したことなどを思い出す。その後、有名大学の教授になって実績を積んだ教授が、学会の懇親会の席で、愛大の地理学専攻へ 3 年間チャレンジしたけど入れてもらえなかった、と挨拶にきたことがあった。「すいませんでした。まあ 運みたいなものですね」と答えたが、きっとそれをバネにして頑張り、大成したのだらうと思った。この時期、私学の地理学専攻の中で、愛知大学は明治大学に次いで 2 位だと受験誌編集者が教えてくれた。

経済発展が文化や教養分野に新しい世界を生み出し、愛知大学文学部はこの分野では東海地方のパイオニアになったと言えた。その例を愛大文学部の発展過程からうかがい知ることができる。

今回の文学部卒業生からの回答者はまだ

少なかったが、東海地方の文化・教養分野を切り開いた先駆の卒業生であるという視点から見ると、個々の回答も生き生きとしてくる。そんな目で文学部の創設期の卒業生を改めて見直したように思う。

表D-31〔F.10〕同窓会の魅力アップ法

社会学科	・若い卒業生の意識低下が気になる。 →大学の協力も必要だ。
他学科	・新卒者や80代以上の会費を安くすれば参加者が増加するのでは。 ・各地に散在する卒業生への連絡をゴソゴソとやって欲しい。

(アンケートより作成)

表D-35〔F.12〕人生の満足度

満足度	社会学科	他学科	計
1. 大いに満足	1人		1
2. まず満足	4	3	7
3. ふつう		1	1
4. 少し不満			
5. 大変不満			
計	5	4	9

(アンケート作成)

表D-32〔F.10-2〕愛大をどう見るか、提案も

社会学科	・今で良い ・安定した経営に努力を
------	----------------------

(アンケートより作成)

表D-36〔F.13〕人生の満足度と愛大卒との関係

愛大卒との関係	社会学科	他学科	計
1. 大いに関係		2人	2
2. 多少関係	4人		4
3. 普通	1	1	2
4. あまり関係ない			
5. 全くない			
計	5	3	8

(アンケートより作成)

表D-33〔F.11〕愛大の後輩たちに伝えたいこと

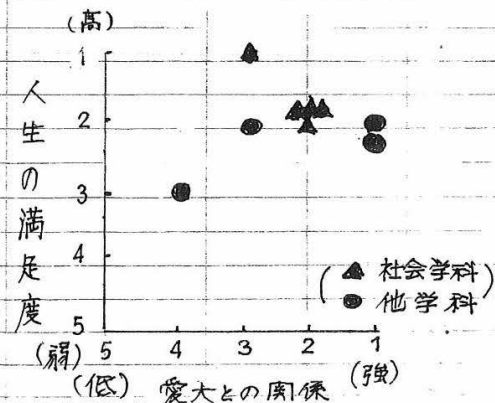
社会学科	・大学の歴史を学んでほしい。
他学科	・大学の設立趣意書を読んでほしい

(アンケートより作成)

表D-34〔F.14〕愛知大学から得たもの

社会学科	自由な発想
他学科	自由な精神と忍耐力

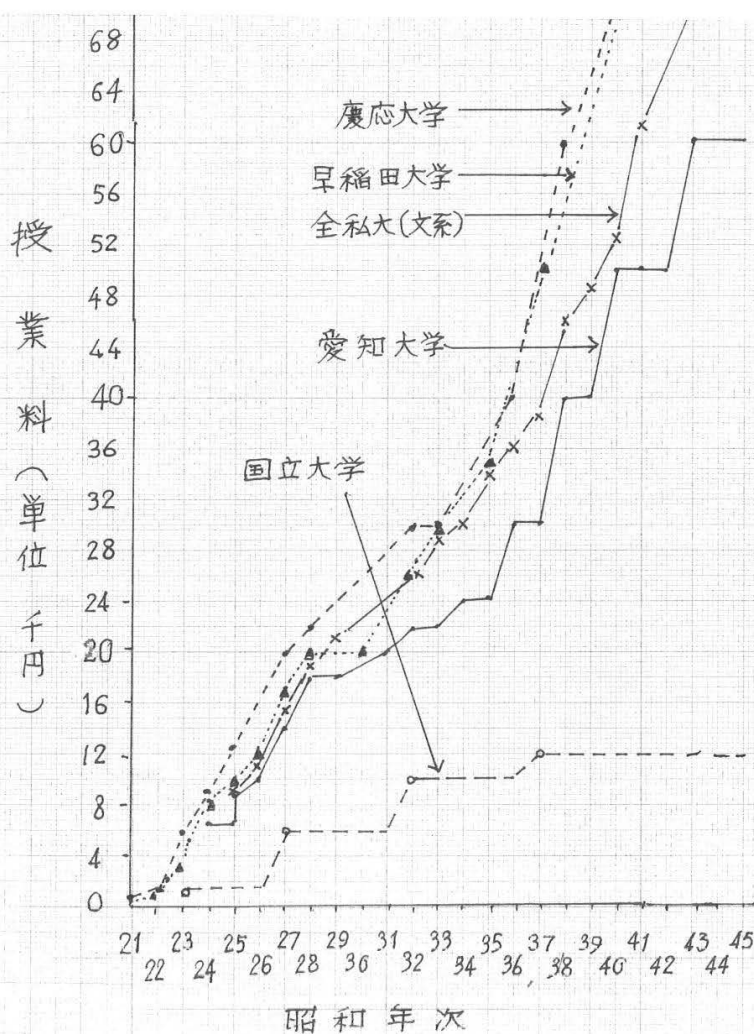
(アンケートより作成)



図D-1.人生の満足度と愛大との関係

〔付記〕旧制、新制にわたり、愛知大学への志望理由の一つに「学費の安さ」が挙げられていた。実質的オーナーがおらず、教員が経営を担当する仕組の中で、戦後の勤労青年たちへの勉学の機会を与えようとする愛知大学の基本路線があったためでもある。そこでその実体を把握するため諸データをも

とに下記の「参考図」を作成し、示した。それによると、やはり愛知大学の授業料は他私大に比べ、かなり安く据え抑えられ、経営努力もしていたことがうかがわれる。その点では愛知大学が、東海地方の高等教育を支えていたことがわかる。



〔参考図〕愛知大学と各大学の授業料変化
(愛知大学ほか関連資料より作成)

【卒業生アンケート調査報告特集】

終章 結びとあとがき

1. 愛知大学史の見直し評価

以上、愛知大学の創設期の雰囲気の違い、昭和 34 年の卒業生までについてのアンケート調査の結果をそれなりにまとめてきた。その理由は『愛知大学五十年史』が、もっぱら大学の組織変更や大学側が見た出来事などは記述されたが、学生や卒業生に関する記述はほとんどなく、どのような学生が育ったのかという観点がなく、しかも現在、当時の卒業生はすでにその多くが他界しており、そのような中で、なお元気な方々からまず、当時の学生生活や就職後の生き方などと愛知大学とのかかわりを聞いておかないと、愛大の歴史記憶そのものも消えてしまうのではないかと危惧したことにある。実際、同窓会名簿を用いて郵送法で行ったが、多くの卒業生は他界したり、行方不明のため、多くの郵送分が戻ってきた。実施が 10 年遅かったと実感した。

しかし、回答数は限定されたが、このアンケート内容は貴重であり、これにより、新たに多くのことが明らかになった。

まず、全体として見えてくることは、卒業生たちの大学生活はまじめで、まぎれもなく愛知大学とともにあったことである。その若干を指摘すると、まず、開学開講後の 2 か月足らずの間に、大学側ではなく、学生たちが主催してまだ戦災のあとの匂いも残る豊橋市街地の焼け残った豊橋市公会堂もメインに、愛知大学のグラウンドも使い、市民との文化交歓祭を行ったことである。仮装行列、講演会、演劇、音楽、そして愛大グラウ

ンドでは、各種の市民も加えた運動会も開催して、多くの市民も参加した。最終日は東京から古関裕而とコロンビア楽団の演奏で、伊藤久雄らの歌謡ショウもあり、最後に公会堂の最上階に立って挨拶をした書院から学部の最上クラスに編入し、のちに外交官になったまとめ役の小崎昌業は、市民数千人を前にお礼の挨拶をしたという。小崎は初の学生自治会長に就任した。これによって国外や国内から集まった出自の違う学生たちが、初めて心ひとつにしてこの交歓祭を盛り上げた。まさに愛知大学の設立趣意書に述べられた大学の「地域文化への貢献」を実践したのであった。ただし、この舞台裏では、書院から編入学した最上級の学生たちがその準備に東奔西走したこともアンケートを寄せた卒業生が記している。書院から編入学した学生たちは、上海で学徒出陣する前の書院生活をしたときに、書院の伝統の仮装行列や運動会、クラブ活動を経験しており、その経験を伝え広げることでもスムーズな運営を実現したものといえる。

そうみると、愛知大学の最初の各学年が多様にそろった学生たちを最初にまとめたのは、書院からの編入学生たちであった。書院学生の経験が愛知大学の創設期を飾ったといえ、書院の伝統と経験が愛知大学を学生の手で開幕させたといえそうである。愛知大学当局が 1 周年記念行事を開催したのは、この半年後の昭和 22 年 11 月のことであった。

二つ目は、「愛大事件」についてである。

その経過などは本文中でもふれたので、繰り返さないが、この件によって、愛知大学はマスコミなどの外部からの風評に見舞われた。例えば、赤い大学とか偏向学生などの風評がそれで、中には、就職にも影響があったという卒業生もいた。それは今日にも引きずっているのではないかという見方もあるが、アンケートからは、当時の学生たちは、事件を目の前にして、警察権力からの、大学への自治と自由への侵害だと強く思っており、主張していることがわかった。警察や風評に負けない理性を持っていたことがわかる。そのために、最後まで学生を信じ、弁護し続けた本間学長を中心に、その後の小岩井学長や脇坂学長の思考や行動に強い共感を抱き、愛知大学を教員と学生が一体感を形成して支えていたことがわかる。

これにより、愛知大学は、ほかの大学では見られない教員と学生が一体となった共同体を生み出したと言えた。のちに全国の大学が学生運動に席卷され、愛知大学もその運動に揺れることになるほぼ 15 年前のことであった。「愛大事件」当時のこれらの背景には、学生たちの多くが想像以上にまじめによく勉強し、教員たちとも積極的な交流をし、志を強く持っていたことが、多くの回答から読みとれる。「愛大事件」をめぐる風評は、学生たちにとって、より風評であるにしかすぎなかった。そこに、愛知大学の学生たちの力量が見られた。

そして三つ目が、これがもっとも重要な基本であったこととして「愛知大学設立趣意書」に対する卒業生たちの強い共感と理解であったことが明らかになったことである。それは戦後の新たな出発のための基本的な平和世界への貢献と、そのための教養

に裏打ちされた「国際人の養成」と「地域文化への貢献」という愛知大学の使命感ともいうべき原則方針を、GHQ の支配下の厳しい環境の中で堂々と宣言したことである。

日本人をほぼ 4 島に閉じ込め、国際活動はまさに禁じられ、しかも日本人の自立的行動も押さえこまれたなかでの、新たな時代の日本の展望を先読みした宣言であった。その背景には書院時代の国際感覚を持った設立者たちの見識があったといえる。

今回の卒業生たちの、随所で表現している「愛知大学の歴史を学べ」と「愛知大学設立趣意書」をぜひ読むようにとの言葉は大きな重みがある。それに沿って、学生時代を学び、社会へ出てからの自己の生き方の指針となったという回答は、こんにち、改めて新鮮である。在校生や卒業生だけでなく、当時とはほとんど人が入れ替わってしまった大学当局、教員たちにも「愛大憲法」とでもいうべきこの「設立趣意書」の精神を伝えたいと発された言葉であり、愛知大学の背骨を継承し、より発展させてほしいというメッセージであるように受け取れる。実際一つ目の、学生が実現した画期的な「豊橋市民との交歓祭」はまさにこの精神の具体化であったし、二つ目の「愛大事件」に対する学生側の権力へのクールな反応と信頼できた大学当局への強い共感および一体感は、これもまた「設立趣意書」の精神によるブレない対応としてあらわれたのであらうと思われる。今回対象とした卒業生たちの多くは、それが心身ともに染みこんでいたことを感じた。

以上、今回のアンケート調査を整理して、多くの卒業生からの貴重なご意見、ご回答を読ませていただき、まとめた立場からの

感想をかかせていただいた。不十分な点は多々あり、それらも含め、またいろいろご意見を頂けたらと願っています。

あらめて、ご協力いただいた卒業生の方々に厚くお礼申し上げます。

2. お詫び

最後にお詫びです。昨年(2020)の3月に行ったこのアンケートは、今回のまとめでは、旧制大学、新制の法経学部の経済学科と法学科、文学部、のまとめのレベルまでで終わってしまいました。本来、短大、女子短大、二部(各学科)なども加えるつもりでありましたが、旧制大学からスタートした愛知大学では、初期のその当時において、多様な編入や入学が混じり、転学科や転科も多く、それらを正確に把握することはアンケートだけでは難しく、そこで確認のため、大学史、卒業生名簿などを援用して、それぞれの移動系譜データの調査を行なわざるをえませんでした。その時間がかかり、また、学部レベルのまとめも、今、この3月6日までずれ込んでしまっています。学部以外については表化の整理はできていますが、時間の関係で次号にまわさせていただくこととしました。この点の事情をご理解ご了承ください。きたくお願いいたします。

【付記】

最後に一つ付記しておきたい。

それは、本文中のアンケートの回答になかで、本学を志望したり、入学したりした「理由」の中に、「本学の授業料が安かった」という回答が散見されたことについてである。では現実にはどのくらいの差額であったかを他大学との比較の中で示したデータは

これまでなかったので、今回各種資料を求め、それをグラフにして示した。それが、次の付図である。ここでは愛知大学との比較のために、私学では、慶応大学と早稲田大学、それに全私立大学の文科系の平均授業料、そして国立大学も参考に比較した(222ページ参照)。

これを見ると、国立大学を除けば、愛知大学の安さがよくわかる。これは、愛知大学が、戦後、勤労学生が多い中で授業料を安くすることで、多くの勤労学生にも進学機会を与えようとする理念があったため、名古屋校舎進出もその理念の下で行なわれた。また、愛知大学は、ほかの私大のような経営者中心のオーナー制ではなく、実質的に教員の合議によって経営する体制をとっていたこともあり、広告費を抑え、過大な設備投資を避けるなど、経費の削減によって、学生の授業料負担を抑えることができていた。たとえば、「青空に下にグラウンドがあれば、体育館はいらない」という評議員の意見は昭和40年代に入っても生きており、戦前から残されていた古い講堂がその代用として使用されていたほどであった。その代わり、図書館の充実はその後にかけて最優先されたところもあり、オーナー大学ではない教員や学生重視の特徴が見られた。

しかし、その後、特に経済成長にともなうインフレが始まると、昭和30年代の物価上昇期に、他大学との差額が顕著となり、とくにこの時期に愛知大学の授業料の安さが注目されたのであろう。それはその後も続いた。しかし、授業料は経営の根幹であり、他と同様に上昇するが、他大学が毎年といっていいほど徐々に上昇させたのに比べ、愛知大学は学生にも配慮しつつ我慢しながら

もしだいに学生数も増え、設備施設の充実も必要となり、経費が膨らむ中で、グラフにみられるように、我慢できずに一気に上げるという階段状のあげ方が特徴的になったといえる。授業料値上げは、それまでの大学側と学生側の暗黙的な理解、了解の上で行われていたが、急激なインフレの進行で大学側は、経営問題が生じるようになり、特に昭和 40 年代初期には次々と一気の授業料上げ幅を提示し、学生側もそれに抗議する

ようになった。学生大会や、学生ストライキで両者の間は決裂し、愛知大学では、この授業料問題が、その頃から全国的に広がりを見せてゆく学生運動の、愛知大学における発端契機となった。「授業料の安さ」は、愛知大学の代名詞にもなるほど有名になったが、経済の高度成長期が社会経済を大きく変質させる中で、その後の愛知大学にも大きな課題をもたらしたといえそうである。